

白泥の焼物を數多出してゐるところで、昔から江南地方に於て最も焼物の本物として名高い處である。奥地の景德鎮あたりのそれよりも親しみの多い街である。

斯う云つた大都會、大工場を控えてゐるターウ（太湖）が何故その様に怖がられてゐるか不思議な位である。併し上海方面では、城内と云はず租界と云はず、割りにその地方の片田舎を恐れ過ぎてゐる傾もある。自分は一應その各方面のことについて注意は聞いて居つたけれども、豫ねて抱いてゐた太湖巡りの望を果すべく最近にこれへ單身出掛けたのである。

太湖の湖上、又その沿岸地方が海賊の出沒で人の恐れられるといふ事に付ては次の二つの事實を考へてゐなければならぬ。一つはその大金を持つて歩くことの禁物なこと、今一つは相手に對してこちらから常に柳に風の態度、無抵抗主義を執り、親しみの情を以て接すること。

この二つが何よりも肝腎なモットーであると自分は長年信じ來つてゐる。又これで以て、四川の奥地であらうと、廣東であらうと、マレー、スマトラ地方であらうと、有ゆる所をあるいてゐる。唯だこれがピストルよりも、仕込杖よりも何よりも大切なものと考へてゐる。

北滿の天地で事變前に中村大尉が匪賊の爲めに殺されたのも、實はハルピンの金にして約一萬圓、これは馬を買替へる爲めの金であると或る者は辯じて居つた。一萬圓の現金を荷物にして

シア、支那兩通譯を伴ひ、堂々と一行を組織して動く云ふやうな方法を探つたのである。若しそれであれば初めから命を取られる爲めに旅行して居るやうなもの云へるのである。寧ろ馬が買ひたいならば、その買つた馬屋の主人を共に旅費をやつて連れて歩き、ハルピンに歸つてからその現金に更に酒手を加へてやることにすれば宜いのである。現金を渡した後に、馬屋の主人がもし殺されることがあつたとしてもそれはこちらに關係が無い。

江蘇省は太湖の洞庭にどれだけ海賊が出沒してゐるか、斯う云つた事の話は自分に問題でない。たゞ何處までもその地方の山寺を尋ね、或は董其昌の墓を尋ねなどするとか、又その地方の景色の佳い山水名勝を探るとかいふ事以外に何等目的を持つてゐない自分は、色々耳に挾んで居る事もあるが、總べて念頭に止めないで、春三月の彌生の好季節に之をあさるべく出掛けたのであつた。

從來、土匪にしる、海賊にしる、その之に會つた場合はどうする。自分はいつも無抵抗主義でむしろ進んでその仲間に加へて貰ふか、さもなければ見えない處に自分の體を隠して一時を遁れるの外に方法ないとしてゐる。その遁れ方については次の二つの方法がある。

一つは支那の習慣として行きなり水の中に體を入れることをしない。海水浴などはあちらの人

は甚だ好まない方であるし、尤も池の水、河の水に這入ることは或る特殊の百姓の子供は別であるが、普通にはこれは考へられてゐないのである。それ故よく匪賊に襲はれた時などは蓮池の中に身を隠し、蓮の大きな葉の下に静かにして隠れてゐる、これで連中の行過ぎてしまつた後に静かに圍りを見定め、行動を始めるといふやうな例を執つた者がある。

今一つは農家の屋根裏である。これに隠れることである。北支那に在りて自分の或る友人自南翁と云へる僧侶上りの老人が、北方で高粱畑の中で匪賊に出つくはし、或る農家ににげ走つてこゝに隠れた。するとその農家が又匪賊の群に襲はれた。

頃は秋の暮れで高粱の莖の頭が束ねられて、その下の方が擴げられ、丁度三角形をなしてあちらにこちらにと並べられて居たのである。

之に逸早くも隠れて小さく縮かまつて居つた。すると門を破つて雪崩込んだ土匪の手合は、中庭のこの並んで居る高粱を銃身を以てパン／＼叩くのである。「この中に這入つてゐる筈だなあ」など云ひながらあちらこちらを叩く。逆も生きて居る氣持はしなかつたのであつたが、幸にして束の數がかなり澤山あつたので遂に當人の隠れてゐたのはどうしたか、見遁された。さうして土匪の手合は略奪を恣にしたのち門を立ち去つた。

土匪にして略奪に来る手合は捕物の少かつた場合は大抵二度目に又引返してやつて来る。第二次的の悪戯を繰返すものだとその事を豫ねて知つてゐた自南翁は、必ず後で来るだらうと見てゐた。そこで今度は壁に傳うて屋根裏に隠れ、横木の丸太の隅つこにそれこそ鼠の如くに小さくなつて身を縮かめてゐた。すると案の上數名の土匪が再び入込んで来て今一人人間が居る筈だとばかり又高粱を雜倒して行くのである。

一伍一什の行動が屋根裏から、手に取る如く分つて居るのであるが、幸にして土匪の一人として屋根裏に視線を注ぐ者がなかつたので命拾ひをしたのであつたと言つてゐた。

斯様な土匪に出つくはした時の取敢ずの避難方法があるが、こは一つは頓智であり、一つは腹である。行きなり出くはした時は全く方法は立たない。たゞ併し相手は命を取るのが目的ではななくして、金品を得るにあるのである。だからその時は色々ポケットへ手を突込んだりする。でもその時小面倒な事をするでない。こちらで隠しに手を入れれば、ピストルでも出すのかと疑はれて、却ていきなり逆にやられることがある。

それ故、初めから觀念して左右の両手を成るべく高く揚げて、大の字の形をして見せるに限る。これは西洋で親しき友に會つたとき、兩方が素手を出して握手することが自分の手に武器一つ持

つてゐませぬといふことの表示方法であるさうであるが、支那に在りては兩手を土匪の前に擧げてしまふことは自分の身を自由に委せる。身體検査、思ふまゝ勝手たるべしとの意味を示したことになるのである。すると、相手は上着の紐釦から下の釦まで全部手速く外し、さうして極端な場合には、靴まで脱せたり帽子の中まで調べたりなどして取れるだけの物は取つてしまふ。併し又そのとき、半面に事情を語れば自分で領事館まで行く間の旅費であるとか、多少の小遣とかは割戻して呉れと言へば氣持よく渡しても呉れる。さう徹底的に憎々しくやるのではない。況んやその命まで取つてしまふといふことは先方としては意味を爲さないのである。尤も金の指輪を嵌めたり、金縁を掛けたり、或は前齒の金冠を現はしたりなどしてゐると、その黄金欲しさに悪戯をしに来ることもある。時折り戦争の時分に將校などの死體の左の頬べたに二寸大の孔の穿たれてゐるのを見ることがある。これは大白齒のあたりに金齒のあつたことを知り、それを釘抜きで取る目的でやつたのである。

斯様に見て來ると、假令土匪にせよ、兵匪にせよ、又これが海賊にしても、その間の心理状態又その略奪方法の極意はさう變つたものではあるまい。この位の所を最大限度の出來事として考へ、覺悟を決め、さうして桃花流水鱖魚肥ゆる佳節に山水明眉のターウ（太湖）を指して上海を

船出するといふことは半面から言つて風流な思ひ付であると自分は考へたのである。

27 海賊村運河行

海賊村、洞庭に出掛けるといふことは、上海はもとより、蘇州あたりの日本人在留民の間でも殆んど口にする者も無い。洞庭と云へば普通湖南省の洞庭湖、所謂詩に見えてゐる洞庭の秋月などを考へて如何にも大きな風流な處と考へられてゐる。

江蘇省の洞庭も、山水の美に富んでゐて、風流な點は優ることも劣ることはない。湖南の方の洞庭は纏りの付かない位大きい、江蘇の洞庭は青螺碁布銀盆の平面に如何にも平和の氣を漾はせてゐる。そこは全く江南の絶景と云つて宜い。昔からの傳説に依ると、湖南の洞庭の島、君山が湖中に盛上つて現れた時、その代りに江蘇の太湖が陥没し、そしてこれに水が溜つた。それでこの洞庭が出來たのだと謂つてゐる。恐らく舜の時代頃からして傳へられた古い傳説が口碑に残りこの水郷の話を生み出したものだと思はれる。

斯様な風流味を加味して太湖を考へることは、本來の山水を求める游客の最も好ましい所である。けれども、さう言つた香氣な遊歴振りは、迂つかり上海で普通の連中に話したところで何等

理解がない。たゞ身の爲めを思うて言つて呉れる者は、大事を取るばかりで何を苦しんで死地に向はうかなどと之をやめさせる言葉を餞けにして呉れるだけのものである。

この太湖の洞庭に向ふには、先づ順路として上海北停車場から車上の人となり、蘇州に向ふのである。ところが上海蘇州間の汽車は自分はこれまで幾十回となく乗つてゐるので、普通の江南の沃野の景色、柳が風にゆらぎ、畑の中に煉瓦で積上げた墓陵の散在し、茶種の畑が時折見えるといふ位のものである。他にどうといふことはない。殆んど上海、杭州、西湖の路邊に見るもの、或は錢塘江を渡つて寧波の田舎、天童山方面へ出掛ける時に見る眺めと何も變る所がない。そこで太湖行を思ひ立たうと云ふには、蘇州に行く道を變へ、特に方法を變へて、上海から舟行をして見た。小舟に乗つてわざ／＼迂回し、運河を舟行する方法をとつたのである。蘇州行の船は上海ガルデン・ブリツヂの下を流れる蘇州河、パータチャオ（白太橋）の碼頭から船出するのである。色々之には船があるのであるが、自分の乗つたのは臺灣人の經營する戴生昌の輪船同榮號と云ふのであつた。これは曳船であつて、初めは一艘の輪船を繋いで居つたが、後にだん／＼船着き々々で殖えるに従ひ、その船の數も殖えて來たのである。

船出に際して、戴生昌の店に行き、その蘇州行きの汽輪に乗船したいことを申込んだ。ところ

が、係の番頭の言ふには、貴下は五六寸の小さい手提を一つ持つてゐるばかりである。何等大行李があるわけでもない。そのやうな身輕いのでたちならば北停車場から汽車に乗つて行つたら宜いではないか。

それに船で行くと、二十四時間からかゝる。殊に今は田舎に海賊が出るので、近道を取るわけに行かない。大迂りして安全な道を取つて行くのであるから、一層餘計の時間を要する。汽車ならば急行で二時間足らずである。ゆつくり行つても三時間内で着く。それを何を苦しんでわざわざ船にするのであるかと言つて頻りに親切な言葉を呉れるのである。

自分は答へた。誰れが何と云つても船の方が好きである。ゆつくりと寝て行きたいんだ。又船を楽しみたいのだ。又船の中で色々の乗合客と話を聞いたたり、風物を語り聞かせて貰つたりするのに興味を持つてゐるのだ。汽車は度々の經驗があるので興味がないのだ。云々といふ意味の事を言つた。すると又別の店の者を自分のところによこして、船には布團も要る。枕も要る。そして飯は甚だまづい。さういふことは差支ないのですか。

更に又云ふ、船には一等二等三等とある。どれにしますかなどとだんだん具體的の案を出して來る。聲を低めて言ふには、餘りこゝには好い客は乗らないからその邊も御辛抱なさるつもりで

すかなど、可なり突込んだところまで親切に言うて呉れたのである。

自分ば、どう向ふのものが言葉云つて呉れても、こちらの腹は變らぬ。同榮號の船客として行くつもりなのであるときめて居つたので、汽車の方に全然變更するの氣持のないことをきつぱり答へた。そうして船の二等に座席を求めたのであつた。

二等とは言はないで、あちらではカツアン（客艙）といふのである。一等はカウンツアン（官艙）と云ひ、三等はトンツアン（統艙）と云ふのである。一等の方は一人一人であつて、監獄の獨房の式に一人ぼつねんと一つの小さい部屋に入れられてしまふ。それだけで人と話すことも出来なければ面白味が無い。その上比較的戸締りまでが嚴重であつて、いつも出這入を自由に氣儘にすることがむづかしい。むしろ厄介である。

三等の方は屋根の上である。眞夏ならばこれも宜い見晴しは自由にきく。けれども、夜がたゞ寒い。風を引いても困る。そこで結局二等の客艙と云ふに決めたのである。

午後の三時に船出するといふ揭示が会社の岸の黒板に掲げられてゐたにも拘らず何分水上、大小の船が幾百とゐるので、舷々相摩し、きつちり詰つてゐる。前の船が動かないことには迎も何とも仕様がな。どれもこれも皆荷物を満載して居る。或は石を積んで居るのがあり、或は茶の

箱をウンと積んでゐるのがあり、雜貨があり、穀類があり、セメントがあり、大變な盛な光景である。

汽笛をあげ前の船に進路を開けるやうに警告をしてゐるのであるが、その前の船が又更に同じやうな警告をしてゐる。互に吹鳴合ふ聲が耳を聳せんばかりと云ふ光景である。

けれども一向何等の答がない。ブリツヂの丁度真下にまで出掛けるのが、僅か二丁足らずの所であるが、そこに約二時間半も掛つた。こんどは橋の下で更に黒煙をあげてゐるが、又そこで頓挫した。そこからは今はソヴェート・ロシアの赤旗を翻してゐるあの露國の領事館の直ぐ下に出でワンプ（黃浦）の江上を右にコースを取り、各國の軍艦、汽船、民船、筏などの去來する間を縫ひ、蘇州行の運河に向つて進むのである。ところがそれが容易なことでない。外海に出る支那船があり、アメリカから這入つて來たダラー汽船があり、イギリスから這入つたブリユーファネルの貨物船があり、日本の軍艦があり、米艦があり、英艦があり、商船會社の船があり、日清汽船あり、招商局あり、その輪船は數へ來れば際限がない。凡そ地球上の有ゆる國で船を持つてゐる國は皆此處へその船影を現はしてゐるのである。併し海賊村へ向つてコースを取つてゐる船はと云ふと、我がこの船だけであると思はれる。

ワンプ（黄浦）の江上でまだ薄暮と云ふでもなかつたが、簡単な支那飯が運ばれる。四五人宛八仙卓に着いて共に竹の長箸で突き合ふのである。この食料は、一回小洋の二十錢である。この飯は何時も鹽辛く田舎料理そのまゝである。川魚の味は大味である。迎も日本の支那料理屋あたりで出す料理振りとは雲泥の差がある。けれども行先の事を考へるとこれだけの御馳走も有難いものと思つて舌鼓を打つのである。船客共は何れも飯が済むと夜具の相談を受ける。さうしてそれ／＼定められた席へ寝る支度がされるのである。多少隣席の乗合船と言葉を交し合つてはゐたけれども、何分田舎船の尻上り言葉で速口ではあるし、相手は日本語も英語も解らず要領を得た／＼うな得ないやうな話をしつゝ、船はだん／＼と北に進む。さうして何時しか睡眠に這入つた。夜半枕で大きな吹鳴聲が始まるので目を覺まして見た。すると河は大分溯つてゐるし、豫ねて上海事件のとき日清汽船の高橋船長の敵弾に中つて黄浦の露と消えたのもこの邊りであらうと思はれたが、空には朧月か仰がれ、岸は黄浦から入り、運河の合流点となつてゐるところ、こゝはあたりの光景から推して税關の控えてゐる處らしく思はれるのであつた。

28 黄浦龍華を西へ

支那船の夜中の有様、殊に見ず知らずの他人、所謂吳越同舟の連中が様々の寝相を現はして布団に包まり、デブ／＼した首の太い姿をカンテラの明りに薄ぼんやりと見せながら、寝てゐる光景と云つたらどうであらう。普通田舎の旅に慣れない者は之を瞥見したゞけでテツキリ海賊の寝てゐる姿と見るであらう。

平素夏の夕、上海は租界倉庫街界限には苦力、土方、ルンペン達が着のみきのみ、或は上半裸で路傍にゴロ寝してゐる様を見る。これなどは可なり紳士淑女の顔を反向けしむるものであるが、それらと先づ相似たものであると云へる。

平常日本で宿屋に泊るにしても互に知らない人と襖一重で一と夜を越すだに、可なり氣持の變で薄氣味悪く感ずる者が多い。こは人情である。併し支那に行つて旅をなし、その乗つてゐるお客は多くは江南の百姓、或は商人達、又は僧侶と云ふ連中である。そこにさう取分けてどういふインテリ階級の居さうな様子もない。

又そこにさう云つた人があるとすると、それは汽車で行くに決つてゐる。荷物の多い客、或は時

間構はず行く客、又連河沿ひの村に歸る客などで満たされてゐると云ふのがこの舟である。寝た姿の氣味悪げに見える者がゐるなどはそれは慣れない人の目に映する一つの錯覺に過ぎぬ。上海の租界で、殊にフランス・タウンあたりで悪事をたくらみ、一つ騒動でも起して見ようといふのは皆ハイカラな立派な腕の人に多い。

斯う云つた山出しとか、土百姓とか云つた手台は先づ純朴そのものである。質素な太湖の地方の趣をそのまゝ身なりの上に現はしてゐるやうなものである。随つてその持ち物、荷物なども極めてぶつきら棒な外部が棕櫚繩で編まれた支那靴とか、又籐で粗末に編まれた長方形の箱とか又は紙包みを麻の織紐でひつ括つた手頃の荷物とかを持つてゐると云つたものが多い。

中には疊の七島の表を莫産に使つて、之で衣類その他を包み、綱で縛つてゐると云つたやうなものもある。見たところ日本あたりの船の客が持つ信玄袋とか又籐籠、ストケース、オペラボックスとかいふ小氣の利いたがつちりしたもの一つもありはしない。

又たまに側に立掛けてゐる洋傘などがあるが、之を見ても紺染の厚い木綿の不恰好なもので出来てゐる。ピツたり疊まれてゐたとしても、日本のたゞまれた蝙蝠の四五倍の大いさを見せてゐる。又油紙で出来た雨傘にしても日本の番傘に劣らないやうな大きいのを持込んでゐる。中には

三四尺もある長い竹の棒が見えてゐる。まさかにはステッキでもあるまいと思つて見てゐるとその一方に雁首が見えるのであるほどは煙管だなあと云ふことが分る。

斯う云つた持物の種類と、その文化程度のことを考へて見るに、船客の粒がどんなものであるか、略々察せられるであらう。部屋の一隅に嗚鳴聲の聞えてゐるのは、陸の税關から役人が乗込んで来て、さあ起きろ〜と言つて死人の如くなつて寝てゐる客を起してゐる處である。客は百姓育ちと見えて、揺つても突いてもなかく起きて來ないのである。

その隣には大荷物を開いて一々衣類などを臨檢せられてゐる客がゐる。別段その手廻りに税を課けようと思つて見てゐるわけでもあるまいが、その大荷物の中に阿片、銃器、彈藥類を忍ばせてゐはしないかといふ疑ひの目で見てゐるのであらう。

この頃上海あたりでは、お葬式の靈柩車のやうに見せかけて、實は死人を入れないで、中に阿片だの、彈藥などを入れて運んでゐるインチキ葬式がある。これは政府側ではよく探知してゐる。その爲めに最近日本人の某氏の葬式なんかも行列の進行が中止の命令をくらひ、一々調べられ、將に棺桶の釘を外して中を見せるといふ所まで來たことさへあつた。

後になつて當局は日本の領事館にわざ／＼謝りに來て、實は斯く／＼の類例が多い爲めにやむ

なくやつたことだと言つて、相濟まなかつたことの一伍一什を述べて居つた。

支那と云ふところは思ひもよらぬグロのお葬式を見るところであるから、斯ういふ場合に向ふ船客の荷物の大きい爲めその目で係り員から臨検せられるくらは無理のない事である。

ロンホウ（龍華）の夜の水郷はまことに詩的である。臘月は水に金波銀波を浮べ、邊りは物静かである。時刻は幾時を示して居るか、自分は時計を見る氣持さへもしなかつた。又何時であつたところで何も出来たわけでもない。客の多くは字一つ讀める手合ひでなし、又自分がつれづれだと云つても、日記をつけられる程の明りもなし、たゞ雑談をすればするだけのことである。それに互に見ず知らずの客ばかりである。多少話を掛けて見るにしてもまだそれ程馴染みになつてゐるわけでもない。

かう云つた支那の夜舟の情緒といふものは、先に望を持つてゐればこそ我慢も出来る。が普通かやうな田舎に這入る船の旅などとても、普通の日本人にやつて見ると言つて見たところで忍ばれるものではあるまい。

このロンホウ（龍華）の水郷は嘗つて日本の銀行會社員がハイカラなランチを飛ばし、こゝまで水を切つてやつて來たことがある。有名な桃花の畑のある所であり、又評判の龍華の高塔のあ

るところである。春の休みの續くイースターデーあたりには、我れを争つて此の方面へとピクニックに出掛けたものである。

ところがどうしたはづみか、そのときは、恐らく金をねだられたとか、或はランチを着けるべき處でない處へ着いたのであるか、日本人と土民との間に騒動が始まり、血の雨を降らし、桃花も見ずしてそこ／＼に波を蹴立て、歸つて來たといふ椿事もある。

折角の郊外の名勝でありながら、又折角の立派なランチを仕立て、遊びに行きながら、殺風景な悲劇を演じてしまつて引揚ぐるなど、まことに氣の利かぬ話である。かう云ふ話など色々思ひ返しつゝ暫し月下に江岸の夜景を眺めてゐたのであつた。春まだ浅く、夜半は猶肌冷氣を覺ゆるので、自分は船室に這入つて寝た。やがて船は汽笛が鳴り、龍華から運河を傳つて蘇州の水郷へと舵を向けたやうである。併しそれから先は船室で寝轉んでしまつて居たので、夜半いつしか税關らしい處に舵を停めてゐたやうであつた。けれどもその邊はどこか薩張り分らない。

豫て聞く、近頃運河に海賊の出沒があるので成るべくこの汽輪は、道は遠くこの安全な水路を取つて行くと言つてゐたが、我が船の通過した水郷の主な處は次に列記する村々であつた。

一、上海蘇州間の運河舟行の寄港碼頭

- | | | |
|----------------|-------------|--------|
| 一、上海蘇州河、白太橋、龍華 | 二、王家碼頭 | 三、閩行 |
| 四、德興(分水、龍王廟) | 五、大洋橋 | 六、爺涓 |
| 七、謝河塘 | 八、蘆處(煉瓦窰) | 九、三白塘 |
| 十、金家濱 | 十一、半邊街 | 十二、桃村 |
| 十三、桃村湖 | 十四、高池 | 十五、高池湖 |
| 十六、金鷄湖 | 十七、八里塘 | 十八、寶帶橋 |
| 十九、海關密渡(洋關) | 二十、盤門(日本租界) | 二十一、胥門 |
| 二十二、蘇州閘門 | | |

計三百六十支里

晝間なれば運河の水路のうちでも、處々に有名、無名の湖水の數多散點してゐるところや、その湖と湖の間を結ぶ運河のつなぎの處なども見られる。その幅は廣くてどうかすると或る處には、湖水を中心として運河が四方五方、六方、八方へと殆んど圓の中心から放射狀に蜘蛛の手を伸ばしたやうに伸び、大小を水路の發達させぬる處も見當たる。さう云つた田舎の僻地で水路の多く集まれる中心になつてゐる處は、恐らく又海賊などの出沒も多く仕事のし易い處となつて

ゐるわけであらう。

迂かり夜半下手に礎でもおろさうものなら、さういふ所から忍び込まないものでもない。見たところ船客の如くに見せて質の善くない者が乗込んで来るかも知れない。たゞ兵亂のあつた跡、殊に敗竄兵が武装解除をしないで片田舎へ歸郷する時、行きがけの駄賃にと計りあちこち發砲し又農家に、船に、倉庫にと、到る處にいたづら半分の略奪を稼ぎ行くのである。さういふ點が寧ろ平常の海賊よりも却つて物凄いわけである。

曾て日清汽船の船長松元翁が、湖南の洞庭を横切り岳州へ向ふとき、岳州の君山の近くまで來るとやはり敗竄兵に襲はれた。連中は船中へ乗込んで來て金庫から少なからぬ金を略奪し持つて行つた。そのときはピストルを持つて脅かして、金を出せよ。然らずんばこれだぞと云つて突付けたとのこと。そのときの實情を翁から自分は聞かされたことがある。斯う云つた運河に在りても香ばしくない事が時折ある。そのため船會社の方でも特にその安全な航路を選ばせて行くことにしたのであらう。内地の水郷はいつもかやうな事で客も船も惱まされるわけなのである。

29 桑田菜園の水郷

龍華の塔の上から見ると、西に東にと運河の水が銀線を桑田の間に引張つたやうに藝術的な配合で實に麗はしく眺められる。殊に春先に淡桃色の畑の見えるのは桃畑である。淡緑はこれ新柳であり、その間に茶種の花畑、又和か味ゆたかな桑田などがあり、如何にもやさしい絨氈でも敷き並べたやうに見えて、江南の春はまことに平和な象徴を示して居る。

龍華禪寺の坊さんに會つて見ると、頗るやさしく、參詣者を叮嚀に案内したり、紅蠟燭や竹の軸の長線香などを出して呉れたりなどして、頗るよく努めて呉れる。佛像の前で自分の巳年であることを述べると、あなたの今年の運勢はこの佛が物語つてゐるなど、言つて妙な佛面を指し冗談を言ふ。或は又同行の二十六歳の若き青年康先生を掴まへては、あなたは今年午である。この佛像の目から手が出てゐる姿がそれを象徴して居るのです。云々、本年は大に何か掻集める仕事があるであらうなど、易者の云ふやうな事を言つて見たりする。結局お賽銭をそれによつて餘計投げてやらなければならぬやうなことになるのである。誠にぬからぬ智僧である。

春のお寺巡りと、その田舎の風景のやさしみの深いのは如何にもその間、互に相調和してゐるものがある。時折夏の大水の出た時はこの邊りも亦桑田變じて海となると云つた風に一面に濁流の滾々と突くこともあるのであるが、それは滅多にある事でない。

大體は田畑の間にだん／＼桑を多く見る。西に近づくに従つて桑田が多くなる。その間に米の田、野菜の畑などを見るのである。舟行、夢を結んでゐるうちいつしか夜が明けて見ると、運河の彼方には美しい石橋が虹形に架つてゐるのが見え始むる。朝畑に出かけて行く農夫が鋤を擔いで二、三人橋の袂に立停まつてゐるのを見る。何かその日の豫定を語り合つてゐるらしくも見える。

田舎ではよく袖の長い支那服で手を拱きジツと通行人を見つめてゐる場合には、これがどうかすると、土匪がピストルを忍ばせてゐるときの姿であるなど、あられもなき餘計な神経を惱まして云々する者もあるが、この邊の田舎に見る百姓達にさう云つた氣分を思ひ起すやうな者は一人も見ない。

江蘇浙江の水郷に居る船頭にしろ、又この邊りの畑に働く田夫にしろ、その仕事着の姿を見ると、ぐるり前垂のやうな紺袴を着けてゐる。さうして紐の所に厚ぼつたい襪を作り、その側に細やかな刺繡などを施してゐる。見るからにこれに優美な氣持が現れてゐる。

農夫たちは既に朝早くから運河の底の泥を浚へ集め、之を畑の一角に溜め、半ば乾燥させたものを肥料に、或は菜園畑又桑畑などに掛けて居る所なども見られる。人糞は餘り用ひない。河の泥を用ひてゐるのはこの地方一帯に見る面白い風習である。又この水郷には鸕鷀と云つて日本の鸕鷀に當る仕事をしてゐる船頭を見ることがある。あちこちに見付かる。船端に黒き鸕鷀の並んで水から出たばかりのところ、頻りに羽撃などをして我が船の來るのを不思議さうに打眺めてゐる所など如何にも愛らしく見られる。

又その水中を潜つてゐたのがぼつねんと姿を現はして來る所など全く繪を見るやうである。日本ほんの長良川ながらがはに見る鸕鷀うづなんかよりも形は稍々小さい。又水郷の岸きしに面めんして小學校せうがくがうの建物たてものの指さしさるゝことがある。白壁しろかべに大きな文字もじで看板かんばんを現はし又福ふくの字じを一つ揮ふるつてゐるところもある。又學校またがくの先生せんせいであるか稍々インテリインテリ式の姿すがたしたのがそろ／＼その門もんに這入はいつてゐる所なども見える。いかにも平和な水郷すゐきやうたることが判る。

30 夜舟の乗合客

江南かうなんの乗合客のりあひきゃくは、その種類しゆるいが他の地方ちほうと違つて背景はいけいに上海シヤンハイといふ大開港たいかいこうを持つてゐるだけに、

様々の連中れんちゆうが見える。中にもそこに武装ぶさうしてゐる兵隊へいたいがゐたり、これは客きゃくとしてでなく、或る特殊とくしゆの使命しめいを帯びてゐるのでもあらうけれども、併し身みに銃劍じゆうけんを持つてゐることをスツかり忘れてゐるが如く、その痘痕面あせはたに鬘えぼを漾たへて隣席りんせきの客きゃくと親したし氣けに打語うちかたつてゐるやうな者ものもゐたりする。又船着ふねあがき々々に賣りに來る菓子かしや果物くだものを買つて、むしや／＼頬張ほぼつてゐたりなどするもある。柿かきなど賣りに來ても之これを買つてたべるに一々皮かわを剝むくでなし、皮かわぐるみ丈夫じやうぶな齒はで以て嚙かんで行くその様子ようすなども田舎いなからしく見える。

又乗合客またのりあひきゃくの中には、可かなりなりの家うちの商人しやうじんらしいものがある。相當さうたうな身みなりをして手に持つ手廻りてまはりには、氣きの利きいた支那靴しなかくしが側に置おかれてゐる。自分じぶんのこの時乗つた船ふねは満員まんいんの形かたちにはならなかつたけれども、嘗かつて浙江しやんぎやうの田舎いなかを歩く時ときには七八十人しちはちじゅうにんの乗合客のりあひきゃくで満員まんいん以上の満員まんいんを呈ていしてゐた。隣となりの客きゃくと互たがひ違ちがひに足あしと頭あたま、頭あたまと足あしと云つた式しきに殆ほとんど鯨詰くじしめの形かたちで寢たこともある、向ふの足あしは自分じぶんの顎あごの骨ほねに當あたつてゐる。こちらの足あしが又向ふの首筋くびすじにビツたり行つて、全く文字通り立錐りつすゐの地ちも無いのであつた。

そこで體からだを横よこにすれば、最早もはやや仰あはげになるだけのゆとりも無い。さうしてゐると、隣席りんせきの人に面積めんせきを取られてしまふと云つたやうな苦しいこともあつた。又その夜舟よふねの客きゃくの中には、親切しんせつに話

合つて互に懇意になり、陸に上つて一宿の宿を取るにも相談になつてくれるものがある。宿の番頭の言葉に従つて、その翌朝の飯を時間を定めて用意をさせたこともある。朝寝坊の自分は飯を攝らないで行きなり船へ行くことにすると豫定したこともある。よしんば番頭が飯の時間は十分あると云つても自分は信ぜず、その言に従つたばかりにその言葉を信じて食事した客が遂に朝の六時の船に間に合はず空しくその翌朝の船便を待たなければならなくなつたと云つた手違ひを生じたこともある。船の出た後の船着場の路上で番頭を頭ごなしに嘔吐付け、殆んど活劇が始まらんとする所へ、兵隊巡査が来て之に立會ひ、之を仲裁すると云ふやうな場面に自分は加はつたことがある。その時客から番頭に謝らせられた条件には、思ひ掛けもなき難題をふつ掛けるのである。傍に聞いてゐた自分は逆も氣の毒で堪へられなかつたことがある。といふのはかう云ふこともあつた。番頭の方から、今朝の船は仕方なかつたが、どうか晝十二時半に民船が出るから、それで我慢をして呉れませんかと言ふと、なか／＼いけないと云つて承知しない。曰く、自分の體は一刻千金である。君の爲に大變な商機を失した。その損害はどつして呉れると云ふ。番頭はそこで平謝まりに穴でもあれば這入りたい位に考へてゐる。けれども容易に一方は、之を肯かないのである。

結局のところ濫々それに決めたので納つた。船はきめたがかねの方は、それですまさない。午後に乗る船賃を全部拂ひなさい。さうして布團代枕代を出しなさい。さうして晝飯を只で提供しなさい。その上に昨晚泊つた宿賃を皆返済しなさい。さうして尙その上に此のお客さん——即ち自分を指さして——も同じやうに迷惑をしてゐらるゝのだから、同額の金を此のお客さんにも出しなさい。以上の事を全部聽届けるならば午後の船で承知することにする。斯様に毒々しくきつい要求をして、さうして到頭宿の番頭を參らせてしまつたと云ふ事實談がある。斯う云つた出かただ。されば乗合客の中には吳越同舟と見ても宜いだけに、頗る手厳しい徹底した考へを持つてゐる者が居る。それが普斷はどうかと言ふと、まことにやさしい。虫一匹殺したこともないやうな佛顔をしてゐる。さうして、吾々にもまことに觸りよく感じさせて居るのである。支那の夜舟に見る相客は、その時の都合や運不運もあるけれども、兎にも角にも興味のあるものである。これが上海驛を出る貨車に乗つたのであつたら、その乗合客には到底さう言つた味ひを見出す所までは來ないのである。

時には夜の船着場から百姓の老人が若いお嫁さんを伴れて、手に紙包みの荷物や或は箆に色々買物などした物を提げて乗込んで来ることがある。運河では、行きなり船が岸に着けられる。處は宜いけれども、多くはさうでなく、船から厚い二三間の板を渡して、それをカンテラで照しながら渡つて来るのである。或る時一人の客のそれから水に落ちたことがあつた。深くないところだから怪我はなかつたけれども、さう言つた粗忽がある。都會地では夜お嫁さんが出て歩くことはないけれども、田舎の百姓村あたりでは、船へ内儀さんなどを伴れて乗込むといふことは普通にあることである。幾ら百姓の内儀さんだつて、足は昔ながらの纏足をしてゐるので、板を渡る時などはまことに危かしく見える。

船の係の者は手とりて船へ乗込ませるやうに面倒を見てゐる。又船に這入つて隣席に座席がある。此處へお坐りなさいと言つて席を與へる。どうかすると包紙が破れて内容が見えてゐることがある。お荷物は輕さうですなと言ふと、さうです、燈心ですものと言つて内を開けて見せることもある。日本の燈心と少しも變る所がない。田舎の百姓家では、種油を使つてカンテラに之を用ひてゐるものらしい。

又中には田舎の青年は大きな直徑一尺五寸の餘もありさうな銅羅を提げて片方に撥を持つて乗

込んで来る者がある。春の娘の祭の支度に街へ買ひに行つたのだと言つて、時折鳴音が良いでせうと言ひ、叩いて見せたりなどする。罪はない。さうして自分の村の行先道を話したり、自らカンバイ（銅筆、鉛筆のこと）を取出して自分の姓名とところ書きなどを入れて、名刺の交換をしようなど言ふ者がある。私の友達に名古屋の醫科大學に行つてゐる陳某といふがある。先生は知つてゐるか、お友達でないかななどと、とつびもない事を質問し出すものもある。又自分の友人に大阪の川口に行つて商賣をしてゐる者がある。何の商賣かと訊くと支那料理をやつてゐるなど言ふ。日本に歸つたら繪葉書を送つて呉れないかなど、又罪のない要求をする者もある。

何にしても船の中はお互に退屈であるものだから、こちらの出様一つでは向ふも直ぐ話に馴染合つて、だん／＼人數の多くなるに従つて、和氣霽々の氣分が漲る。又他の地方では船の三等客の一番多く集つて居る屋根の上で、夏の夜などは月下の奏曲と洒落込んで、或は三味線、又胡弓玉笛などで乗合客を樂しませて呉れる者がある。多くは盲人であるので皆之に同情し、一曲奏する毎に帽子に金を入れてやる。胡弓弾きもそれで助かるし、乗合客もお蔭で夜船の中が面白く行けるといふことになる。

併し上海から蘇州へ向ふこの運河を去來する船にはさう言つた風流な催し事は何も無かつた。

これはその時の乗合の客だねにもよることであらうし、平凡な時もあるし、面白い時もあるし、するのであるから一概に之をどうと断定するわけには行かないのである。

七、蘇州水郷の流轉

31 夜の税吏の臨檢

蘇州行の夜船の臨檢は、多く課税の目的から役人が見えるのであるが、支那の片田舎は要所々に税關が設けられてゐる。税關は全くの形式一點張りのものであるが、相當効力を現はしてゐる。いくら呑氣さうにしてゐてもその收入を殖すべく努力してゐることは云ふまでもない。

その荷船とか又旅客の方ではその行李の内容が何であらうと、ともかく、成るべく税のお手柔かに輕減せらるゝことを念願としてゐる。云ふまでもなく、その税は何れのところにもあつた税關で隨處々に課せられてゐたのである。その名前は舊來釐金税と云つてゐた。その名は廢止されたことになつてゐるが、落地税その他の名目の下に幾らも船の重税が課せられてゐる。

それ故荷主側では之を却つて苦痛に病んでゐるのである。支那の税關は表面公式の役人として臨檢するのではないまでも、一年幾ら、二年幾らの請負業としてその大體とれる收入を見越し、そ

れを商賣に或るお株を買つて經營してゐる形である。であるから、その投資した元金を取つてしまふまで努力することは非常である。言ふまでもなく幾分か儲かるところまで行かなければならない。

そこに幾人かの事務員を使つて居ることもあるし、又相當雜費をかけてもゐる。それ／＼の役所への附届も勿論要ることであるし、なか／＼の掛りなのである。されば假令その暗夜であらうと、ひどい雨が降つてゐようと、それにはお構ひなく、船の通過するものさへ見るならばこれが臨檢に及ぶのである。

蛇の道は「へび」が知ると云はれてゐる位で、その夜、どんなに靜かに櫓を漕いで來てゐても大抵その船が小川に來たことは感知するのである。これは船に燈火が點けられてゐる爲めでもあるけれども、又全く火を點けないで來るものでもすぐ判るのである。何にしても遁がしつこないように注意をしてゐる。

嘗つて浙江餘姚の田舎、竹山橋といふ水郷の釐金局で自分は夜分泊つてゐた。その時の體験に依るとその主人の葛翁と言ふは自分達と詩文や文字の翰墨談に耽つて居つたのである。其風流な席で風月を談じ夢中になつて居つた時であつたにも拘らず、門外の運河石橋の下を通過する船

の音を耳に挟むと、すぐその事を感じ、物もとり敢へず早速出て行かうとする。自分で行かない時には代理の若い者をやつて之を臨檢せしむる。その代理は、僅か一二分で歸つて來ることもあるし、又十分二十分とゆつくり掛ることもある。

夜がだんだん更けて殆んど水郷の人々も寢靜つたと思はるゝ頃であつても流石商賣にあつて、之をねむたいの、宜い加減にしておくのと云ふやうなことはしない。そのたいした荷物を持つてゐない客ならば無論之をしらべず、パスさせてゐたが、大抵は荷さへあれば何ぼか税を搾つてゐたやうである。如何にもその邊は支那の田舎の、運河舟行の氣持を悪くしてゐたであらうといふ感じを起させてゐた。

又安徽の山中を先年游歴してゐるときである。或る谷間の支那宿に泊つてゐたとき、お隣に釐金局の設けがあつたが、その山道を通つて來る人は必ず否でも應でもその谷間に出る。その喉頭を扼して居るのだから強い。その日大分夜晩くなつてからである。天秤棒で大の籠を擔いで行つたものがあつた。その通行人がその役所の前を黙つて行過ぎたのである。すると可なり時間が経つた後であつたが役所ではそれと氣が付き、おそまき乍ら後を追駈け遂に人の居ない淋しい山道で之に追つき、その荷物の臨檢を行つて歸つて來たと云ふこともあつた。

斯う云つた事實は安徽の山ばかりでなく隨所にあるものと見られるが、要するに關所であるから一滴の水も漏さないやうに各所とも懸命の努力をしてゐることが分る。これによつてその請負仕事になつてゐる税關が如何に努力されてゐるか、又いかに充實せんが爲めに細心の注意を拂つてゐるか分る。この點について、もし船の荷物を調べられる時は豫め船頭から氣をきかし相當な物を心附しておくならよろしい。その役所の實務に當つてゐる事務員などに然るべく袖の下をつかひ、インチキな方法をしておくことが安全な道であることはその間百も承知してゐるところである。その點については支那のことだから茲に殊更述べるの必要を感じないのである。

たゞ斯う言つた税關が南支、北支と隨所々々にあるが爲め、商品が高くなつてしまふ。あの勞銀の安い又原價にしても只同様に安いものがこの税關通過を餘儀なくせらるゝことのために高くなつてしまふ。そしてその價格を吊上げてしまふといふことになる。これは南支と言はず北支と言はず何處の住民も全く苦痛として居るところである。今日日本の農村が、經濟的に立行かなくなり、又没落の道程を辿つて居ると同じやうに支那もこの課税のためにまゐつてしまふ。これはやゝ改まりつゝあると言はれてゐるが、名目を變へて更に又辛い税が擡られてゐる。それであるから地方住民の生活は益々悲惨になつて行くものと言はなければならぬのである。

32 寺僧と語る

蘇州行の船中、自分は禪僧の乗合客と一緒になつた。その禪僧は十二三の小僧を伴れてゐた。年來自分は蘇州を中心として江南地方に船の旅を試みてゐるが、いつも船中數名の寺僧と乗合せゐる。さう言ふことは珍らしくない。先づこの界限で船中の乗合客と言ふと、文字なき人が多いがその中で多少文字の嗜でもある者と言へば僧侶である。

わけてもその多く出合ふものは禪僧であるから人間が枯れてゐる。その言葉數は少い方であるが解つた所がある。質問をしても簡單にして要を得た答をして呉れる。又筆談をすれば必ず之に確答を與へて呉れる。たゞ禪僧は毎日夜になると何時も早く寢てしまふ習慣が付いてゐるので、夜分ゆつくりなど言ふわけにいかぬ。であるから、夜は晩飯のあとゆつくりなど言つてゐられぬめしが濟むと間もなく寢てしまふ。夜中しんみりとした話などは出來ないが、その代り朝は可なり早い。

朝飯を僧侶と共にし卓を圍むは氣持がよろしい。僧侶は精進飯を攝ることになつてゐるのでこちらも同じ食事を取る。先づ大抵豆を鹽と油でいためたもの、野菜類だの、漬物におつゆ物

これだけである。極て簡單であるが、朝飯としてはこれで澤山である。

幾百里の山を越え谷を涉つて来た雲水などは違つて、蘇州界限あたりの僧侶は割合に氣の利いた身なりをしてゐる。又語る話題も我が寺を中心としての禪門の話、又同じ宗派の中の本山、末寺の話などをしてくれる。

その僧侶の頭のてつべんには十二のお灸がすゑてある。これに依つてその坊主のなまぐさでなく、本格的の禪僧たることが知られるのである。そのどちらのお寺さんであるのか、その名前や場所などを聞いて見たり、又その件れてゐる小僧にも話を掛けて見たりする。面白い。他の客とは違つて禪僧だけに何れも朝起るとすぐ自分の携帯してゐる夜具類をきちんとたゝみ、葛籠に藏ひ込んだり身の圍りの處置をつけたりする所はよい。これは禪寺で平常やつてゐる修養の結果であると見られる。たしかに他の乗合客とは違つた風格が見えてゐる。

時折り小僧に向ひ心やすくと話をして見る。あちら同士も低語でさゝやいてゐたやうであつたが、その小僧と言ふのが又なか／＼氣が利いてゐるのである。試みに自分は、君の寺とその同宗派の寺々でこの界限にあるそれらの名前を列記して見て呉れないかと云つた。ところが、忽ちにしてあゝさうですかと言ひ、十五箇寺ばかりをすらく／＼と書いて見せて呉れた。

さういふ所は子供ながらも極めて妙意即答の出来るのに感心させられた。その小僧の頭を見ると幼いながらもこれに亦お灸がすゑられてゐる。聞くところによると江南地方に在りては在家の家で主人がその子供を或る事情の爲めに山門に入れ、坊主にし、生涯僧侶生活を営ませようとするには否應なしにこの焼き判を頭に印せしめなくてはならぬことになつてゐる。子供はそれを運命と見て、別段自覺して反對の行動を執るやうなこともなく柔順にそのレールの上を歩み進むだけのものと見える。

斯様にしてその人たちは僧侶生活の第一歩を踏出し將來の高僧となるスタートを切つてゐるものと考へられる。従つてする事爲す事が佛門の型に嵌まり、あの幼い時分からこれで仕込まれるのであるから流石は違ふわけだと言つた感じがびんと来る。

その小僧の時分から墨染の法衣を纏ひ、短い袴を着けいそ／＼働いてゐる恰好は何處となく甲斐々々しくも見られる。たゞしかし俗人と同じやうに時折り手鼻をかんだり、之を船側の板に摺付けて見たりする所はやはり同じ支那の田舎人たることが證明されてゐて面白い。斯う言つた手合は山門に歸ると、その讀經のとき大雄寶殿に侍べり他の大人の僧侶達が經机に並びお勤めをしてゐる間、その薄暗い寶殿内にありて、或は臘燭の芯を切つたり、又熱茶を運んだり或はお經の

始めと終りに澄み切つた音のする鐘を叩いたりなど、細かい役目を勤めてゐるのである。

小僧たちはさう言つた點で、可成り事務的に鍛へ上げられてゐるのであるから、乗合船にゐても平常に見る百姓の鼻垂れ小僧などは違つて總べてキビ／＼してゐる。そは又當然であると思はれる。

支那四百餘州中でもその比較的文化的に進んだ上海蘇州の方面に生れ、早くから葦酒山門に入らぬ雰圍氣の中で育てられ、俗世間の味ひなど體驗させられる事なく、一途にこの道を修めて三昧に這入ることは、或はその人にとり幸福であるかとも思はれる。

同じ地方に海賊あり、税關吏あり、船頭あり、さうしてこゝに又佛門に歸依してゐる小僧を見るといふ社會の種々相をまのあたりに見る。小僧君はその一部分を物語つてゐるものと見てよいかう見て來る時には乗合船の中に一種の人生觀を思ひ起さざるを得ないのである。

やがて鵝飼をやつてゐる運河の水郷邊りから、桃村湖のひろいところに出ると水上は忽ちに天空海闊の眺めに一變する。この湖上ではあちらこちらに随分盛に鵝飼をやつてゐるところを見るので、黒い色した、鳥の船ばたに集まつてゐる様子が見物であつた。船内では、傍に出て來た頑是な子供が、客の膝元に寄り、惡戯をして自分の鼻髭の白髪を抜き取らんとすること二回、自

分は可愛さのあまり見て見ぬ振りをしてゐると、宜い氣持でやらかすのである。客は一同之を見てどつと笑ひ崩れる。やがて晝食になると、日本から行つたものらしい鹽鮭が出たり、大鍋の焦食を油でいためた料理なども出されたりして、如何にも田舎の味がたつぷり味はれたのであつた。時候はまだ春淺く田に出てゐる水牛を見ることが稀れであつた。水を汲み上げる龍骨の裝置も殆んど出來てゐないらしくあまり見なかつた。煉瓦の燒窯のある村里に來ると、子供で惡戯に船へ向け石を投げる者が多かつた。又そのあたりの百姓達は、果隈の水を恐れてゐるか、壁に大書してゐる「汽輪徐行」の文字を見たのであつた。速力を出すと波が高くなつて家に水が浸くからかう言ふ文字を掲げてゐるのである。

33 寶 帶 橋

上海を船出してから一と晩を送り、僧侶と共に朝の精進飯を濟まし、又他の乗合客と晝飯を濟ましなどした。さうしてゐるうちに船は益々桑田の間、水路を取つて西へ西へと進む。そのうちに幾度か廣き湖水の水郷を過ぎ行く。

出ては運河に這入り、運河を出で、は又湖水に入ると言つた風に水郷傳ひに行く。そのうち處

々に可なり廣い水景が展開されてゐる。春の彼岸もそろ／＼近付いてゐるのでその運河を漕ぎ行く船の中には善男善女が讀經の聲もなまめかしく、時折り鉦を敲いてゐるのが聞こえる。鉦を敲き線香をあげ、供養をしながら春の日の永の櫓の音靜かに漕がせてゐる趣を見るのである。

船は樓船でその軒にかざつてゐる麗はしい五色の紙は風に翻つてゐる。又旗など立てた船もあり、湖水を渡つてゐるこれらの船は多く彼岸詣での船らしく見える。

又岸の桑田の間に見える墓地の邊りは、彼岸の清明節を控えてゐる爲めであらう。綺麗さつぱりと掃除されて、その上に短かい棒を立て、白い紙を風に翻してゐる景色など眺められる。

又眞帆片帆の風を孕んで空いろに映えた清き湖面の上を迂るが如く、滑かに走つてゐるやうに見える船もある。さうかと思つて運河沿ひの小路を例の紺袴穿いた胴の曲つた老農が、二三人何か朗らかに談笑しながら歩いて行く様子など、如何にも江南農村の氣持を湛へてゐる。殊に面白いのは帆柱の短かい曳船である。その二三間に餘る麻綱を胸に掛けたる、曳子の二人三人が長い袖を振り／＼運河縁の小徑を曳張つて行く。その眺めはわるくない。それが又靜かな水に倒影を投げて曳子の歩くにつれその影の水に映つるところ、その趣の澄んでゐるところなど空に鳴く雲雀の音と共にこは何とも言へぬ江南の春を思出させてゐる詩景であると言へる。

かくして運河を出で、は湖水に這入り、湖水を出で、又運河に這入る。このやうにしてその水郷をだん／＼進ゆくうちに可なり廣い水郷に出た。彼方の水面に眞一文字に長き石橋が指される。

上海を出てから目鏡橋式に見えてゐる石橋は幾つか數へられたけれども、この橋くらゐ長さも長く又その眼鏡式の孔の十幾つ二十近くも繰返されてゐると言ふのは外にない。その景色の倒影を水に投げてゐるところはよい。一段目の覺むる如き趣を見せてゐる。たつた一人の百姓がその上を渡つてゐる。その眺めは何處となく清楚の氣持を漾はせてゐる。

寺僧をつかまへ、あの橋の名前はと訊くと、パオタイチャオ（寶帶橋）であると言ふ。するとこゝは最早や蘇州に近付いたわけである。この橋は蘇州郊外たることを物語るものである。この橋を左に見、運河を右手に取つて行くと、蘇州城外のボンメン（盤門）の水郷に達するのである。右に姑蘇の城壁、左に寶帶橋の水郷が指顧せられ、柳の並木はいと和らかに、幽かな岸は桑田の綠色と映え湖天一色の間にハツきりとした緑の線を見せてゐる。實に何とも言へぬ氣持の好い江南の風景ではないか。

きのふ上海を出たわが同榮號はこゝにいよ／＼蘇州城外の水郷に將に着かんとしてゐるのである。そろ／＼船客どもは上陸の身支度をしたり、着物を取纏めたり、又布團や枕などの勘定に忙

はしいと言つた様子である。自分がかやうにして江南の夜舟を體驗し、前日の晝過ぎから彼れはれ二十三四時間と言ふをこの船の舟行で費したのである。夜半事もなくよく夢を結び、又晝間にしても怪しき者の襲來などなく、船客同士の間には胡弓玉笛の催しはなかつたけれども、別段そこにさう危険を感じるなどは少しもなかつた。相當その間に、書見をしたり或は談話執筆をしたりすることも出来て無事に蘇州に着くことが出来たのであつた。

34 蘇州城外盤門の洋關碼頭

蘇州城外盤門の水郷は、上海から舟行したものはたとひ運河の捷徑をして來ようと、又遠廻りをして來ようと、皆すべて此處に到着するにきまつてゐる。併し火車便に依つて蘇州の驛に降りた者はわざ／＼此處まで來るのに蘇州の城壁を、眞北から眞南にまで縦斷して飛ばして來なければならぬ。それがやゝ遠距離の處にある關係上、鐵道で來る游客で、殆んどこの方面までも來る者は少ないと云つても宜いのである。

ところが、この水郷の直ぐ右手、蘇州城壁下の草原には、昔三國時代の吳の孫權の墓と傳へらるゝものがそのまゝ残つてゐる。千七百年前の永い歴史を今だにそこに漾はせ、治亂興亡の跡を

超越して史家の心胸を痛ましめてゐるのである。空には雲雀が鳴いてゐても、誰れ人の之を弔ふと言ふがあるでなし、墓前をお掃除してあげようと言ふものがあるでもなし、全くの投げやりの塚の小丘として残つてゐるだけのものである。

その幾ら土匪や兵匪がこの邊りを荒し廻はり横行しても孫權の墓をまで眼中に置くと云ふ者は無い。恐らくその墓の内部は大抵千年の昔既にあばかれて陪葬品は掘出されてしまつてゐるわけであらう。詩の上では「越王勾踐破レ吳歸。宮女如花滿レ春殿」など、謂はれてゐるが、吳が越王のために破られて以來と言ふものはその蘇州側の哀史は隨所々々に涙を催させるものゝみである。今はこの地は織物、染色に、美術工藝にと江南の文化を代表してゐる麗らかな中心地點となつてゐる所であるが、その荒れ果てた古都の廢墟であると言ふにつけても、この邊りの歴史は特に感慨無量なるものがある。

西の方太湖の海賊を思ひ、又江南に出沒する土匪の被害のことを思ひ、蘇州の變轉極りなき歴史を考へて見ると、此の水郷に始めて着いたときの心もちは人知れぬ詩的情緒に惱まされたのであつた。

盤門の水郷には、洋關碼頭の船着がある。自分は一と先づ此處で船から上つた。それは盤門の

巷に、日本の領事館があり、此處には又拓殖大學出の川南領事がひかへて居た。洞庭の海賊村に這入る前、一應こゝに敬意を表して置くことはよろしい。自分もその氣持になつたからこゝに立寄つたのである。

由來蘇州の地には遊びに来るものはたくさんあるけれども、地理的關係が不便であるのでわざ／＼これへ尋ねて来るものは少なかつた。又何れの領事の方にしてもそこから片田舎に奥深く這入ることなどを話して見たところで「それは結構ぢや、行つていらつしやい」と言ふやうなことを言つた領事は殆んどゐない。むしろ「幾らでもこゝで御馳走をするの、或は美事な書畫や古玩などなら取寄せるのと言ひ、わざ／＼田舎へ這入ることだけはよして貰へまいか」など言ふ話になる。それで大抵鼻が付くのである。それで田舎歩き好きな自分達のやうなものゝ立場からは寧ろ領事館に立寄りたくない。立寄れば折角の自分の目的は成就させられなくなるにきまつてゐるのである。併しこの度は折角珍らしく船でやつて来たわけであるし、それにツイ近くの碼頭についたのあるから蟲が知らせ之に立寄ることにしたのである。

田舎の水郷をあるき、船着に到達する時などは、そこへ見ず知らずの宿引が見える。又うるさい車や、或は驢馬などがどや／＼と押し掛けて来る。又手荷物でもある時には、たつた一人の鞆

をばあちらの車、こちらの車へと、二ヶ所三ヶ所へと分けられてしまつたりする。

そしていざこれから走らせようといふ時になると、双方から八釜しく抗議を申込まれる。それが僅かな手切金くらゐでは承知しない。随分ひどい悪車夫に出くわしたりなどする。又下手をすると、數多の車、驢馬に取圍まれて二進も三進も付かなくなる。言葉はそこでよしんば解つて連中の意味は理解されて居つても、周圍の形勢がなか／＼大變で、その場所を切抜けさせられなくなつて来る。

假りに人力や、驢馬で、マゴマゴしてゐると、そこへ警官が立派な馬車を引張つて來ることがある。さうして一刀兩斷的に良い智慧を授けて呉れたやうな顔をし、頻りに笑顔を作つて、この馬車に乗りなさい、それが一等安全だなど、勧めるのである。下手にその話に乗つてしまふものなら車夫の方では、睨み殺す如き恐ろしい目つきを以て迫め寄つて來る。

そのとき何とも手の下し様がないのでちつとしてゐると、警官は三尺もあらうと云ふ櫂の棒を以て人力を打碎がんばかり續け様に車體を敲くのである。さうして座布團を二三十間も遠方へ宙に投げ飛ばす。恐ろしい事になるのだがしかしそれ位なことに、他の人力ども怖れ、ばこそ、決してこれ位では鎮まるわけに行かなくなる。結局こちらは、馬車にも乗れず、人力にも乗れず、

驢馬にも跨れずして、そしてその界限は黒山の如くに人波を築くといふ騒ぎになる。これは日本人や外人の、多く頻々やつて来る蘇州の驛前あたりにはいつも演ぜらるゝ場面である。加ふるに宿引の根強い連中になると葉書大の旅館名の印刷してある紙をてんで持ち、或は姑蘇旅館、或は蘇州大旅館、或は大東旅社などと、十や二十どころでない、澤山の宿引が攻め寄つて来るのである。近來は警官が宿引だけは驛前の一定の場所に一定の場所に並ばせてゐる。それだからと聲のみガヤ／＼言つてゐるだけで靴の奪合ひなどは許さないことになつた。けれども、乗物の方はさうでない。兎にも角にも大騒ぎの難關を突破しなければ寒山寺、一つ見に行く譯にも行かない。これが蘇州驛前のお決りの騒ぎと云ふわけである。

城外盤門の水郷に船で来た客は、あたり前でなく全く意外の裏口へ着いたわけになる。だからさう云つた客にはかゝる騒ぎはお蔭で知らないで上陸が出来るのである。而かもこの盤門二馬路には日の丸の國旗の輝く日本領事館が聳えてゐる。玄關に高く菊の御紋章が光つてゐる。門外には櫻の並木が今を盛りと爛漫に開き、朗かさを邊りの原つばに漲らせてゐる。片倉組の紡績會社の工場は煙突から煙を揚げてゐる。これはこの邊りに日本の專管居留地のあるお蔭であつて、春の蘇州を享樂に出掛くる者は、團體を組んで此處を尋ねる。或は繁廼家の旅館に憩ひ、又領事館

で休んで茶菓の饗應などを受けるのが例である。

35 名勝地と危険地區

名勝地を多分に包有してゐるこの古都として、蘇州は城外城内共に江南第一の佳處と云ふことが出来る。唐の楓橋夜泊の詩で有名な寒山寺の名勝もあり虎邱、靈巖山に天平山、上方山などを始めとし、城内には道教の本山で有名な玄妙觀や、又孔子廟を初め、滄浪亭、拙政園、獅子林留園、西園など云ふ枚擧に遑のない名勝地が澤山ある。

蘇州游歴に見えた客は多くこれ等の半分も見ることが出来ないものである。春は虎邱廢寺の古塔の下に咲く櫻の美、秋は天平山の紅葉に麗はしい眺めを見せてゐる。又夏は寶帶橋の水郷に城内運河の川船料理など、四季折りをりの歡樂は筆紙に盡しがたいものがある。唐代吟じられた寒山寺の漁火はさぞや詩趣を咬つたことであらう。今日夜半の鐘聲を聞くに當時の趣を思出させるものが多い。

斯様にして蘇州の名勝地は、天下に鳴つてゐるものが多いのであるが、併しいざ兵亂、いざ排日、いざ土匪といふことになると、逆も堪らなくなる。流石の日本の居留地も斯うなるとハツた

り火が消えたやうになる。

工場の女工達もストライキをやり始めるし、又仕事をしてゐるとブローカーが来て之を虐めつける。誠に厄介な事態をのみ生み出す。こんな風で折角の租界はあつても、どうも草ぼう／＼でうまく榮えない。これは杭州の日本の租界にしても同じことであつた。勿體ない幾萬坪の土地が今だに草蓬々で一人の日本人の之に安住してゐる者すらない。五六軒の長屋はあるけれども淋しく空屋同様にすてられてゐる。騒ぎの前の竈が淋しく日本人の來るのを待つてゐるだけである。徒らに月は人なきこの草原を照らしてゐて、轉々大和民族の如何にも不人氣な處を詰つてゐる如くにも觀ぜられる。こゝになると海賊又は土匪兵匪の力と云ふものは恐ろしいものである。邊りの良民達を縮み上らせてゐるやうである。

蘇州の天地は、風流な方面から言へば、幾らでも無限の材料に富んでゐる。又工藝美術染色の方面から言へば、これ亦驚くべき深味を持ち、日本で織物のことを、吳服と云つてゐるが、その吳服の吳は即ちこの蘇州を指したものである。吳はその古名である。それ程までに絹織物、緞帳、縐子、有ゆる高級織物が此の地より産出し、今では日本に又歐米にと數多の輸出額を示してゐる。養蠶に、製糸に、紡織にと工業方面に見るその進出振りと云つたら大變なものである。これ程

に工藝方面では發達を遂げてゐるのであるが、それだけ又財閥の方の根據地と目されてゐる。そればかりでなく又兵匪土匪海賊などが之を目的に、機會を狙つてゐるとも云へる。たゞにこれは驛前の險惡な空氣ばかりでなく、蘇州の全體が西の方、太湖から北の方、南京あたりまで一帯の心をそゝり食指を動かしてゐる貴い餌となつてゐる。このことは特に注意すべき點であると思ふ。

八、海賊に襲はる

36 洞庭行

蘇州はシイメン(胥門)の水郷、大東旅館から旅立ちして海賊の本場、洞庭に向つて舟行した。宿は支那旅館であり、蘇州切つての大規模の支那宿であつた。帳場には地圖や寫眞繪葉書なども賣つてゐる。朝は夜の明けない中から廊下を花賣が各部屋の客を呼び、花を買つてくれと呼び歩いてゐる。早朝まだ目も覺めないうちに、つか／＼と提籠に盛られた花を左手に抱え自分どもの客室へと闖入するのである。

流石は蘇州のなまめかしい場所柄だけに、風流な事をする者であるかなと思つてゐると、入ってきたり花を買はせるべくなかく／＼に強要する。よくお相手をしてやらないといふと、言葉も荒々しくなり、終ひには眼中容なく荒々しい態度に變つて來るといふ物凄い女もあるのである。迂つかりその色々の花に觸り、又香を嗅いで見たりしようものなら、その手を掛けただけの花

を全部買取らしむるやう鼻息が荒くなり、始末にをへなくなることもある。

斯う言つた蘇州支那宿に見る花賣の話は、その話の話掛けやう又その話の應對振りでは優美にも話がすゝむが、又物恐ろしい場面にも進展して行く。

これが蘇州の眞面目を物語つてゐる二方面である。この表、裏の二方面が縮圖の如く蘇州の宿には現はされてゐる。名勝史蹟の點から言ふと、江南第一の蘇州である。しかしこゝにはその暗黒面に海賊村の背景がある。而かもその本場が運河傳ひに西の方太湖の湖濱島々の間に見出されるのは普通人の思ひもよらぬ事實談である。

海賊とは云ふものゝ、その持つて行き様、出方一つでは何等恐るゝの必要もなく、人間到る處青山ありの氣持で丸く取扱ふことも出来るのである。

人情に變りのあらうわけはないのであるから、幾ら物凄い場面を開展して來ようと、それを切抜けることはたいして骨の折れたものでもない。たゞ人はその餘りに風光明媚、名勝史蹟の點にのみ頭が向いてゐて、その半面の社會相の解らないでゐると言ふやうではひどい目に遭ふことがあると思はなくてはならぬ。たゞいつも四海兄弟の氣持である時分には、幾らその土匪部落であらうと海賊村であらうと、又美人の多き蘇州であらうと、その邊に偏頗な見方をする必要のな

いことだけは力説しておきたいのである。

自分は船出に際して、その前日、川南領事を訪ね、太湖行の大體の話をしておいた。ところが近來あの方面の水郷は人氣が頗るよくない。又時折り外人の行方不明の話もあり、支那人の間のニュースも甚だ芳ばしくない。

わけてもあの方面は殊に我が領事館にとり管轄内の西北のはづれである。若しやの事態を起すことでもあつては一大事であるから、何とかやめられたらどうか、といふ話も出てゐたのであつた。これも領事館に立寄られなくて、そのまゝ太湖さして出掛けてしまはるゝ時分にはこちらは知らないわけである。ところが、一應斯うして耳にし、その行程まで詳しく聞かざるゝに至つては何としてもやめて貰ふ方が宜いと思ふといふ卒直な意向が述べられてあつた。

多く支那各所各地に見る領事館の申し分やその御注意は大抵この式であると云つてよい。支那は何れの地方にも風光明媚の處があり、又到る處平和な山村水郭があることは承知してゐる。

併しその時の不祥事なるものは大抵突發的に起るものであつて、それが必ずしもあるに相違ないとは決められない。又それが無いとも決らない。行つて見ないことにはあるか無いか分らないのである。

その點は全くお天氣都合と同じことである。天氣の保證の出来ないのと、支那の片田舎に變事の起るや否やの關係はまことによく似てゐる。けれども自分は腹の底には確かに無いといふ一つの信念を持つてゐる。又あつたならばその時のことだ、相手は人間だ。猛獸ではない。こちらは總べて皆兄弟の心を持つてゐるつもりで出掛けるのである。但し澤山の金はどんな場合にでも、懐ろにしない事。身にピストル一つ持つて行かない事。ナイフ一つ持たない事。萬年筆と手帳手拭の外には殆んど何も持たない。これである。簡單な身支度で唯飄々乎として太湖に向ふのである。これでよろしいのだ。領事館の方でも我が意を諒として、それではよろしい、といふ諒解が得られた。自分もやつと安心が行き、いざさらばの言葉で別れ、翌朝發つ時間が早いので領事館を立ち、上に述べた支那宿に行つて投じたのである。

いつも奥地と云ふと日本人はあまり這入らない。未知數である片田舎に奥深く入るはあぶないと云ふ。舟行にしても陸行にしても之を續けることはよくない。普通の人にはお先眞暗らの天地である。行けば人喰人種がウヨ／＼として上陸すれば直ぐ取つて嚙み殺す處であるやうに謂はれてゐる。これは田舎の事情を知らず、又その體験のない人のいつも想像してゐるところである。

仁丹の廣告を書く人、又は賣藥の商ひをする人、その他骨董の買出しに歩く人、或は蘭の珍種

を探り集むる人くらゐのものが江南地方の奥地を遊歴し、日本人の曾つて這入つたことのなかつた方面にでも時折り足を向けてゐる。

多くは支那服、支那帽であり、支那飯を食べ支那式の便所に慣れて、その地方の言葉を操つて歩いてゐるのである。かう云ふ人々は何れも身の危険のあらうなどいふことを豫想して出掛けてゐる者は一人もゐない。ただ併し時折り同じ村でその朝起きてから、顔の洗ひ方とか、或は便所から出て手を洗はうとする事とか、硯の墨の磨り方、歩く時の足の運び方とかから見ると、どうしてもちがふ處がある。或は又談話をする時の目玉の坐り具合など細かい處を見ると、どうしても支那式になり切らぬ所が多少ある。又食事の時にしても支那の人のたべ方を見てゐると、箸を縦に置くに拘らず、何時も日本人は横に置く。かやうなことはまことに小さい問題のやうであるけれども、さう云つた所からその土地に馴染まない遺方をしてゐることが現はるのである。眞にその地方々々の仕來たりにビツたり來ない所があると云ふのはかう云つた處にあると云へる。

海賊村に這入るに、さう一々細かく神経質な事を氣にしてゐても仕方がない。がたゞなるやうにしかならないのであるから、成るだけ無頓着に、さうしてその地方の保護色に反しないやうに努めてゐるの外方法は無い。

曾てはウーシー（無錫）に蘭の花の展覽會を見に行つたと云ふ日本橋の小原翁が端なくもそのことから官邊につかまり、牢屋に打込まれ、種々な詰問を受け、他の囚人と共に收監され、惨めな幽閉生活の苦しみを嘗めさせられたことがある。どどの詰り、蘇州の日本領事館警察に身柄が引渡された一くさりの話はその直後に、本人からかくはしく自分は上海で承つたのである。

又古美術漁りで太湖のほとりにある禪寺を尋ね、僧侶との間にいさかひを起してほう／＼の體で其處を立去り膽を冷す思ひを爲して逃歸つたといふ松田翁の話も、直接當人から聞かされてゐるのである。多少田舎入りを敢行するについての苦心談は常に伴ふものとして、耳に挟んでゐるのである。

だからと云つて太湖入りをさうむづかしい死地にでも這入る仕事のやうには自分は考へてゐない。大體に於て禪寺巡りを敢行するつもりであるのであるから、他の人のやうに馬鹿に固なつたり、逃げたり、走つたり、幽閉されたりする事にはならないものといふ確信を以て船上の人となり、洞庭海賊村に入つたのである。

蘇州はシーメン（胥門）の碼頭を船出し、運河の水を渡るが如く西に走る。上方山の高塔を右岸の空に仰ぎ見ていよ／＼西天の下、洞庭の水郷に向ふのである。

船は乗合曳船、その過ぎ行く桑田の間の運河縁は所々に、江蘇の田園生活鮮かな農家や小さい田舎町の家の固つた處が見られる。水邊に並んでゐる平家建の民家の窓には、貝を窓硝子の代りに用ひた障子が軒なみに見える。染坊だの、雜貨だの、大米、小米（粟のこと）などひさぐ店の商賣を示した文字が三尺大、五尺大に壁に書かれてゐるところを見る。又石垣の水邊、楊柳の蔭には石段を下つて、箒を持つた内儀さんが、米を研がうとする所や、宿屋の男が野菜を運河の水で洗つてゐる所なども見える。行違ふ民船には、例の紺袴を着けた百姓の老人が陽に焦けた顔にニコ／＼した目つきをしのばせ、岸を通る人と大聲で話してゐる所なども見える。

蘇州の西郊、運河傳ひの農村の有様はかやうに如何にも平和である。三歳の兒童の頭に赤の帽子を冠り、軒下で群れ戯れてゐる平和な象徴なども見られる。これが一段とこの邊りのやさしみを物語つてゐるやうである。

斯う云つた水郷を行く。船が太湖、洞庭の近くに進めば進む程、この邊りの雰圍氣は悪化してゐるところのやうに思はるゝかと言ふと、決してさうではない。寧ろ太湖に近付けば近付く程楊柳の並木は大きくなり、兩岸の桑田は次第に見えなくなり、右に左にと沼澤地の如く潤ひ多き水郷の開けて、田園は姿を消して寧ろ全く沼地であると云つた感じがする。その水郷の間の柳の並

木のみが顯著になつて来る。その並木に沿うて可なりの道程を進むのである。これもやはり運河の續きであるのかどうか分らなくなる。あたりは運河であるのか、湖水に出でしまつたのであるのか、そのけぢめさへ付かないのである。

支那の水郷は常に斯う云つた地理的景觀を持つてゐるのである。こは丁度北支那に在つてタークー（太沽）の沖合の遠淺が丸で海であるのか、陸であるのか譯が分らない。かう云ふ處が幾十里と續いてゐる。水面に海岸線を現はさんとしてもどの邊を取り入れて線に現はして宜いのか一向はつきりしない。

又南支那に在りても、長江の江口に生ずる三稜洲の如き、又長江の流れの中に出來てゐる蘆洲の如き、その水面に現れることもあるし、現れないこともあるし、總べて極て曖昧である。

これがいつも支那の地形をなす常態と云へるものである。この太湖の湖畔も亦その流儀のものであつて、芦の原の沼地が殆んど水陸の境界線を爲して居ると云はば云へる。而かもその水中に老楊の森や並木が幾哩となく長く續いてゐるのである。

四方見渡す限りは一帯水郷であるが、そこにかう云つた緑樹の眺めも混じり、眼界の達する限りただ空と水とこのまばらな緑蔭を見ると云ふだけである。最早、上方山の古塔なんかは地平線

下に落ちてしまつて何物を見出すことが出来ないのである。

地圖面では太湖と云へば、何でも無い小さい湖水の如く見られてゐるが、親しくその土地に踏込んで見ると、まるで一つの沼澤地であり、何等此處に文化の起りさうな景色もなく、ただちつと斯ういふ處に居續けて居つたところで、何の方法も付かないだらうと云つた感じを受けるのみである。

然るに不思議にも、我が曳き船は西へ西へと進むにつれて、どの村里で取附けられたか、あとに一二隻くらゐではなく、三隻、四隻、五隻、六隻とくつ付き、遂には七八隻となり、又更に追加せられて十三隻と云ふ多數の民船が珠數繋ぎに連接されてゐるのを見た。これは柳の下の曲江を迂つて行くうちに、ふと氣が付き通越して來て後方を振り返つて見た時、自分で思はず不思議なこともあるものだなといふ感に打たれたのであつた。

折りしも夕陽の將に西天に没せんとするとき、黄金色の夕映に照らされてゐるそのうしろに、續く船の色彩は、新緑の柳に相映じて何とも云へぬ美しい繪巻物の眺めを見せてゐた。

一體かうした民船に何が多く乗つてゐるのかと見ると、灰色の服を着た兵隊どもである。どういふわけで餘り水村のありさうもない湖水の中へ、斯う云つた多數の兵隊船が進まなければなら

ないのかといふことの疑問が變に胸に浮んだ。

これは恐らく流石に海賊の本場であると謂はれてゐる所だけあつて、何かその方面で斯うした警備の動員を行ふ必要でもあつたのではあるまいかと思はれたのである。覺束かない曳船どもはかなり悪い石炭を焚いてゐる。一錢蒸汽の玩具のやうな輪船ではあるけれども、兎にも角にも十幾隻からのお伴をつれ、珠數繋ぎにして曳張つて行く。そこらの牽引力はいくら水上とは云へ驚いたものである。普通ならば逆も出來たわけのものでないのであるが、その水は流るゝが如く、流れざるが如く、又その運河の幅も、三四間を出でず、頗る船は操縦に困難を感じたであらうと思はれたくらゐであつたけれども、一向どうと云つた事故も起すことなく西行したのであつた。

37 殿前の海賊村に着く

洞庭行の運河の盡きる所は、全くの水郷である。その邊りは殆んど陸地といふよりも沼地である。そこへ出てしまつたかと思はれたのであるが、何とも形容の出來ない沼澤地である。その最後の沼地の極まる所に水面上から僅に現れてゐる碼頭があつた。そこに礮の字の大書せられた壁の見える小屋が立つてゐた。

その傍の碼頭に我が船は着けられたのである。さうして打續く民船の兵隊共は、暫く水上に時間待ってゐたがどちらへか皆上つて行つてしまつた。

蘇州のシーメン（胥門）を西航すること、一日にして斯う云つた全然別天地の沼澤の中に這入るのだ。見るともはや此處が江蘇の片田舎であるといふ如き感じは少しもない。どういふ天地に今來てゐるのであるかを考へ直して見ると、殆んど見當も何も付かないのである。地圖の考へが多少頭にあるから途方に暮ることはないやうなもの、實際は思ひもよらない天地に踏入つてゐるひどい眊めなのである。

先年夜半遅く長江筋の安徽のタートン（大通）と云ふ水郷についたことがある。小船でその蘆洲の間々を漕いで行つた。お先き眞つ暗な水郷である。これに辿り着いた時の心細さ、又その一種、奥底の知れない地方片田舎の淋しい情趣と云ふものは胸に迫つたことがある。

洞庭入りはまだました。時刻が夜半ではないし、まだ黄昏の林煙模糊として和か味のあるときである。何處となく詩的情趣の漲つてゐる時であつた。その礪の字のある處はモーターの用ひられてゐるところなのか。音がしてゐる。水車で粉でも搗いてゐる装置のある小屋であるかと思はれた。

音に聞く海賊村はこの碼頭の處から始つてゐるのである。それは太湖で有名なトンセ（東山の訛音）の殿前と云へる水郷である。湖上の大きな島々は名をシイセ（西山）トンセ（東山）と云ふ。西山は今一つ西方にある島であるが、丁度この島の島蔭になつてゐるので見えてはゐない。

この水郷は一帶をドンテイン（洞庭）と土民だちの間で稱んでゐる。水が引いてしまふ時には半島の形をなしてゐるのであるが、増水を見る時には東山は一つの島の形になる。

西山の方は、初めから獨立した一孤島である。殿前の水郷に着いてから、自分はどういふ方向を取つてこれから歩かうかと思つた。

既に時刻を考へると黄昏時である。明るいうちに兎に角、山の一番高い處まで登つて全景を打眺め、洞庭の大勢を知らうと云ふことにプログラムを立てた。

幸ひ荷物は無いし、宿を取ることは後でも宜いといふ考へた。さゝやかな村ではあるが、その村民達の様子などを見ながら、後ろの山に登る道を聞いたのである。又山に遠く仰ぎ見らるゝ禪寺の道をも尋ね、どうにか要領を得たので取敢ず一人で登山することにきめたのである。この島の山の峰はモリフォン（莫釐峰）と云ひ千尺足らずの三角型の峰である。樵夫の道があつてこれを辿り辿りつゝ登つた。全くの唯一人頂まで登つて見た。山上はタセンチン（大尖頂）と云

ひ祠堂が絶頂に見出された。峙に立ち邊りを見渡せば、蘇州の空から、過ぎこし來つた運河の水
路、柳の並木の影が悉く雲煙の間に薄ぼんやりぼやけてゐる。さうして自分どもの乗つて來た船
は山麓の水邊に玩具の如く小さく横着けされてゐる。湖上、數哩の西の方に、西山の綠島が指さ
れる。太湖の水面は薄黄色の和か味を漂へて、その水平線は茫漠として全然ハツキリしない。
如何にも名前の物語る如く廣大な湖であつて、何處にもかつきりした線は一向に見出されてゐ
ない。全く春霞に包まれた一大パノラマである。之を浙江の西湖に較べて見るとその大いさは何
倍であるか分らない。又西湖の如き細かい變化に富んだ景色はこの太湖には見出されない。湖南
の洞庭の如く廣くは勿論ないけれども、併し相當海の如き大きい感じを與へてゐる。
かう云つた天地に海賊の船の去來してゐる影が一々見えてゐるわけでもなく、又自分ひとり山
に登る此幽境には鳥の啼く音を聞くのみで、犬一匹出つくはした事もなく、まことに雲煙萬里の
湖上の島の中で寂寞そのものと云つた靜寂の感を抱かしめられたのであつた

38 薄暮雨花臺を下る

莫釐峰中腹、下り路の所に當つて、黄色の壁が林間に指さされる。屋根の群がつて見えてゐる

處がある。これが豫て聞いてゐた禪寺だと思はれた。そこで自分は見當を付けてその道を辿り下
つた。山門に着いて見ると「雨花禪寺」の文字が讀まれる。俗に雨花臺と謂つてゐる寺はこれ
ある。南京の雨花臺とはちがふのである。門を這入つて山僧を尋ねた。人里離れた山寺だけに如
何にもひっそり閑としてゐる。その壁に掲げられた古人の拓本書畫には見たへのあるものがあ
つた。中にも大室に掲げられた扁額の文字「湖山共仰」の四大字は宛らこの太湖の實景を吟じ得
て妙であつた。又その書風も珍らしく能く出來たものであつた。

山僧は茶を酌み、菓子などを出して遠來の客として自分を持成して呉れた。大和尚は居るか
尋ねた所が、山を下つて用達しに行つたが、モウそろく時刻になるので歸つて來るだらう。ゆ
つくりしなさいと云ふことであつた。太湖の歴史を尋ね、又この地方の海賊の話聞き、或はお
寺の沿革を面白く聞かされたりなどしてゐる。そうしてお茶のお代りを貰つたりして居るうちに
大和尚はそこへ歸つて來た。ターウザン（大和尚）と言へばニコツと和かい挨拶振りである。そ
してそこで名刺の交換をした。するとボーチ（破岐）と書かれた大の名刺を慇懃に手渡して呉れ
るのである。

何と云ふことなしに禪話に這入ること暫し、食事を共にしないかといふ勧めであつた。けれど

も山道のことではあるし、だん／＼路も暗くなりかゝつてゐたので、宿るならば兎に角、その日は麓の水郷方面の様子など検分したいと思つてゐたので、ひそかにこの山門は今直ぐ下つた方が宜いといふ氣持がした。そこで折角の勸めであつたけれども、食事をしないことは、門を辭し、坂道を辿ることにした。

門内の寺男は果物を乾したり、穀類を庭から取纏め、片付けたりなどしてゐたが、自分の下る道を間違へる事のないやうにと、別れ道の處まで来て叮寧に教へて呉れたりなどしたのであつた。大和尚も山門まで見送つて呉れた。始めての山であつたが、山中の氣持はまことに嬉しく有難く感じたのであつた。

麓に下り宿を求むるに二軒計り見當たる。一つは三元旅社と云ひ、豫て聞いてゐた名前で古くからある宿屋と知つてゐたが、餘りに場所が不便利らしく感ぜられたので、船着き場に近き木賃宿同然の大東旅館といふのに宿を取つた。

部屋数は二つ三つしかない。如何にも手狭の宿であつた。その上に、更にその一つの部屋を板圍ひで仕切り、やつと膝を入れるに足るだけの臨時の客室が幾つかとられてゐたのである。どうせ田舎の水郷の宿のことゝてこれでも無きに優ると思つて、此處へ手提の籠を預け、番頭に一と

言話をしておき、食事をすべく外出したのであつた。船着の或る飯屋に出掛け、そこで食事を攝らうとしてゐた。ところが、對面の店の樓上で、頻りと胡弓や笛の音がする。それへ上つて樓上で共に食事を攝らうとしたところ、そこは誰かの宴席らしくちよつと飛入りかむづかしさうであることを知つた。そこで直ぐ降りて來た。さうして初めから思つてゐた茶館吟香閣へ名こそ立派なれども、實は支那そば屋の邊りの村人の食事してゐる仲間と卓を並べ、自分は一人で席を占めた。窓に近く炊事場の竈に近く、一々その肉を切り野菜を刻み油でいためてゐる様子に手に取る如く見えてゐる。そこで食事をとつたのである。野菜を幾ら肉を幾ら使ふかと一々材料の金高までもが細かく相談を掛けられるのである。

これはこの地方の田舎の風である。總體にさう云つた習慣になつてゐるのである。食ふ物、飲む物、細かく目の前に算盤を持つて來て、さうして總體で幾らになりますかよろしいですかといふことをよくよく確かめ、然る後にその材料に庖丁を入れるのである。

これはこの地方の經濟の細かくかたいたこと、又その生活振りのいかに地味であるかと云ふことを物語つてゐるのである。勘定の金は壁に立掛けられた大の竹筒に投込まれるのであるが、これは大の鎖で以て柱に縛り付けられ、ドル箱のやうにしてゐるのである。如何にも頑丈なものである

内儀さんも、亭主も共にその前で頗る忙し気にやつてゐるのである。

察するにこの晩、此處に食べに來てゐる仲間、果たして島の良民であるのか、それとも海賊達であるのかは判らぬ。一向區別だに付かない。島民全部が海賊を働いてこゝで食つてゐるものとすれば、斯うして自分はひとり海賊部落の飯屋に來て呑ん氣な話をしてゐられるわけのものもあるまい。併し向ひの樓上で鳴り物入りで宴酣なるは何かその良い獲物でもあつた喜びを頷つために食つてゐるのであるか、又あちらこちらに密々話をしてゐるのは、その方面の相談事をしてゐるのでもあるのか、一々之を氣にして見れば際限がない。けれども自分は元來呑ん氣な質であるからさういふ方面には全然無頓着で、無關心に酒杯を傾け、食事を終へたのである。そして暫し茶を啜りながら隣家の奏樂を月光の下に聞き惚れてゐたのである。

そこまでは宜かつた。極樂でゐたのであるが、少しくお腹が大きくなつたので、好い氣持になり湖畔の散歩に出掛けた。飯屋のある附近は相當人の往來もあるし、人語の響きもあるのであるが、碼頭から先に進んで行つた。さきの礪の字のある水邊まで行つて見た。ところがひよつこり先に見覚えの或る碼頭のある小屋の前に出たのである。

月影は暗くおぼろであつたけれども、その文字が見えてゐたので自分は何心なくいかにも靜か

な水郷であると思ひつゝ、その水際を歩いてゐたのである。誰れ人の語る聲も聞えず、たゞ水面に粉を挽く機械の音がコトンコトン和かく響いてゐるのみであつた。

由來人里離れた處には、四川の上流で水上に外車の粉挽船を仕掛け、夜半コトンくと玉蜀黍を搗かせてゐるのを聞いたことがある。それから又浙江は錢塘の上流でも、水車の仕掛けで粉を挽く船を見たことがある。

兎角斯う云つた仕掛を見る處は交通不便な山間の僻地であつて、何となく雲煙萬里の異郷の淋しさを咬れるものがあるところである。さう云ふた天地こそは靜觀の氣持を味ふには持つて來いの處である。殊に太湖の湖畔は物騒な處であると噂されてゐるが、別段何事もなき平和な水郷であるとのみ自分は思込んでそして運動がてらひとり湖畔の逍遙に耽つてゐたのであつた。

19 思出深き東山水邊の悲劇

思出深き東山の島は柳の枝も和かで、潤色いや増しに増し、水郷の趣は十二分に湛へてゐる。邊りに見る島民の生活は、程度こそ低けれ、純朴そのものであることが見えてゐる。片田舎の旅に慣れてゐる自分に取つては、そこに何等印象の氣まづい所はなかつたのである。宿の設備は如

何にも貧弱である。例へば客室の天井はすべて一枚で共通になつてをり、板壁で仕切られてゐると云つた間に合せのお粗末な設備である。又その寢臺にしたところで逆もひどい。それはこれまで山間僻地で自分の泊つた宿に見ない位なものであつた。

でも豫て聞く只一軒の旅館が今は二軒になつたといふだけでも、多少土地の繁榮振りを物語つてゐるかも知れないといふ風に解釋してゐた。一體どの地方でも、その水郷の住民の生活程度は大抵宿屋とその地方の子供の衣裳をさへ見れば分る。宿の貧弱な町は街の状況が經濟的に好くないことを示してゐるに決つてゐる。又家庭の童女の身なりの貧相なのを見れば、以てそのいかに家庭の収入の少ないかと察せられる。親は自分の身を儉約して迄も可愛い子供に良い身なりをさせたのが人情である。それだけにその童女の服装の上には正直にその實相が反映して來るのである。

かう云つた見方で、片田舎の民情を察し、且つ自分のお寺巡りの気分などを味ひ、或は夕暮の平和な湖畔の眺めなどに思ひを馳せて、そうして知る人も無きこの雲煙萬里の水邊に、唯だ一人靜かに逍遙してゐたのであつた。謂ふまでもなく支那は、何れの湖江にせよ、又山野にせよ、到處に青山あり、皆これ我が庭園である。我が庭の中に廬山あり、長江あり、太湖ありと云つた

気分で、大きく之を見てゐるのであるから、その萬里の長城であらうと、浙江の潮であらうと、その親しみの気分は何等變る所がないのである。

江南の地は風光の愛すべきものが多いと同時に、常に兵亂の禍があり、又土匪海賊の禍の頻々繰返されてゐる處たることは謂ふまでもない。それ故月下玉笛を聞く詩景を演ぜる處であつても、それが俄かに急轉することあるは想像され得るのである。

といふのは長江筋の片田舎を歩いてゐても、垂柳の下、路傍の綠草の血潮に染められた土や、石の血だらけになつてゐる處を見ることがあり、又は片田舎の場末で食事してゐると、傍らに人間を後ろ手に廻して、四肢を一纏めに大勢の男が之を蹴つたり叩いたり、頭蓋骨から恐ろしい流血淋漓の慘憺たる所を見せながら連れて行く光景を見るやうなこともある。それ故幾ら平和郷の田舎であるからと云つて、必ずしも和風綠野を吹くと云つた調子にのみ見て置くわけには行かないのである。

この太湖の湖畔は、幾ら山水美に富み、黄昏の平和を象徴し江南第一の別天地であるなど稱へて見ても、これが自分の身に取つて會て無かつた物恐ろしい事に出つくはした遭難の地であると思ふ時には、これまで描き來つた山水美の興味が甚だしく汚されてしふまのである。

太湖、東山の水邊は自分として特筆すべき珍事に遭遇したので思ひ出がよくないのである。けれども、併し全局面の自然美、又永年の歴史上の事實などから考へて、所謂大所、高所よりその思ひ出を考へると、丁度愛兒から一つの悪戯をされた位にしか考へられないのである。以下にこの海賊村で遭遇した喜悲劇の大要を略述することゝしよう。

40 海賊に襲はる

自分は洞庭、東山の水郷で月夜逍遙してゐた時、思ひもよらない寂寞の湖畔から忽ち四五人の大の男が現れた。そして行きなり何心なく立つてゐる自分に向つて大喝一聲する。その一人はこちらの足を蹴る。續いて又二人、三人とかけつけて来て同じやうに蹴るのである。

そのとき何事が起つたかなと自分は多少了解に苦んだのであるが、その場で反抗の態度を執つて見たところで始まりす、逃げたり走つたりしたところで始まりぬ。又さうするわけにも無論行かぬ。だからと云つて臨機の處置をどうして宜いかそれも無論分らない。たゞこちらは一介の老書生であるし、相手は全く何者か分らない。けれども處が海賊村である。音に聞く海賊の片割れでありはしないかといふ疑ひは持つた。或はその仲間からどちらへかニュースが飛んで、さうし

てその村に異分子として見えてゐる游客の自分がこの人氣の少ない水邊に月下姿を現したと云ふことで、之を餌として一かせぎしようといふのではないかといふ氣持も起つたのである。

これまで幾十回に亙る南船北馬の游歴に、自分はいつも一人旅で通してゐる。しかし、身の上に行きなり斯う云つた變事の勃發したことは一度も無い。

場所が場所だけにこの時ばかりは胸にドキツと來た。大事を取らなければならぬと深く感じて、全く自分自ら身を引締めるやうな氣持がした。よく相手を見ると、何れも皆胸にピストルを携帯してゐるし、穩かでない身支度である。

さうしててんでに懷中電氣を持つてゐる。さうかうするうち四、五人が直ぐ自分の顔を照らし又首許を照らし、じろじろ皆自分のかほを見る。體の全體の臨檢をやらうとするのである。何れも顔つきの悪い人相のものばかりである。それが周圍から取圍むのであるから、こちらは四面楚歌の聲と云つた窮地に陥つてしまつた。

そして思はず「やられるな」といふ言葉が自分の胸の中で發音されたやうな感じであつた。けれどもヤラレルと思つてもそれを素振りに現はすわけには行かず、色にも出せない。又その襲撃に對して抗議めいた事を言つてみたところで始まらないことは判つてゐる。たゞ照さるゝがまゝ

に又ポケットを掴まるゝに委せて置いたのである。二言、三言手合は名前を訊かうとするのである。

又どちらから来たのかと云ふことを立て続けに訊問しようとするのである。こちらはわざと落付いて「せき込みなさるな」といふ態度を静かに見せ、自分は徐ろに自分の支那名である「藤石農」と答へる。どこから来たと聞かると、自分は山の上の雨花臺から下つて来たのだといふ言葉だけを二度も三度も答へた。そしてその他は何も言はなかつた。

するとその中の一番脊の高い獐猛なのが、こちらへ来いと言ふ、言ふがまゝについて行つて見た。するとこの船着場から程遠からぬ處に荒物屋があつたが、その店頭の明の點いてゐる處へつれて行く。ピストル連中は皆群がつてこれに集まる。

他のピストルを持つてゐる背の高いのが尙も又名前を言へと云ひ、そして又何處から来たのかといふ。これを疊みかけて訊くのである。同じやうに山上から下つて来たことを答へる以外自分はニコ／＼笑ひ顔をしてゐたのである。連中には怪しい人間であるとして自分を見たか、自分を囚にしては左の方でワイ／＼騒ぎ始める。更に又ピストルを持つた仲間が五人、八人、十人と殖える。来る来る。そして荒物屋の前の廣場は次第に混雑を始めて来た。

やがてするうち飯屋のあたりからも押寄せて来る村人がある、あちこちらから雲集して来たので、淋しい村里の約半分近い者はその水邊の廣場に黒山を築いたわけであつた。そのうち全く後ろの方は押すな／＼の騒ぎになり、何れも皆自分の支那服、支那帽姿を見ようとして爪立ちし背伸びをして、首を伸ばしてゐると云ふ様子が見えてゐた。

けれどもこちらは成るべく喋らない方針を取る。そして態度は成るべく和かくしてゐたのである。第三番目、四番目に尋ねた男は、發音だけでは分らないから字を書け、字で示して見ると言ふ。そして荒物屋の親父に紙と筆を取出させる。

先の切れた古い筆がそこへ出された。行きなり、楷書で要領を書いて見せると、更に雨花臺に何して行つたのかと訊く、曰く、パシヤン／＼（白相白相）。游瀝のためなり。その目的以外何もないのだといふことを明言した。思つたまゝを語つたのである。

するとこの島に来る前は何處に居たのか、何處からどの道を通つて来たのかと追窮するのである。

蘇州の盤門二馬路から来た。運河を經由して来たのだが、游瀝の途次後ろの山に登り、禪寺を尋ねただけだ。その他に意味は何もないのだと明明白白に言ひ切つた。

するとそれでは禪寺では誰れと話をしたかと曇みかける。何を隠さう自分はボーチ（破岐）と云へる太和尙と禪を語つてゐたのだと云つてやる。すると寺に遊び破岐和尚と語つてゐたと云ふ事實がその中の一人の胸にピンと來たらしい。

その和尚は山で知られてゐる和尚であり、之が自分の口から出たものだから考へがちがつて來た。それからといふものは相手の氣持がよほど和らいで來たらしい。顔面神経に和か味が見えて來た。けれども手合のたゞみ掛けて來る勢ひは物凄く有様であつた。尙戶外は身動きも出來ない位人山を築上げてゐるのである。

カンテラの火は暗いし、若しや群衆の中、小石でも誰れか投げる者があると、却つて重大なことになる。別に怖いといふわけでもないが、併し事態はデリケートである。かうなつた以上は事態を大きくしないやうに調節して行かなければならない。勝つ、敗けるのといふ小さい問題でない。それを超越して兎に角この身の安全を圖らなければならぬ。

場所は確かに海賊村であり、連中はその片割れである。懷中物を取られるだけは宜いとしてもあとどういふことになるか判らぬ。若しその最悪の場合を考へて見ても、何處にもこの現場に就いての通信の仕様がな。太湖の島の中では、人を走らせるわけにもどうにも行かず、全然籠の

中の鳥となつてゐる身である。而かも事態が容易ならぬ境遇に陥り、肉體的に精神的に自分は自由を束縛されてしまつてゐるのである。

けれども別段絶對絶命になつたとは思つてゐなかつた。何とか現在のこの刹那の局面を徐ろに打開しなければならぬ。又それは必ずしも不可能の事でない。だからと云つてへたに群衆の氣持を害してはならず、漸次之を和らめ丸めて行かなければならぬのである。

かくの如くして海賊村でたしかに俘虜となつた自分の身柄はどうする。之を自分で體驗するに至つた以上は、我が身の圍りにナイフ一つ持つてゐるでなし、仕込杖一つ譯あるではなし、宿にはたつた五寸大の手籠一つあるのみである。どうしたらよいか。たのみとするところは心のみである。この時夜中のことではあるし、土地に不案内なる自分の行くべき處は何處にもない。役所など云ふものは考へたくない。又それが有るのであるか。無いのであるか、又郵便局が何處にあるか、警察が何處にあるのか、恐らくさういふものは考へたつて役に立たぬ。又殆んど一つも設けられてゐないのであらう。普通ならば村には村夫子が居る筈であるが、この海賊村では村の頭目が糸を引張り、連中を此處へ出させてゐるのかも知れない、などと、萬感胸に迫るものがある。けれども、誰れ人にも相談することが出來ないのである。

たゞ連中は懐中電氣でこちらの顔を照し、不思議さうに目を光らせてゐるのである。自分はそこでそのうち親方らしき者に言葉を掛けた。

「あなた達自分に向つて訊きたい事が色々あるだらうし、こちらからも話したい事が山々ある。此處では關係のない手合がこのやうに百人以上も圍りをかこみ人山を築いてゐる。これでは身動きもならない始末である、我が宿は遠くない大東旅館である。大東旅館は御存じかね」と言つた所が、「知つて居る。よく分つて居る」と來る。「面白い。それぢやあなた達は二人だけで宜いからわしの宿へ来て呉れないか。」と云つたところが快く承知して呉れた。

併しその時は最早や懐中電氣は下に垂れ、さうして最早や足で蹴るといふ態度は見せて居らなかつた。けれども、依然として疑問は胸にあつたものらしい。こちらの希望は二人といふのであるけれども、そのとき百人以上の手合が固つてゐて離れないのである。さうして道を左に取り右に折曲つて初めの山の登り口の左側の家に我が宿があるので、そこまで村の群衆共は、そのまゝ固まり雪崩を打つて來たのである。

若し斯う云つた際に誰れか一人、特に大きな聲をするとか、或は誰れか一人溝の中へ落込むとか、石を投げるとかすると、そのちよつとした變つた事の勃發した事から、それをきつかけに非

常な大きな渦巻が急轉直下起るのである。

さうなつてしまふと大きな渦巻霧圍氣といふものがその事態を益々擴大してしまふのである。

最もその邊に注意を拂ひ、腫物に觸るやうにして居らなければならぬのである。

けれども何もこちらは悪い事をして居るわけなし、百人の群衆はこれ皆我が兄弟であるといふ氣持である。さうしてゐる分にはたゞこゝに誤解があつたなと云ふことが判るだけの話である。雲が晴れてそこが明かになれば幾ら獐猛の海賊村にたけりくるふ先生方にしたところで、後はニコ／＼顔になるものといふ自信を持つてゐる。又それにちがひない。又それであればこそ色々他の地方の夜路、山道、田舎道を奥地から奥地へと歩いて來られたのである。

恐らくこの地方の先生達よりもその點に於てはこちらは決して引けを取らない。こちらの方が寧ろ上であるかも知れないといふ腹を持つてゐるのである。

かやうに腹の中では幾ら安心をし括る處を括つてゐても、事態は決して安心がならない。少しも安心出來ぬ。あと蛇が出るか。へびが出るか、又話の模様でどういふ風に悪化するかわからない。兎に角今がクライマックスであるといふ感じから一段と落付いた態度を執つた。又とらざるを得ぬのであつた。若し宿に歸るまでに闇路を辿つてどこか山の方へ逃走つて見たところで始まら

ぬ。仕方がない。又相手の我が足を蹴つた手合に向つて、こちらが暴力を以て反抗し、背負投を喰はすといふ柄でもない。組み打などして見たところで始まらない。斯うなると後は全く腹と腹との問答になるのである。決して蹴つたり叩いたり、兇器を振廻したりするのは宜しくない。けれども相手といふ相手は皆ピストルを携帯してゐるのである。晝間ならば左程にも感じないであらうけれども、知らない夜の旅でかやうな場面に不幸にして出つくはしたといふことは、不幸な運命なのであるから、こればかりは考へて見たところで仕方のないことである。又今一度やつて見ると云つたて出来るものでもないのである。

九、海賊と禪問答

41 海賊問答三時間

なだれ打つ群衆を引摺つて、我が宿に着いて見ると、主人は姿を見せない。帳場に居ないのである。奥の方に引込んでしまつたものか、店頭には誰れも居ない。やつと番頭を探し出し前に連れて来た。ところが、行きなりピストルをたすき十字にした男が宿帳を見せと言ふ。そしてこの泊り客へ自分のことを訊きたいといふのであつたが、番頭はたゞ簡単に宿帳を開き指さしてゐたきりで、姿をどこへか隠してしまつた。そこで自分は入口から這入つた左側の壁下帳場のカウンターに椅子を占め、主人格の位置をとつて之にをさまつた。そうしてピストルの手合を自分と差向ひに坐つて貰つた。

ところが押すなくの仲間は、人の垣根を作つて、十重二十重と押掛けてゐる。手狭の支那宿の事として大半は道路にはみ出してゐる。往來は全くこれが爲めに一パイで杜絶されてゐる。若しこ

の片田舎に警察でもあらうものなら、自分を中心に相當時間も経つてゐることだし、何とか裁きのために来るものがありさうなものであるが、そんな景色は更でない。

又村の村夫子たちでも居るならば顔を出しさうなものであるが、さう云つたものも来ない。近所の内儀さん達百姓達は、見物かた／＼殖える一方であるが、その整理の側に立つ人はひとりくらはは現はれさうなものであるに、一向来てゐさうもない。それで萬人の眼は皆自分の顔にのみ注がれてゐる。

今度は我が宿に来てゐるのであるから十分ゆつくりと話が出来る。自分も思ふ存分話してやるつもりである。向ふは更に自分のこゝに来てゐる旅行の目的やその真相を確かめようとしてゐる。そして腰を据えて打掛かつてゐる。

自分はそのとき同じやうな事を幾ら繰返しても仕方のないことだと思つたが、相手は次のやうな事を訊くのである。

あなたは蘇州の人か、それとも他の地方の人か。府生はどちらか。又職業はどんな事をしてゐるのか。初めから此の島に渡るつもりがあつて見えたのか、どうか。どの位此處に来てゐるのか。など云ふ質問であつた。向ふの云ふことは島の言葉でよく方言が聴取れぬ。訛りが多かつたので

片言交りでこちらも多少答へてはゐたのであるが、意を盡さない所が多かつたやうである。そこで結局筆を執つたあなたの訊きたいだけの箇條を此處へ書いて見なさいと云つて自分は紙を渡した。そうして一行置きに判然と書いて見せてくれ、その上でその傍へ一々僕が此處で答を書くことにするからと言つた。

ところが仲間の一番字の上手さうなのが、懸腕直筆と云ふではないけれども割合正しい筆の持方で筆法を正しながら書いてくれた。そこは可愛く見えた。何でも七八箇條書いて居つた。自分はそのを見て暫し發言もしないで、たゞよく答案を書くつもりで黙つてゐた。やがて綺麗に楷書で書いて見せた。

すると、この人は存外、字をよく書くなど言つてさうやいてゐるのが聞えて居つた。その時自分はその答を書きながら感じたのである。何故この連中は荷物を見ないか。どんな行李を持つてゐるか、内容に如何なる物があるかといふことを考へさうなものである。しかしそは一向質問しない。

若し手廻りの物を突止め、しらべるやうなこともあると、その中に、地方を旅行する地圖、但しこれは蘇州の支那宿で買ったものがある位でたいした物は持合はしてゐなかつた。今一つは

イギリスの税關から出したローマ字入りの可なり詳しい地圖を所持してゐたのである。これは上海で求めたもので、その二つが小さく折つて手提げに入れてあつたのであるが、あとは手帳にシヤツの洗ひ替へくらゐのものである。

誰れか一人手廻りの點に氣が付いてその事に及んだとしたならば無論出して見せるつもりであつた。

そのとき思つた。或はもし奥へ縮かまつて引込んでゐる宿の主人がお客さんの荷物はこれだけですよと云つて持出すやうなことはないか。さう云ふ心配は持つてゐた。

手提げを取られてしまふくらゐのことは何も残念ではない。けれども、その事をきつかけにして事が進展し重大になると、つまらない事から痛くない腹を探られる。それこそ問題が表向きになるにきまつてゐる。或はその爲めに最悪の結果の起るに至る事を豫想しなければならぬかも知れぬ。だから成るべくその荷物の事に考を向けさせないやうにのみ話を導いて居つたのである。幸にその點に誰れも考が付かなかつたのはよかつた。

更に又、初め湖畔でピストル連中がポケットを掴み、色々自分の身體検査を行つた時に、金の在所はよくしらべて知つてゐた。けれどもそれを取つてはしまはなかつた。金を取るといふこと

よりも寧ろ自分の體についての色々を取調べをしようとして居つたらしかつた。

又こちらとしても無理に金を取らせないやうに努めてゐたのではなかつた。かうなつた以上附いて流れるやうに風に柳の態度を執つてゐたのであつた。

腹の底では若し事態が面倒臭くなつたならば、経験の爲めでもあるから海賊の仲間入りをさせて貰つて物の半年や、一年見習つて見るのも却つて御國の爲めになる位に考へて居つた。初めからそこまで腹をきめ、投遣つて委してしまふ氣でゐると云ふと、存外向ふでも判つて来る。さう普通の人間に向ふやうに積極的の態度には出でないものらしい。

後で考へると、多少こちらでも強く出て向ふに反抗せしめるやうにして見る。すると、きつとこちらは囚はれの身となり、その内部に仲間入りさせて貰つた方が面白かつたかも知れぬと思はれたのである。けれどもそれには今少し金品を澤山持つて居らなければならぬ。向ふの収益にたらくらゐは持つてゐなくてはならなかつたかも知れない。

相手の腹の底はよく判らない。けれどもまだ自分に対しての疑問は晴れてゐないのである。色々自分の答へた話の中には次に示すやうな事實が幾つか並べられたのである。それで更にその氣持は和らいで來たものかとも思はれた。その要領はかうである。

(一) 自分は支那名を「藤石農」と云ふ名前を持つてゐる。けれども實のところは日本人である。支那を旅行する時にのみ此の支那名を用ひて歩いてゐる。そのわけは支那に懐かしみを有すること深く、又これに親しき友達もある。支那名でゐる方が諸君に親しみの情を増す所以であると思つてゐる。

(二) 上海方面に約四萬人の在留日本人があるが、自分の如くお國の帽子衣服を纏ひ、かうして朝夕やつてゐる者は餘り居ない、これは經濟でもあり便利でもあるけれども、第一はお國が懐かしいのでやつてゐるのである。そこをよく考へてもらひたい。

(三) 日本に行つてゐるお國の青年たちは澤山ゐる。殊に留學生の中には自分の弟の如く、又子供に如く思つてゐる可愛い者が澤山居る。湖南地方から來てゐる馬融君の如きは東京牛込の士官學校に留學してゐる。自分はその君の保證人である。時々その寄宿舎へも遊びに行つて日常生活の状態まで見てゐる。演習先から七言絶句の詩を作り月夜の風懐だと云つて自分の手許へ送つて呉れたこともある。又或る留學生は日本の外務省から給費を受けたといふので自分は一緒に連れて行き月六十圓七十圓の金を貰つてやると云つた風に犬馬の勞をとつたこともある。その他學事關係の事に興味を持つていつも面倒を見てゐる。

(四) 日本に來てゐた民國の公使、汪永寶（今は故人となつた）大人の如きは、學者であり又趣味の人でもある。永年自分は東京で、北京で、上海で、各所で交遊があるのでよく自分の身許について知つて呉れてゐる。其他公使館には江洪杰參事官楊雪倫書記官等皆自分の老朋友である。(五) 南京政府の要人の中にも戴天仇大人始め直接間接知つてゐる友達が少くない。自分は子供の時からお國の文字を研究し書道の事に特に興味を持つてゐる。董其昌の書を樂み又この洞庭の島に其墳墓のあることを聞いてゐるので、出來れば墓詣りをしたいと思つてゐるからである。

(六) 禪寺で和尚に會ひ、禪を語るのは殊に自分の遊歴の一目的としてゐるのである。

(七) 豫ねく幾十回とお國の田舎は旅をしつてゐるので型の如き護照（旅行免狀）などは今携帯してゐない。東京の自宅に置いてあつて滅多に持つてゐることはせず、又護衛兵なども連れて歩くことなく、今回も唯一人で歩いてゐる。總べて簡單にやつてゐるのである。

(八) 江南地方ばかりでなく、支那は四川の奥まで、或は北支那に、又は廣東に南洋にと隨所を遊歴してゐるのであるが、未だ會て今夜の如くお國の方から僕の體に暴行を加へ、靴で蹴られるなど云つたことはなかつた。此の村に來て初めてかゝる恨事を見た。甚だ以て自分は遺憾に思つてゐる。けれども諸君はさういふ惡心があつたこととは思つてゐない。何等齒牙に掛けても

居らない。若しこれ以上更に説明をしなければ僕の心事が判らないとあるならば幾らでも猶今夜徹宵してでも説明してあげますよ。今少しく訊きたい事があるならば別な紙に其箇條を明記して御覽。又諸君以外の方でこゝに傍聴してゐるゝ方で僕に何か尋ねて見たい事でもあるならば幾らでも申出なさい。と和らかく、大きく出た。そしてそこに或る條理を盡して兄弟の如く親子の如き氣持になつて述べて見たのであつた。するとその間水を撒いた如く靜かになつて、流石の黒山を築いてゐる連中も、その時ばかりは劇的のシーンを見せてゐた。最早こゝまで掌中に入れて連中の心をつかみ導いて來るといふと携帶の品物の事など思出しもしないと見えて遂にその事に及ぶ者は一人もゐなかつた。

自分は更に言つた、君達の商賣が何であるか、僕は知らぬ。けれども遊瀝に來た者を行きなり掴へてそうして暴行を加へたりポケットの物をしらべたり、或は一伍一什を家宅搜索同然に訊き追窮するなどは甚だ今後のパンヤンパンヤン（白相、白相）する人々にとつて芳ばしくないことであると思ふ。自分はまだ明日は此の村を發つてこの島巡りを爲したへ、次の西山にも船で渡り白相白相を恣にする積りでゐるのだ。そうして出來るだけ好印象を得てこのパンヤン／＼（白相白相）を果したいものだと思つてゐる。

諸君が僕の現在のこの刹那の氣持をどう感じて呉れるか腹藏なく言つて呉れたまへ、と開き直つて言つたところが、その初めから膝詰めに力を入れてゐた二人が暫く言葉を發せずかたくなつて黙してゐた。がやがて靜に顔を見上げてこちらを見ながら左手を胸に當て云ふ、先生はシンハオ（心好）だと連呼し、あなたの氣持はよく解つた。他意あるにあらず、よい人であることが判つた。自分達が全く誤解して居つたことがわかりましたといふ事を表現して、無暗に初め靴で蹴つた時の事などを水に流して呉れよと云はぬばかりのやさしきみを見せて來た。

さうしてその揚句、縦長い活字で刷つた名刺を呉れた。一人は「李梅亭」（二十五歳）一人は「唐萬虎」と云へる文字を刷つた名刺を呉れた。さうして言ふには「私達はこの海賊村を見張つてゐる役柄を持つてゐる者で巡邏を晝夜となくやつてゐるものであります、誠にこの度は……」と言ひながら香煙（煙草）を出して自分に吸へと云ふやうな何となく可愛い態度を見せて來た。さうなつたものだから、こちらも涙の出るやうな感じがし出した。

無論こちらから連中に向つて名刺を呉れなど云つたわけではないが、もうそこに既に一種の電氣が感じたものと見える。如何にもなめくじの前の蛇みたいな風に大きな團體をうな垂れてゐるのであつた。そんなにされなくとも事が解つたならばそれで宜いと一言云つたところがモウ歸

ると云ふ。

マア熱いお茶でも今出させるからと云つて引留め、悲劇が遂に喜劇となつた。この一幕が大體斯様な大團圓の筋書でをさまつたのは不幸中の幸であつた。

42 館主身を隠す

大東旅館の店頭には思はざる劇的場面を演じた自分はこゝに生涯忘るゝことの出来ない旅行振りを發揮したわけである。

かう云ふことは自分の支那の田舎旅行として、當然これ迄に幾度か出くはせて居らなければならなかつたことである。

幸か、不幸か、今までは常に無事に行つてゐた。この李、唐の二人を中心に雲霞の如く押寄せて来た。海賊村の手合は、自分のその夜の食後、湖畔で事を構へてからあと、荒物屋の前に引張つて行かれそうして旅館で大團圓の幕を閉ぢるまで、かなりの時を要したのである。かれこれ三時間もかゝつた。最後にお茶を出した時分は丁度時計が十時を報じて居つたのであつた。茶飲み話になつてからも尙七重八重と、傍聴者がゐたが、そのときは違つた氣持で耳を傾けるやうにな

り、邊りの雰圍氣も遂に一變してしまつたのである。

笑話になつてから云ふことに、近來この島には依然騒動が多くゴタ／＼が絶えない。それだから吾々仲間では最近戒嚴令を布いてゐるやうなわけなのです。丁度測らずもあなたは蘇州から飄然見えて、そうしてぼつねんと一人姿を普通でないあの湖濱の場所に現はされた。それから吾々はソラ来た！ とばかり襲うたのであつた。大抵見えた方は府上（お住居は何處か）生意（職業）出發地と目的などを型の如く訊問することになつてゐる。甚だ失禮な事を申して申譯なかつた。どうか清ふ安んぜよ、と云つた事を幾回も語り出でた。こちらも元來が趣味の遊歴なのであるから戒嚴令の事など固より知らうわけもなく、又踏込んでならない方面へ知らずに足が向いて居つたといふやうな事であつた。それが疑はれる種になるのも無理からぬことであるといふやうな事をお互に語り合ひ笑つて話はすませたので益々氣持は和らいたのであつた。

かう云つた双方の膝詰が圓くをさまり最早や鼻が付いたのでボーイは二度目のお茶を入れ直したりなどする。又人山を築いてゐた路上の手合も、中にはよく側で話を聴いてゐたのでスツかり話が判つた。當分は湖畔の噂話にもなることなのであらう。がそれ位にこの邊には滅多に他から舞込んで来るやうな流浪者はゐないのである。

偶に大荷物を持つて船を仕立て湖水を渡り彼岸に輸送すると云つたやうな船をば大仕掛に襲撃して之をふんだくることくらゐはあるのであらう。敵の海賊村から探偵にでも來たと云ふときは兎も角も普通の者が迂つかり踏み込んで來るなど云ふことはない。あるとすればひどい目に遭ふのである。

これは此の地方の自治的生活が堅固に出來てゐる事を却つて證據立てるものである。尤も餘り人相のよくない自分達であるから、殊にその夜は臘月の晩ではあつたし、影法師が現れたゞけでもソラ來たとばかり騒ぐ所であるらしい。

旅館の方では開店して以來未だ嘗て斯様な騒ぎを起した客を泊めたことは無いと云つてゐた。手狭の宿屋としては大變な迷惑であつたらしい。押し掛けてゐた手合は次第に散じて行つた。彼れ是れ十一時近くには誰れも皆居なくなつた。するとニヨコ／＼主人が帳場へ姿を現はして來て云ふには「一體どうなさつたんです、今夜の騒ぎは？」と、云ふので「何處かで聞いてゐたかね？」と焚きつけて見たら、「わしなんか怖くて迎も出られた騒ぎぢやなかつたですよ、一番奥の部屋に縮かまつてゐました」と云ふ。

「そうして僕の手提げは何處に？」と言つたら「いやそれは一番奥に持つて行つて大事に守つて

ゐました」と云ひながら持つて來て呉れる。兎に角一方ならず心配をしてゐたものらしい。併しどういふわけで今晚の騒ぎが起つたかといふことはやはりまだ知らなかつた。あとでその大體を話してやつたら、さう云ふことでしたかと云つて安心して笑つてゐた。

43 夜半武装海賊の襲來

太湖洞庭の大東旅館は門前孤燈人影を見ず、さしものその騒ぎを演じてゐた場所であつたに拘らず、今は全く物淋しい化物の出て來さうな處となつた。これが此の支那宿の正體なのである。

彼れ是れするうちに夜もだん／＼更け行き一生一代の騒ぎのあつたあとのこととて、自分も心を安んじ樂々寝ようと思つて定めの一室の寢室にをさまり、番頭を呼んで明朝は早く七時頃に發ちたい、顔を洗つたら直ぐ發つことにしたい。

今夜の中に勘定をすませて置きたいからと云つて宿を濟ませ、その日の總決算は悉くこれで終へ、件の手提げは番頭に預けたまゝにして、自分は餘り寢心地の好い寢臺とは思はなかつたが消燈して身を横たへたのであつた。

しばらくすると先刻來天井を共通にしてゐるお隣の泊り客は夫婦者であるのか、連込みである

のか、頻りと男と女の聲が喋々々々としてゐるのである。無論まだ火を消しては居らない。何とな
く自分の部屋も薄明い感じがしてゐた。

時々談笑の聲が耳に立つやうに高く聞えたり、さうかと思ふと何だかねだつてゐるやうな聲も
聞えて見たり、日本でならばシイツ〜といふ發音をやつて暗に睡眠の邪魔になるといふことを
示したい位のところであつた。

自分は我慢してそのうちに眠れるだらうと思つてゐたが、なか〜耳に立つて寝られない。到
頭一時間経つても二時間経つてもまだ、寢物語を續けてゐるのである。

支那の宿屋ではいつも此の點が閉口させられるのである。

假令壁を隔て全然隔離された別室であつても、大聲をして夜通し騒いでゐることがあり、甚だ
しきは廊下の窓に沿うた處で四名のボーイが麻雀を始めガチャ〜牌を混ぜる。又痛快であつた
時には黄色い聲を張上げたりなどして何時迄も宵の口のやうな氣分を漲らせることもあり、迎も
寝られたものでない。旅慣れぬ客は南京虫が寢床に現れ騒ぎが耳に立つので兩攻めで寝られない
といふことをこぼすのである。

この支那宿こそは自分としては命拾ひをした宿屋であるので、今夜こそ深く眠つて朝早く起き

たいとのみ念じてゐたのである。が、自分の枕元の時計さへも聞えない位に隣室ではしやく聲が
まだ〜止まないのである。しかし自分はやがてうと〜とし始めた

ところが彼れ是れ夜半一時前後であつたかと思ふ頃、飄然枕元にピストルを持った大の男が現
はれたのである。別段門の開かれた音が聞えたわけでもなし、裏に後門があるわけでもない。何
處からどう這入つたのか分らない。まさか、先刻の連中があとに一人だけ姿を隠して忍び残つて
居たわけでもあるまい。

けれども現實に自分の枕邊にそれが突立つてゐるのであるから何とも仕様がなないのである。先
年東京で説教強盜の第一世であつたか三世であつたか、小石川小日向臺町の新渡戸博士邸内に裏
口から忍び込んだことがある。そして博士の枕邊屏風の前に立つた。博士の耳の側で金を呉れ金を
呉れといふ言葉を連呼するのであつた。目を覺ました老博士は、金など貰ひに来るのはお門違だ
と言ひながら寢臺から立つてスリツバを履かうとした刹那屏風が倒れた。すると相手は屏風の後
ろに何か仕掛でもあると思つたのか、ハツと勢ひよく逃げて姿を晦ましたといふことであつた。
その事は翌朝自分が博士を見舞に行つた時に親しく博士から其の場で述べられた直話であつた。
當時の説教強盜は別段ピストルを持つて脅かし、居るのではなかつた。自分はこの海賊村で二

度目の襲撃を受けたのである。今度こそは恐らく最後の出来事であらうといふ氣持を抑へることは出来なかつた。

これは夢ではない。確かに隣室の男女の聲は依然として聞えて居るのである。だからと云つて枕邊のカンラテを點けて見るのも考へものだし、點けないのも亦考へものである。持合せの金を遣つて見たところで焼石に水みたいのものである。

こちらは何も兇器は持つてゐないが、相手は例によつて例の武裝振りを見せつけてゐる。而も直ぐ自分の耳の側にはピストルの銃口が向けられて居るのである。どう解釋して見てもそれはよく分らない。

けれども何時迄もヂツト黙つてゐるわけに行かないから、言葉を和らげて靜かに落付いた調子で次のやうに言つて見た。

「君は李先生でないのか、先刻見えた李先生でせう」と言つたら、たゞ簡單に「さうだ」と言ふだけであつた。又自分は續けて言つた「先にはあれで話がスツかり解つてゐた筈であるし、僕もそれで安心をして寝てゐるのである。が、何かまだ外に用があつて見えたのであらうと思ふがどういふ事でこんなにおそく見えたのですか」と言つた。併しその時自分は言葉ではさう言つたも

の、自分の胸の中では、金を取りに來たのでもあるまいし、命が欲しいので來たのでも勿論あるまいしと内心思うてはゐた。

けれども、それは決して言葉には出し得なかつた。のみならず身邊から金など出して一とつかみ與へやうものなら何處に金があるかが見られてしまふし、すつかり取られてしまふに決つてゐる。それよりも命が危ぶまない。けれども最早今は金の問題ではない、又命の問題でもない。金と命を超越して、然らば何であらう。而かもこの場所は海賊村であるし、時刻は夜半の一時頃である。既にモウ自分の氣分は安心し切つてゐるところへ持つて來て、又もピストルを持つて乗込んで來たといふについてはどう考へて見ても腑に落ちないものがある。思案の付ないものがある。

この時自分の絶對絶命振り先刻の湖水の水邊の處の比でない。たゞ併し相手が一人であるしこちら一人である。今更隣室の人に感付かせる必要もあるまいし、番頭主人を起すの必要もない。たゞ問題は李先生と自分との間で、解決すればそれで宜いのである。だからと云つてその眞の夜中に武裝海賊の再來に對して、こちらから提案すべき何物も持たない。問題はたゞ一つの命そのものゝ外に案することはないといふ切破詰つた所に來てゐるのである。

併しこちらは寝てゐる體である。又さうであるからとてこゝで起きて坐つて見たり、腰を掛け

て相對して見たりしたところで始まらない。お茶など出してゆつくりすべき時でもない。

そこで自分は眠いといふことを看板にして次のやうに言つた。「僕は朝が早いので今夜は早く寝ようと思つてゐるのにまだ眠れないでゐるんだが、餘程重大な事でもあつて來て呉れたのではないか、僕は李先生の好意を心深く謝してゐる次第だ」といふ意味の事を言つてやらうかと思つた。けれども、それも猶早まると思つて落付いて居つた。

又李先生のピストルの銃口を握つて、それを力に坐り直して見ようかとも思つた。けれども、それも餘りにひどいのでさうもしなかつた。あとから言つて見ればあれやこれやと色々感付く事もあるのであるが、その絶對絶命の瞬間に在つてはかういふやうなくだくしい心理作用は何も起つて來ぬ。そこで自分は最後の言葉として、

「李先生、こんなに晚くわざ／＼來て呉れたわけを聞かして貰ひたいもんだ」と云つたところが、向ふから非常に低い調子で以て次のやうに言ふ。

「あなたは明日の朝早く單身で西山の島の方へ渡りたいといふ事を先刻言つてゐられた。本當か若しさうされるのであるならば、私の部下を六人附けてあげようと思ふ。之を護衛にしてつれて行きなさい、護照の旅行免狀は持つてゐないと言つて居られたが、實際、何も持たないのであれ

ば尙更ら行く手は危険だ。この村よりも次の村の方が一層人氣が悪うございます。時折り行方不明になつた人の話も聞いて居る。どうしても旅立ちされるならば、悪いことは言はないからさうなさいよ。その事が氣になつたから思出して今こんなにおそくお尋ねしたわけだ」云々。

といふ意味に取れる事を言つて呉れた。その時お隣の部屋では猶はしやいでゐる聲が時々聞えて居つたのである。が、その調子の低い言葉のうちに自分に對する李先生の好意の閃きが感ぜられてゐたのである。

して見るとそのピストルを持つて這入つて來てゐるけれども、それは意味の無いことである事が判つてゐるやうに思はれたので自分は次のやうに答へた。

「李先生の御好意は誠に恭けない、有難くはあるけれども如何せん私は金を持たない、六人のお仲間に旅費を持ち、酒を飲ませ、甘酒をふるまひ、飯を食へさせ謝禮をして行くといふことは、自分の初めからの計畫はさうでないのだから、それは出来ない相談である。だからと云つて次の村が一層險惡な所であるといふことは困つた話であるが、併し、私は必ずや切抜けて行けるといふ自信を持つてゐる」と言ふ。

すると李先生は次のやうに又言ふ。

「でも村の事は私の方がよく知つてゐる。悪い事は言はないからどうしても連れて行きなさい」と疊みかけて親切に言つて呉れる。けれどもそれは幾ら言つて呉れても僕は初めの言葉の通りで翻すわけに行かないと云ひ切つた。再三再四押問答を繰返した。この間の双方の氣持は讀者自身に想像して貰ふの外ないが、事實この通りの心境を向ふに披瀝して居るし、こちらは又その思つた通りの事を卒直に述べて居るのである。

そして遂に二人の話は不調に終つた。自分は何處までも連れて歩くことの出来ないことを申立てたのである。

之については過ぐる大正七年に十名餘りの安武軍の兵隊、その小隊長に王雨田といふものゝ一箇小隊を連れて歩いたことがある。一日の旅程の半分も歩いて呉れない。酒屋があれば居酒屋に這入るし、甘黨は甘酒屋に這入つて出て来ないし、さうかと思ふと、途中で堤防の木蔭で晝寝する者があるし、狡い奴は他の連中に鐵砲を二本三本持たせるし、馬鹿正直な奴はたくさん持たされる。そしてその荷物が重いと云つてなかく歩いて呉れない。

その時他の荷物は他に傭ふた雇人に持たせるのだが、その傭人を庇つてやるわけでない。天に雨雲が現れると、その携帶せる傘をさゝんとし、雷が鳴れば相々傘で二人三人傘の中に這入る。

夜は提燈をさげてお花見の歸りの氣分で面白くをかしくやつてゐる。

プログラム無しにたゞズル／＼べつたりでよい旅ならばそれも宜からうが、併しその日／＼の勘定は皆こちらがさせられるのである、甚だしきに至つては食ひ逃げ飲み逃げをするのでその尻を始末させられる。酒屋の親父が街に追駈けて来て、結局金を要求する。その時にはあの旦那が拂ふのだといふ風に自分を指さし云つて行く。

そうして最後に別れる時にはその上又少なからぬものを心付けしなければならぬ。出發に際しては相當な旅費をかれら銘々ポケットに入れて膨ませてゐる。これはよく見えてゐる、けれどもその方は一文も使はない。のみならず毎日自分ども日記をつけてゐると、夜中部屋にやつて来てどんな事を書いたかといふ事を一々見て行く。

それには意味があつてしてゐる譯でもあるまいけれども、なか／＼立入つてうるさい。そして身邊を離れない、硯の研究になるつもりで銀の星のある黒い石でも拾へば直ぐそれは銅か鐵の含まつてゐる材料として採集するのではないかといふ風に意味あり氣に腹を探らうとする。

途中民家の小鳥の籠を失敬するくらゐは何でもない。又道中に問題が起きると針小棒大な報告を軍部へ送る。そうして吾々が防禦した爲めに遊歴客は無事に命拾ひが出来たのであると云つて

筆を走らせる。

あれやこれやを綜合して見ると、今度假令六人にしろ十人にしろ之を連れて歩くといふことは大抵でない。風流の旅行漫遊には、逆も堪へ得られるものでない。初めからそのつもりで出發して居るならこれ亦格別である。かう云つた護衛兵を連れて歩くことについては南安徽省の奥地旅行で自分は生涯復たとなき苦い體驗をしてゐるのである。

かう云つた辛き經驗のある自分の心の中では、如何に夜半鄭重に情を盡して言つては呉れてもどどのつまりはきつぱり最後まで断はり通したのであつた。

すると、そこで更に又李先生は聲を低めて言ふには「それでは是非ない、然らばその六人の護衛兵はおやめになつたら宜い、その代りに私が伴いて行く。私がついて行つてあげませう、これでどうか」と言ふ是非なき言葉であつた。

その時自分は又更に考へた。田舎の山寺を尋ねたり、又寺小屋に立寄つたり、風流韻事を尋ねんとするこの度の旅行に、一人と雖もピストル仲間を連れて歩くことは有難くない。又いつ何處でどういふいさかいが起らないとも限らない。

自分自身には何等さういふ氣配はなく、自己李先生との間に仲違ひの起ることも想像してゐ

ない。けれども彼等の間で、如何なる宜い事が行はれるか、悪い事が行はれるかは今此處で速断出来ない。けれども全然私の心のないこと又事情を盡して言つて呉れてゐる事これだけは打消すことが出来ない。

そこで自分は暫し考へて見た。返事は鈍かつたのであつた。けれども最後に思切つて言つた。

「貴下はピストルを携帯してゐるし、六人の護衛を付けるよりも李先生一人を付けた方が自分には一層光榮に感ずるわけである、光榮に感ずれば感ずるだけの事をしなければ義理が相濟まない。又僕の體面が立たなくなるわけである。だからと云つて此處で之を無下に御断りしては折角來て呉れた李先生の面子が悪いわけになる、實は自分は決定しかねて困つて居るわけである。けれども、自分の心境を正直に披瀝すれば、餘りに勿體なく、來て戴く氣持にならないのである。

併し自分は旅の人であるし、あなたは土地の偉ものである。僕は断つてもあなたが伴いて來るといふことになれば自分としては最早これ以上言葉が無い。けれども僕は一緒に行つて貰ひたいといふ希望は述べたくないのだ。だからと云つて僕の後を又つけて來て呉れるといふことは僕は平に御断りしたい。

假令僕が見えて居らぬ處であつても後をつけて來るといふことはして戴いては濟まぬと思ふ。

だから折角の御好意は感謝するけれども、共に護衛の關係で歩いて呉れるといふことは平に重々御断りしたい」云々。

といふ意味に取れる事を片言交りで自分は色々言つて見た。實に苦しかった。言葉の言ひ廻しのむづかしいのと、その氣分をそつくり向ふの心境に移すと云ふことはむづかしいのである。可なり骨が折れた。

先刻の三時間の説明よりもこの方が骨が折れた、併しその時ピストルはやはり自分の顔七、八寸の所に来て居るのである。幾ら言つても同じ事であるから「それだけは李先生どうか自分の氣持を諒として呉れ」と言うて、言葉の言ひ終らない時に自分は手を差延べピストルを握つた。

そこで、手で靜かに銃口の所を撫で廻して、そうして、

「時に李先生このピストルに附いて居る紅の絹の房は洵に立派ではありませんか、ハオカン（好看）ではありませんか、よくお似合ひですネ。これは恐らく蘇州出来であらう、絹もよし染めも良い。恐らく二弗位したであらう、殊に李先生は之を掛けてゐるのでよく風彩が似合つてゐて宜いですネ。」といふ方へ話を外らして行つた。

すると先生「なにこれは二弗もしません、八十仙ですよ」など打明け話をしてかるく笑つた。

「先の唐さんののは樺色であつたが、あなたのは紅で一段あなたの方が格式は宜いのだらう」など言つて、少しは氣分を和らげる方の話に轉向した。

次いで尙「李先生は奥さんはあるのですか」と言つたら「あります」と答へる。

「子供さんありますか」と言つたら「ある」、「女の子か」と言つたら「男の子だ」と言ふ。

「將來どういふ方面に向けますか」と言つたら「軍人にしたい」と言つた。「軍人ならば中國で大きくして後東京の士官學校へでもよこさせぬか」と言つたら「是非さうしたい」と答へた。

「東京へ遣つた時にはあなた保證人になつて金でも貰つて呉れるやうにして呉れますか」といふやうな話にまで進み、夢のやうな鬼の笑ふやうな話であつたけれども、さういふやうな話にまで落として來たのである。

こゝまで來れば最早や護衛を断つた事も又李先生自身の來てくれることを断つた話もスツカリ水に流してしまつた形になつた。

餘程局面が開いて朗らかになつた。天空海嶺の萬里の野を見渡すやうになつた。その時隣室の男女の語聲はまだ聞えてゐるのである。向ふも向ふだがこちらはなかくの骨の折れた一夜であつた。

やがて自分は李先生に「もう彼れ是れ二時にも近いことだから折角の御好意ではあるけれどもどうか悪からず」といふ言葉を二三回繰返してその好意を深く謝したのであつた。

すると「是非ない事を申上げたけれども實は私の心境をそのままに申上げたのであるから、あなたの方でさういふお心持であるならば、決してそれを自分はとうといふ風に考へるわけではない」と言うて心持よく引取つて呉れた。

自分は最後に「それなら私も御好意に對して満足な氣持で寝られるが併し尙明日の朝この宿へ僕の發つ時刻に自身見送るとか人をよこして呉れるとかいふ事は平にお断りしたいから」といふ。之を最後の止めの言葉として駄目を押して置いた。李先生の枕邊から去つて行つた時は彼れ是れ二時を少し廻つて居つたのである。

44 飄然宿を立つ

海賊村支那宿の難局はそのやうな場面を體驗し、どうにか斯うにか突破することが出来、その晩は疲れたので、グツすり寝た。殆んど夢を見る所もなく、深く睡眠が取れた。そして朝の七時前には一人で目が覺めた。

すると番頭は小さい洗面器に湯を運んで呉れた。香の高い熱茶を手の附いた茶碗に入れて卓上に出して呉れる。貧弱な點に於ては屈指の旅舎であつたけれども、前夜からこれだけ手間を掛け又これだけ心から盡して呉れた支那宿は無いと言つても宜い。そこで心ばかりのしるしをして發つた。

豫定の通り宿を旅立ちして大體、その日の旅程を思ふがまゝに道を湖濱にとり、西に向ひ、山越しをしてヤンウエー（楊灣）の船着きまで行つて其處から、船で湖を渡り西山の島に行く。これ一日十分掛かるつもりで居つた。又楊灣の碼頭に行くと船が出る。たしかに西山行の船があるといふことを宿の番頭から教へられたのであつた。

村外れの山の麓、西街巷の市場を通り抜ける。今まで見たこともない大きな鯰が籠に幾つも這入つてゐるのを見る。豫て日本鹿兒島のマーケットで三尺大の鯰を見たことがある。こは大島種子ヶ島から來たのだと言つてゐた。

太湖の鯰はそれより大きくあつても小さくない。又大きな鼈が獲れて居る。海賊村だけに湖水から獲れる魚介類もグロ的のものが多いやうに見える。

更にその村外れに「郵局」の看板の掛つた事務室のあるのを見た。成る程この島も此處まで來れ

ば郵便が出せるなといふことが分つて、東京へ此處から葉書を出したのであつた。無事に今日自分江蘇太湖の此處を通過してゐる事を知らせておきたかつた爲めである。

此處の村外れを出てしまふと、暫くは田園竹柏の林となる。此處で朝飯をとつた。草餅の大きなものが鬻いで居つて、その味ひは大變妙であつた。昨日登つた大尖頂の山は後ろにはるかに聳え、田園の畔徑に沿ひ老農だの百姓の子供だのを道連れにしながら、如何にも片田舎の野趣のあるところをあるいて行つた。田舎らしくて實に懐かしい。海賊村の凄味のある所と云ふものは更に無く、昨夜李先生があんなにしつこく言つて来てくれた手合の片割れと思はれる者は何處からも出て來ない。又その氣配もない。心安々と唯一人旅を續けて平和な島の行脚に立歸ることが出來たのであつた。

45 東山の寺小屋

林下の佛寺、中天王行宮と云ふ廟の前に差掛つた。すると二十人餘りの童女の讀書をしてゐる聲が窓外に聞えるのである。

これは又やさしい處であると思はれたので思はず廟へ這入つて尋ねて見た。案の條村の寺小屋

であつた。古書に「庠序に咿唔の聲を聞く」とあるが、それは斯ういふ古代式の田舎の子供の讀書状態を言ふのである。その教室に失禮して這入つて見た。二十七、八と思しき色の白い瘦形の品のよい村夫子が鞭を持つて支那服姿で教壇に立つてゐる。

壁に習字のお清書したのが掛けられてゐたり、又繪などの彩色したのが貼られてゐる。丈の低い黒塗りの古ぼけた机に頑是ない、八、九才ばかりの子供が可愛い支那服姿で讀書をしてゐるのである。

見ると論語があり、三字經があり、國語讀本がある。よく田舎に見る百姓家を教科書に使つてゐるところは見なかつた。それ／＼童女たちは體を振り／＼大きな口を開けて罪のない讀み方をしてゐる。本當に可愛く、殊に太湖訛りの節を付けてやつてゐる所は蓄音機にでも取つて置きたい位であつた。

又中には二三人手習ひをしてゐる者もあつた。人数は少ないけれども恐らく、三部教授、四部教授位をやつて居るらしく、教師の骨折もさこそと思はれた。

教壇に近付き先生に話し掛けて見ると、先生は一同に合圖して遠來の客の自分に挨拶をさせるのである。さうして暫し訓話を始めたやうであつた。自分は特にその地方の讀み方の發音に興味

を持つてゐたので、さう皆さん中止しないで更に読み續けてくださいといふことを願つた。又手習ひをしてゐる者も筆の持ち方、運筆の状態などに注意して見た。恐らく今から五百年前も千年前も同じ寺小屋の型をそのままに守つてゐるわけなのであらうと思はれたのである。

讀書が始つてから暫くして先生に生徒の月謝の事を訊いて見た、すると驚いたことに「大抵三弗くらゐは取つてゐます」と言つてゐた。人数の少ない爲めでもあらうけれど「この島の生活程度に較べて随分三弗とは月謝が高いですね」と言うたところが「高くない」と言つて居つた。「之を高いと思ふやうな家庭からは子供をよこしません」と言ふ。なるほどさう云ふものかと思つた。

農村田家漁家は迎も文字など知つてゐる手合でなく、赤ん坊が生れてもたゞ一號二號三號（阿一阿二阿三）と男女に拘らず番號を附けて置くだけのところである、併し相當な中流所以上の家では子供を學校にやる頃になると先生が正式の洒落た名前を附けて呉れる。

であるから名前の文字を見ただけで家庭の富の程度が分る。それにしても三弗平均を徴收して居るといふことはどう考へて見ても腑に落ちなかつた。しかし餘り大きな聲では言へないけれども、成る程海賊村の生活を考へて見ると、三弗が十弗であつ

ても、出せる家が随分あるのであるからといふことが胸の中で合點が行つた時には思はず自分で解釋が出来たやうな氣持がした。しかし自分はそれを口にはしなかつた。

寺小屋の正面奥の方にはくすんだ古い紅色の布が掛つてゐた。見ると下の方に祭壇のやうなもの、一端が見えてゐたり、蠟燭立ての古いのが見えたりしてゐた。

「一寸失禮します」と言つて内を排して見ると、佛像が芥にまみれたまゝ祀られてゐる。その天井に掛けられた紅い布を見ると「猛威佛」といふ字が刺繍されてゐるのである。全く寺小屋といふのは斯う云つたお寺の佛前の廣間を利用して、之に古机を並べ相當寺へ間代を拂つて斯う云つた學校を經營してゐるものであらう。

教師の手取は幾らになつてゐるか知らないけれども、片田舎の經濟としてその學童の月謝は或は償ひ得て十分のものであるかと察せられるのであつた。

十三、密偵の目光る

46 槎灣と楊灣の春色

江蘇太湖の東山で、島中風光明媚の第一勝地と云へば南岸のツウエ（槎灣）とヤンウエ（楊灣）とが數へられてゐる。

この地方の訛り言葉で「灣」の字は「ワン」と言はないで「ウエ」と言ふ。寺小屋の先生のやさしき挨拶振りに、兒童の讀書の聲を耳朶に残し、之を辭し去る。そして再び田園の間を行くと桃花流水の平和郷が続く。

路上自分は例によつて時に田夫野人を道連れにしたり、或は一人ぼつちになつたりして畔徑を辿り行くうち、時折り徑が二つに分れて、岐れ路にさしかゝる。左すべきか右すべきか分らなくなる。片田舎のことゝて道しるべなど立つてゐるわけもない。

尋ねるに家無く問ふに人も居ない。随分遠くで鋏を持ち耕してゐる農夫の處まであと戻り槎灣

の道を聞いたこともある。山路にかゝつてから右へ右へと取つて行きなさいと教へられる。爪先上りに登る。山の端は莫釐峰の裾野に當たる處である。が、こゝは竹林があり、桃林があり、道は險惡でなく、何となくなだらかな佳い眺めである。殊に峠に差しかゝると彼方太湖の湖水は一眸千里、脚下の湖濱には、綠蔭桃花相交はり、白壁の鮮かな富豪の家らしきが相當かたまり、物靜かな湖面にその反映を投じてゐる。

別段これと云ふ行人もなく、人影を認めないのであるけれども、行手の湖畔の眺めは實に風光絶佳「湖山一色」の言葉、又「湖山共仰」の言葉は斯う云つた大きな景色に取合はされた展望をさして云ふのであらう。全く適當に表現されたものだと言へる。恐らくかゝる槎灣の如きやさしみのある文雅な風致を有してゐる所には立派な畫人、詩人などが出づべき筈であると思はれたのである。

前夜はおそく斯くまで熱心に李先生が今日の行手は人氣が悪く、形勢險惡であることを知らせて呉れたのである。ところが斯うして自分で親しく桃花流水の絶景に接して見とれてゐるとどうして斯ういふ處に海賊が榮えるに至つたかゞ分らなくなる。

併し槎灣のあの富裕らしく見える村も或は近付いて見れば案外な處かも知れない。たゞこゝか

ら峠の上で斯うして見渡してゐる春色は霞棚引く太湖の鏡面と右手のこの湖畔の風致とが何よりも好印象を與へ、疲れた孤客の目を慰めて呉れてゐるのである。恐らく上海邊りのビジネス方面で頭を痛めてゐる者はあの西湖の湖畔に風月を楽しむ代りに、一度は是非太湖までやつて來てこの邊りの春風駘蕩の情趣を味つたら宜からうと特に宣傳したい氣持さへ胸に迫るものがあるのである。

47. 渡津の道連れ

海賊村の東山島上は、この槎灣の峠の上くらゐ春色を觀賞するに佳い場所はない。景色の大きいことに於ては雨花臺の禪寺よりもよかつた。けれども湖水の全貌と更に部分的の藝術的な麗しい春光を打眺むるにはこの邊りが最も風景美に富んだ處だと言へる。

初め寺小屋を發つて山路にさしかゝつた時には楊灣の事のみを聞いてゐた。このあたりの地理に詳しくない自分にとつては之を槎灣の街かと早合點してゐた。けれども其處には何等船着場の碼頭を見ず、船の碇泊せる氣配もない。まことに君子の居宅と云つたやうな家のみが見えてゐるので少々變だと思はれた。たゞ品の好い、併し如何にも歴史的の風韻のある處であるといふ印象

を得てゐたのである。

通りかゝつた百姓に訊いて見ると、あの村は槎灣であると言ふ。併しその「ツウ」と云へる發音が如何なる文字に當るかは山中之を知るによしなしであつた。

湖濱の路にだんくゝ辿りついてその村に差かゝる。するとその門札にある文字を見て成る程ツウ(槎)は槎の音であることが解つた。

昔牽牛織女が年に一度會ふ爲めに天の川を渡る時の船はこの槎である。これは支那の古傳説の上に又お伽噺の上に誰れしも知つてゐる字である。けれども、日本では餘り用ひられてゐない。この槎灣の文字を見るだけで天のかけ橋に渡り得る船の出る所の感じもする。そしてその風光の絶佳なると地名の文字の麗はしいので自分にはこゝは言ひ知れぬ傳説的な古典趣味を思はず湧き起させたのであつた。

槎灣の水郷は、一筋街で形造られてゐるところであるが、何れも堂々たる家ばかりである。併ししたいして商家であるわけではなく、何れも別荘地の如き處であつて、日本にはちよつと斯う云つた處は見ない。寧ろ杭州西湖の孤山を見る如き處であるが、それよりもモット清香な氣分が湛へられ、俗臭粉々と云つた所は少しもない。

第一、人の來往が薩張り無い處であつて、如何にも隠君子の水宅とでも言ひたいやうな別天地をなしてゐる。

自分は武陵桃源を歩む夢心地で之を通り過ぎ、路々尋ねくして山又山の湖濱を行く。すると愈々楊灣の船着に來る。名前の物語る如くまことに楊柳の蔭、濃厚なる湖灣、山腹の墓陵、土饅頭の打續く眺めの佳い處に登り、樹下に暫し憩ふ。

見渡す限りの湖面は靄々たる春霞に蔽はれて眞綿をおつかふせたやうな眺めである。岸に近き水中には幾哩となく老楊大楊の並木が打續き、行手の外れの方は殆んど見えなくらゐである。その眼界の達する限り水中に立並ぶ楊の趣は、支那の何れの水郷にも見出すことが出來ない眺めである。

水中の楊としては根が腐つてしまふ筈であるに拘らず、何れも二抱三抱、或はモツとそれ以上大きな老楊があり、幹は半ば引切られてゐて、下から若き枝の相當に高く伸びてゐるのが數多く見えてゐる。

春未だ淺く、楊は新芽を出したばかりでまだ綠色が細やかといふ程ではないが、その新緑の色が山下湖濱に打續く桃花の林と相映じ、その間に運河の如く、水の帯の長く續いてゐる處、又楊

柳の並木の向ふに、白帆の船が眠るが如く去來してゐるその姿、その色の配合といふものは何となく和らか味の中に朗かさを見せてゐる。太湖春色の妙は此處に盡きてゐると言つても宜い。眞にこゝは春風駘蕩の山水美が發揮されてゐて何とも言へぬ佳い眺めである。

暫し中腹で之を打眺め恍惚としてその春光にみとれてゐたのであつた。近所の子供は近くに寄つて赤の萬年筆で日記を認めてゐる自分の側に來たり何事か物語り、不思議な見たことのない金の筆を見て打はしやいでゐるのである。消息を傳へるべく學士會の仲間に見たまゝの感じを通信すべく葉書を書いたのであつた。けれども何處で出してよいやら、郵便局もポストも在る場所は判らないのである。

やがて楊灣の碼頭に着いた。町家續きの又となき繁華な街である。今迄に無い恐らく東山第一の殷盛を極めた船着である。しかし折角耳にしてゐる碼頭を尋ねくして行つて見るが一向に船着らしい處は見えない。古老の人に尋ねて見ても、以前は西山に渡る船も出てゐたけれどもこの頃は船は出ないと言ふ。内心甚だ以てこは妙である變であると思つた。けれども致方がない。

自分にとりては、誰れ人も皆こゝにはこの碼頭があるとして、渡し船のあることを力強く話して呉れたところである。併し今はないと喧嘩にもならぬ。それでは宿屋があるだらうかと訊いて

見たが、どこにも宿などは無いと言ふ。一軒もないと云ふ。自分は向ふの島に渡りたいのであるがと言つたら、それでは更に數里この山下に沿うてさきの方に行かれると其處に船着場がある。其處はロハオ（六巷）と云ふ處である。其處まで行かなければ仕様がなないのでと言つて呉れる。朝七時に宿を出てから時間を考へて見ると最早や午後の二時を回つてゐる。併し渡し場に行くまでには、更に一時間を要することである。此の島は音に聞く海賊村と聞いてゐるのにこの邊りは別段さう云つた氣配の見えないのは何よりのことである。色々思ひ慰め、さうして島の反對の側なる街外れ桃花咲き亂れてゐる小路を辿りたどつて行く。村人に訊きつゝ六巷の方へと急いだのであつた。

山下に禪寺がある。ピストルを持つた手が十數名かたまつて居る。これは變な處へ出つくはしたものだと思つた。けれども、他に之を避ける路が無い、引返して見たところで宿は無し船は出ず、どうしてもその門前を突破しなければならぬ。

ピストル連は服装を見ると昨晚出會はした手合と同じことである。どうも仕方がない。問題を起しては物が面倒になるばかりだと思つて暫し考へた。けれども方法が付かない。それで成るべく土民氣取りで門前を突破しようとした。路連れでもあれば共に語りつゝその保護色に依つて通

り過ぎることも出来たのである。けれども折悪しく路上に人影を見ないのである。

己むなく自分は桃花を打眺めつゝ、無心の氣持でそこを通つた。誰何せられるかと思つたら、遂に難なく無難に通ることが出来た。道はそこから幾らか下り道になつた。折りしも峰の樹林は風の音凄まじく、午後になつて俄かにひどい風が出た。湖面を吹き渡る風は道に砂煙を捲起してゐるのである。次第に山下の道を進むにつれて漁村らしき村が見えて来る。運よくもやがて路上の行人に出くはした。そこでその村の名を訊くと案の上六巷であるといふ言葉を聞いた。そのときの嬉しさはなかつた。行違つた百姓達には時折り挨拶をしながら路を辿り進むうちに其の村外れにさしかゝつてから一人の色の黒い年の程三十四五と思はるゝ着流しの一人に出つくはした。

自分は言つた「私は今日この六巷の渡し場から船で向ふの西山に渡らうと思つてゐるのだが、渡し場の方へ行く路はこちらであらうか、どちらを行つたら宜いでせうか」と尋ねた。すると靜かに答へて呉れる。その行人はその村でも珍らしい色の黒い人で、宛ら賣れ残りの金佛さんのやうな恰好に見えた人であつた。その聲も錆びてゐて銅色が聯想されるのであつた。見たところスラツとした姿で唇には少し風の強かつたせいだか割れがしてゐたのであつた。自分の顔をジツと

見て言ふには「御承知のやうに今日は風が強くなつた。何時もなら船が出るのだけれども今日は逆も出ないでせう」、「宿はあるでせうか」と訊くと、「御覽の通りの漁村で宿などこゝにはありませんよ」といふ。この言葉を聞いて、自分はこれは困つたことだが何とかなるだらうと思つて歩を尙ほ進めて見ようと思つた。けれども、暫しそこに佇んで考へ込んで居つた。その行人は自分に「先生はどちらからいらしたか」と言ふ。

自分は詳しく話した。すると「この湖水の風は連日吹き続くことはない。明日は多分穏かになるでせう、以前は此處に發動機船があつたけれども、それは機械が壊れてしまつて昨今出せなくなつた。假令あつてもこれだけ風が吹けば今日は出帆が出来ませぬ、明日は手で漕ぐ民船ならばお天氣の都合で出るでせう」と云つてくれたのである。

「何處へか漁師村へ談判すれば泊めて貰はれるでせうかと思ふがお心當りはないでせうか」と云つてみた。

「私は此處には用があつて使ひに來たので何も知らないが、恐らくお泊めするやうな家はありません」と言ふ。その人は自分のそのときの言葉に如何にも同情してくれたらしかつた。そこに心の中を察して呉れてゐる氣持がどこなく窺はれた。

すると、間もなく「では御苦勞だが一緒に私と歩きませう」と言つて呉れる。そしてこの例の寺の門前を行つて楊灣の碼頭まであとがへつて参りませう。さうして彼處まで行けば何處か心當りへ話を掛けて見てあげませう、出来なければ出来る所まで一つやつて見ませうよ、昨晚のお泊りになつた殿前まで歸られるのでは山越をしなければならず引返されるとすると今晚十一時位になるでせう」と真心を籠めて云つてくれるのである。

溺れる者は藁にも掴まるといふ言葉のあるが如く、知らぬ山路に斯うした行人の情けに自分は何とか継らなければならぬ身となつた。平素ならば禪寺を求め之に行きなり行つて見るのであるけれども、ピストル持つてゐる手が門にあはしてたくさん居るのでは又後が面倒になるといふ氣がした。そこで一にも二にもこの色の黒い行人の先生に自分の體を打委かしたのであつた。若し此の海賊村にして斯ういふ路上の行人にぶつかることが出来たのは幸福であるか不幸であるかの分れ道になることは想像するに難くない。

若しこれが眞に雲助の如き心を持つてゐる悪人であつたならば、自分の體は運命としてもはや諦めなければならぬ。

ところが神の助けと云ふものであるか、楊灣の街に來ると云ふと或る茶館に着いて、その樓上

でこの人と共に熱茶を啜つた。するとその人は云ふ「此處でしばし待つてゐてください。自分は用達しをして来る、そうして何處か宿をたのんで決めて来る」といふ話であつた。その茶館の主人はその人と親しい間柄であつたらしく、自分に當人の人となりをよく説明して呉れた。若しその人が悪人であつたとすれば、知らない茶館の二階へ自分を置いてけぼりにして、そのまゝ行つてしまつても仕方ない。

茶館の主人が自分を泊めて呉れよし、さもなければ自分は出て行かなければならぬのである。しかし自分はその時間を利用してゆつくり葉書を書いたり日記を調べたり、又、四方山話をして見たりなどしてゐた。

物の一時間あまりも待つてゐると、やつと先生が歸つて來た。「大體話が付きましたよ」といふ吉報を齎して呉れたのである。その時の一言は未だに忘れることが出来ぬ。その色の黒い先生の錆のある言葉つきは調子は低くはあるけれども力強い純朴な氣分に充ち満ちてゐた。それが今だによく耳に残つてゐる。

斯う云つた六巻の路連れの助け船は此の海賊村の旅行に於て前晩のピストル再來の幕と同じ位な重要性を持つてゐたのである。この事に就ての話は更に段落を變へて述べることにするがこの

親切な行人の腹の底は既に讀めた。

もはや之に疑を挟んだりなどすべきではない。この人と時折り文學や書道、文學の話などを出して見ても能く理解のある好人物である事が言言句句の間に讀めた。そこで遅まきながら名刺の交換を申出た。ところが、名刺は持合せてゐないと言つて樓上の紙片に筆蹟も麗はしく自分に次のやうに書いてくれた。

江蘇省太湖洞庭東山様橋村

霽吉堂 邵 念 祖

それからして名前が判つたので何時も「邵先生」と呼ぶことにしてゐる。先方では自分のことを「石農先生」と呼んでくれてゐた。卓上の筆硯に依り文畫の話などを交換するに次第にその人となり味ひのある床しき好人物であることが理解されて來た。熱茶を取つて啜つてゐるうちに「先生まだ晝飯もやらないので空腹でせう」と言ふ。「筋向ひの酒樓へ参りませう」と、求めらるゝがまゝに出掛けて行つたのであつた。

48 酒樓に密偵の目光る

楊灣は碼頭の水邊に近きところ左手に茶館酒樓が二三軒のきを並べてゐる。楊灣の街では此の邊りが目抜き處と見える。人の往來は繁々しい。集れる人々は何れも古風な仕立の支那服で、その言葉つきも、他の地方に見ない訛りを帯び、町家の建築も何となく雅かな曲線を持つてゐるものが多い。

こゝには相當立派な庭を持つてゐる處があると聞いてゐたが、まことにさうであらう。日本で言へば奈良か京都のやうな感じを興へてゐる處だ、片田舎の湖畔とは云へ、自分は風物建築などの研究に來たのであれば定めし趣味の多い發見が幾つか見出されることであらうと思はれた。

何は兎もあれ自分ども空腹であるので、話のあるがまゝに酒樓に入り窓に近き一卓に二人で席を占めた。「先生は何を召上ります？」と話があつたけれども「この土地で有り合せの者で直ぐ出来るものなら、何でも作つて貰ひませう」「酒は？」といふことであつたから「少しは行けませう」と言つた。

隣席には十ばかりの同じ古ぼけた八仙卓が並んでゐる。時刻外れの時であつたけれども、何れ

の卓にも客が着き、満員のやうであつた。酒酣なるもあり、一人ぼつねんと盃を傾けてゐるもあり、歡聲頻りに上つて尻上りの言葉で場所柄に似合はない大きな聲をして笑つてゐる者もある。忙がし氣に番頭内儀さん達は料理を運んでゐる。

やがて自分の卓上にも熱くない燗が出来て濁醪の地酒が持ちはこぼれた。酒盃は煎茶の時に用ゆる茶碗よりも尙ほ大きく、之になみ／＼と注がせられたのであつた。

邵先生は楊灣の街に多少の知人があつたらしい。けれどもかうした酒樓に這入つて見ると一々さう知り合ばかりが來てゐるわけでもないらしかつた。又番頭達も別に懇意な間柄ではなかつたらしい。

自分は別段借りて來た猫のやうにしてゐるわけではなかつたけれども、見ず知らずの人の中であつたから、普通の田舎の飯屋に這入つたと同じ氣分で盃を傾け共に料理を突つてゐたのであつた。一杯又一杯と互に獻酒をしてゐるうち可なり空腹だつたので酔が廻つた。その時、時折り先生の眼が自分の方に向いてゐるに拘らず左の隅の方の人に對して意味あり氣に視線を送つてゐるのである。

するとやがて側の方にその人が近づいてやつて來て何か一言二言云つて行つた。自分はその間

の話の内容はよく解らなかつた。すると酒樓の番頭と又その人がひそく話をしてゐるらしい。こちらは大きくも腹拵へをするべく箸を取つてゐたのであつた。

ところが、邵先生の言ふには「この食事が済んだら直ぐ立ちませう」と、えらい忙しさを口吻を漏し始めた。自分は變だと思つた。それで飯もそこ／＼に済ませ、勘定を訊いて見ると、田舎の割りには高く、慥か二人で五弗ばかりとられた。一弗の酒手を置いて立たうとした際、自分は「何か事があつたんですか」と邵先生に訊いた。

すると「詳しい事は外へ出て申上げませう」と言ふ。外へ出かゝると部屋の一隅にゐた人がヒソヒソ話をしてゐる。これはつまり日本で言ふと角袖に當るものであつて、一種の密偵である。戸外に出て邵先生は云ふ「このあたりは御承知のやうな處であるので時折りかうした茶館酒樓に密偵が來てゐるのです。密偵の眼にはこの近所界隈の人の顔振れ、又集つて來る客の素情は皆能く判つてゐる、ところが此のテーブルのみは見知らぬ者で、殊に言葉の點からあなたに特別の目が光つてゐたのですよ。長く居てはきつと問題を起すであらうと思つて失禮乍ら早目に切上げることにしたのです」と言ふ。

酒樓で幾ら角袖の目が光つてもこちらは別に頓着することもないとは思つたけれども、邵先生

自身も土地の人ではなく、氣苦勞をさせては濟まないと思ひ言はるゝがまゝに立去たのである。ところが朝から三四時頃まで食はず飲まずであつた爲めに可なり酔が廻り、恐らく自分の顔は鮪の刺身の如く赤黒くなつてゐたことであらうと思はれた。けれども足は別に千鳥足といふわけでもなかつた。酔の甚だしく廻つて居つたことに自分は氣が付いてゐたが可なり動悸も高く打つてゐたやうであつた。

樓を立つて路上を行き、和かい風に吹かれてゐると、好い氣持である。別段件の角袖が後を付けるでもなく、又番頭が門まで見送るでもなく、何も事は無くて済んだ。邵先生は今から此の通りを行き真直ぐ進んで参りませうと導かるゝがまゝに行く。だら／＼坂を幾らか登つて山麓に沿うて行くと先刻六巷の往復に通つた見覚えのある街にさしかゝつたのである。

49 楊灣仁齊堂の旅枕

街に面して右側の軒に大きく仁濟堂の看板の掛かつてゐる藥房がある。その藥房の前に來ると邵先生は「此處です」と云ふ。案内せらるゝがまゝに先づ之に這入つた。

その店構へは堂々としてゐる。壁は厚く藥味箆筒は正面から横の方にかけて、數多算へられる

帳場の先には七十餘りの長髯の老人が鼈甲の眼鏡を掛けて藥劑を選り分けてゐる。若い店の者は出て来て「サアどうぞ」と言つて店頭飾られてゐる大の圓卓に請する。お茶を運んで呉れる。舊式な古色たつぷりの老舗で如何にも落付いた気分が見えてゐる。奥から二十餘りの若き息子らしいのが二三人出て来る。そして上海の言葉で自分に話し掛ける。邵先生は先づ主人に自分を日本人として紹介する。一とわたりお茶が出ると青年は行きなり政治問題を持出すのである。日本は兎角、支那に向つて挑戰的態度を執つてゐるやうであるがこは頗る遺憾に思はれる。さういふ點について貴説は如何といふやうな問題を自分に持ちかけて来る。自分は云つた。それは一部の者の考で、一般國民はさういふ、武力第一主義の意思は毛頭持つてゐないといふ事を語つた。すると満足さうな顔を見せるのである。

それからあなたは支那はどの邊を何時も游歴されるかなど地理的話も出た。

やがてするうちに年の程、六十餘りのこれも鼈甲縁の大眼鏡を掛けた老人がそばに来て席を占めた。店の人たちは特別の懇意の間柄にあるものと見えて、家の者同様な態度でゐて、そして色々取持つて呉れた。時々その老人の話の中に珍らしくも英語がまじつて出て来るのである。「アンダースタンド」と云ふところを「オンドルスタンディング」といふやうな發音をすること

があるので、日本で明治初年の老人が言ふやうな發音振りであると思はれた。けれども土地の訛言葉よりもどうやら意味が取れるので主としてその老人と片ことまじりで話を交したのであつた。やがて店の主人は「邵先生から貴下のお宿の話があつたので、委細承知して居りますがお部屋は近所の別の處にお取りしてあります。御都合で取敢ず其處へ御案内させますからいつでも」云つてボーイに命ずるのである。その宿は道を隔て、筋向ひにある鍛冶屋のうちであつた。

そして邵先生始め三人で其の定め奥の部屋に入つた。そしてその部屋の寢臺を指し、これへいつでもお休になるやうにとのことであつた。その時はまだ六時廻つたばかりの時刻であつた。思ふに邵先生は知らぬ片田舎で出つくわせた行路の人である。自分は道路の人間である。それによくもこれだけの心からの同情と、その世話をして呉れるものであるかな。邵先生の氣持も有難いこと云ふまでもないが、又その人の紹介に依り、何處の人間とも判らない素情の確められてゐない自分の如き者をとめて斯うして部屋まで提供し取持つてくれるといふその氣持は今時珍らしい美談と考へられる。

殊にこの場所柄は有名な海賊村である。相當人間の腹の中や、懐ろの中を洞察せんとする習慣になつてゐる處である。然るに行きなり斯う云つた厄介を持掛けられてもその話をそのまゝ聞いて

て呉れるといふ楊灣の人情美にはこれ亦印象深く肝銘せらるゝわけである。
幾度か自分は南支、田舎の旅に行き暮れ、また深山の奥で夜半暗ら闇に舟を雇はんとして船頭
を楫の杖の水上に目覚ませたこともある。

さう云ふとき幾ら手を變へ、品を變へて頼んで見ても、あなた達は暗夜のこととて聲ばかり聞
えても姿が見えない。兵隊なんかではないか、兵隊は眞平御免だ、口でうまい事を言つても、信
用がならぬ、など云つて劍もほろゝの返答をされたことがある。

それでは燐寸を點けて見せる。これこの通り兵隊でないことはたしかぢやないか、といふこと
で安心させてどうにか船上の人となり溪流を下つたことなんかもある。夜に、晝にと、知らぬ片
田舎に行當りばつたりの旅枕に慣れてゐる。否むしろさうした遊瀝に趣味を満喫してゐる自分は
太湖楊灣の此の一夜は最も感傷的な又肝銘の深い體驗であつたのである。

邵先生は云ふ「此處はやかましいかも知れぬが安心の出来る所です。朝が早いから今から
お休みあれ、明朝は六時に私は来て戸を叩いて起してあげる。それまで十分睡眠をお取なさい」
云々。さうして「この寢室には今一人休む藥房の店につとめてゐる者が参ります。一緒に御休み
ください」と言つてゐるうちに其の人も來合せた。そこで邵先生は辭し去る。自分どもは寢物語

りに耽りつゝそこで一夜をかりたのであつた。

50 念祖先生の孤影碼頭に幽かなり

旅枕の寢室はどんな設備になつてゐるか。燭を掲げてこは一瞥したのみである。カンテラ一つ
あるわけではなく、又點燈があつても、多く此の地方はスタンダード石油の悪いのが使はれてゐ
るので油煙が甚だしい。鼻の孔はすぐ眞黒になる。餘り好ましくないものであるが贅澤など云つて
ゐられた段でない。話をするだけは暗くて少しも差支ない。手紙一つ書くわけでもない。暗黒の
部屋にゆつくりと睡眠を取ることを第一としたのであつた。

ところがこのうちが鍛冶屋だもんだから工場でトチンカチンと叩く音が壁を隔てゝ向ふに絶え
ず聞えてゐる。如何にも能く熱心に夜なべをする家であるワイと感心させられた。

彼れ是れ十一時頃までも稼いでゐたらしい。やつと鐵槌の音が止む頃になると、今度は犬の聲
が直ぐ門前でしきりと聞える。見慣れぬ人の姿でも門前にあつたのか。こんどはその犬の聲が又
耳について眠られない。その犬の姿は見えないがこの島の犬は黒毛で耳が三角に立つてゐる。そし
て恰好は丸で狸によく似てゐる。その恰好の分つてゐるだけに寝てゐてもその様子がハツきり目

に映るのである。

自分と共に旅枕を同じうした若い人と云ふは最近細君を失つて鰥になつてゐる、三十二歳の青年であつた。同じ寢臺で村の海賊の話だの、草根木皮の話だの色々話して呉れたのは旅枕を記念する暗夜の體驗としてこれ亦云ひ知れぬ味ひのある話であつた。

戸外の犬の聲は鎮まつたのではなかつた。けれども自分どもは何時しか夢を結んだ。さうしてちよつと一と眠りしたと思ふ頃、門を叩く者がある。トントン音がする。邵先生であるか頻りと「石農先生」と連呼するのである。

まことに時間正しく時を見れば正六時である。戸のそこから云ふ「今朝は風は凩だし、民船は出るでせう、今から急いで六巷へ参りませう、顔は六巷に行つて洗つた方が宜い」と言つてくれる。共にごろねした相手の若い人はまだ寝てゐたが寢床の中でそこそこに挨拶をして發つた。世話になつた仁濟堂へ別れを告げに行つたのであるがまだ門が開かない。

邵先生は云ふ。挨拶は自分がお傳へしてあげるからともかく早く急ぎませうといふのである。自分は物もとりのあへず支那服の紐釦も歩きながら嵌めると云つた急ぎ方である。

そして昨日通りかゝつた山下、禪寺の門前に差かゝるとピストルを持つた手合がけさも尙五六

人見張つてゐるのであつた。時刻も意外に早いので若し、こちらを怪しんで誰何することでもなければよいがと多少氣にしてもゐたが、何事も無くすんだ。

下手に引つかゝるとその爲めに時間を取られるので無事に通り過ぎることの出来ることを祈つてゐたら洵に都合よく行つた。やがて朝路をいそぎ行くうちに愈々船着場に行つた。見ると、これは驚いたことに、もはや客が十人も二十人も此處に話掛けてゐる。船は間もなく出るといふので活潑な氣分が動いてゐる。村は總體に船頭たちの多い處である爲めか、聲は皆高い。客待ちをしてゐる仲間の間に炒餅、點心類を並べて賣つてゐる婆やがある。此處で開水(熱湯のこと)を銅錢二枚で買求め、洗面器を借りて顔を洗ふ。

洗つてゐる中に邵先生炒餅など買求め船の出るまで、少しでも腹拵へをしなさいと云つて共に之を頼張るのである。それから、西山に行つたら徐先生と云ふを尋ねられたらよいと教へてくれる。船頭村ではあるし、そわそわしてゐる六巷の碼頭であつたが色々話をすることが出来た。揚の下に出て朝飯代りの腹拵らへをしてゐた時の氣持、湖畔の小景は繪になつたであらうと思ふ。やがて西山行の民船が船出すると云ふので船頭が大きな聲で客を呼んでゐる。見れば六點鐘である。他の片田舎の水郷では、よくかうした船出のときは船會社の若い衆が銅鑼を叩いて船出を

村中知らせて歩く風流味があるが、此處は小さい碼頭のこととして、さう云つたこともなく、たゞ
黄い聲で呼び廻るのみである、そして船は動き始めた。

邵先生は自分に云ふ「あわてることはないから緩つくり参りませう」と。碼頭の背景をなす楊の
並木は蔭も淺緑に、石垣は二三丁も突出てゐる。ふたりは湖畔の入江に足もとを氣を付けたが
辿り行くのである。敷石の角を足場にやつと拾ひ歩きながら船端に取付き渡しの民船に乗るこ
とが出来た。船内は十人餘りの乗合客が居て、自分が最後に乗込んだのであつた。船は櫓の音靜
かに碼頭を離れる。自分は船端に一人立ち、見送つてくれてゐる邵先生は一番外れの石の上に飄
然立つてゐる。その孤影が楊下に見えてゐるのは詩のやうである。唐の詩人の七絶に「寒雨江に
連つて夜、吳に入る、平明客を送つて楚山孤なり、洛陽の親友もし相問へば、一片の氷心玉壺に
在り」

芙蓉樓送辛漸

王昌齡

寒雨連江夜入吳 平明送客楚山孤

洛陽親友如相問 一片氷心在玉壺

と謂はれてゐるが、全くその日の朝は雨こそ降つてゐなかつたが、林煙横る六卷の碼頭楊下に見
る邵先生の孤影は次第に遠ざかり、舷頭に立つ自分の姿も次第に遠くなり、互に手を拱き首をう
なだれて盡きぬ名残を惜しんだのである。先生の孤影は碼頭に幽かになり、最後に遂に見えなく
なるまでその姿を互に認めることが出来たのであつた。この詩景の一幕は宛ら六卷碼頭のフキ
ルムにでも取つておいたならば宜かつたと思はれた位の劇的シーンであつた。

十一、武装兵と同船

51 あばたの武装兵

船は湖上のもやを破つて出て行く。太湖西山の島は次第に近づく。邵先生の孤影は今や煙雨模糊の中に消えて、東山の莫釐峰の輪廓は淡緑にぼやけ、その倒影を湖面に投げてゐる。さしにも心配を掛けた邵先生の姿は今も眼底に髣髴として残つてゐる。殊に楊灣茶館の樓上で自分の行手を案じて書き残して呉れた紙片の中に次のやうな心をこめたものがあつた。

「西山に船が着くと、それから程遠からぬ所にトンザホ（東宅河）と云へる村里がある。徐裕庭先生といふ友人が居るから其處を尋ねて行かれると主人は好人物であり、親切にお取持をして呉れるであらう」。

との話であつた。かうした宛てのあるやうで無い西山の遊歴、殊に海賊村をあるくこの旅は此の一言に依つて何よりも明るい見當を付けることが出来た。それを思ひ東山の島影を彼方に仰ぎ

つゝ自分は他の乗合客の間にまじつてゐた。そして手を拱きながら徐ろに吳越同舟の間に語り草など能く解らないながらも耳を翫て聞いてゐた。船頭の櫓を漕ぐ音はいと靜かにキイ／＼と響き春霞に掩はれた湖面はいとなまめかしく、西山の綠峰は次第に近付いて来る。

その船の乗合客の中に、あばた（麻子と云ふ）の武装兵で北京語の至つて鮮かなのがゐた。自分には特に目立つて見えるのである。相手の語がとぎれたところで自分はこの兵隊に言葉を掛けて見ようと考へた。

その人は銃剣を帯びてはゐるがやさし氣な人相で、何等海賊村の兵隊とも思はれない様子であつた。わけても北京語の卷舌音の朗かなこと、その抑揚頓挫の品の好い趣は江蘇浙江のコチ／＼した田舎辯に比べて自分の耳には著しく懐かしさを感じたのであつた。

かうして知らぬ旅先で親しみの多き言葉に接するくらゐ嬉しいことはない。切めても自分はこの武装兵の近くにと席を移したのであつた。やがて他の手合は話をやめる。自分は片言交りに兵隊に話を掛けて見る。道理でこの人はたしかに北方の生れ、その肩に掛けてゐるピストルは最新式のモーゼルであり、艶のよい革袋に收められてゐる。又それに飾られてゐる紅の房も絹糸の染色が洵に鮮かに見える。

この兵隊が如何なる使命を帯びて湖水渡りをしてゐるのかは判らぬ。又餘りきはい質問はど
うかと思ひ、自分は殊更それを避けた。けれどもその話して居る様子を見ると、近來相變すこの
邊は海賊の出沒する者が多いといふことであつた。自分は年來江南をあるきその兵隊の携帶する
ピストルは立派であるが、餘り操縦を心得てゐるものが少ないので云つて見た「それは新式のや
うに見えるがどんな風に出來てゐるんです？」と冗談半分に突込んで見る。すると案外にも先生
「こんな風です」と首からわざ／＼それを取り外して見せる。

さうして取出し一々螺旋を外してまで解剖して見せるのである。如何にもわけなく内部の部分
々々を、一々説明して呉れる。これは又實に驚いた話であつた。何かさう云つた特殊の技能を有
してゐた兵隊らしく、これがこの海賊村の湖水を彼方に此方にと渡つて技術上の相談相手をして
ゐるものか、それともその方に重きをなしてゐる有力な兵隊でもあつたか。例によつて胸の處に
はその所屬の隊班の部署を示した縫ひ文字が這入つてゐた。

若しや湖上に今うさんな民船でも現れたとなつたら、その時こそはこの兵隊が役目を果たすの
であらうと思はれないでもなかつた。けれどもこの春霞棚引く平和な太湖洞庭にさうした珍事が
勃發しようなどいふ氣持は少しも起らなかつたのである。

52 太湖西山を指して

吳越同舟の渡船にはピストルを持つた北京の人がゐたけれども、乗合客は何れも之と親しみの
氣持で接してゐるし、自分にもピストルの解剖までして見せて呉れるので懐かしみを覚えてゐた
のであつた。恐らくあばたの兵隊その人も自分は自分、ピストルはピストルと別にして考へてゐ
るのであらう。假りに海賊が此處にひよつこり出て見たところで、又海賊は海賊としてるところ
を稼ぐであらうし、兵隊は兵隊で無關心な態度を執るに至るかも知れない。そこは判らぬ。それ
が總べて足並みを揃へ、統制のある組織に行くならば何も今ごろ風光明媚の太湖に海賊の出沒し
たりするわけではない。支那が國家として一滴の水をも漏らさないだけの統制が取れてゐる筈であ
る。一事が萬事で、總べてそこには酒樽の籜が弛んだやうな氣持がしてゐて、その爲めに太湖の
水が又一段とのびやかに眺めらるゝ所以でもあると思はれた。

春の湖水を渡ると云ふにつまらない事を氣に病んで見たところで始まらない。色の黒い百姓も
袴を着けた船頭も、ピストルを帯びた兵隊も、日本から行つた自分も、今は皆これ一蓮托生の乗
合客である。水は卵色に淡く濁つてゐるが、深さは餘り深くないらしい。

楊花三月 太湖を渡る春色の氣持は今何等海賊等の頭など働かせてゐないのである。孤帆遠影は碧空に盡きて、何處までも湖水の彼方は天際まで擴つてゐるのみである。この大きな水郷こそは、海賊の私すべきものでない。さらばと云つて又土地の洞庭の良民が私すべきものでもない。斯ういふ天下の水景は宜しく風景を楽しまんとする者の共同の水の公園として置いて宜いのである。

西湖に遊び、洞庭に遊んだ體驗を持つ自分としては湖水といふ湖水に一種の親しみの情が湧き起る。長江の流れは滾々として盡きず、あの一滴の水の中にも、西藏の奥、ヒマラヤの雪を物語るものが含まれてゐる。江蘇のこの沼澤地は曾つて幾萬年間の間、長江の氾濫してこの邊りに溜つたものなのである。

その水溜りがそのまゝ此處に太湖の形をとつたものに過ぎないと見られる。點々として指さされる湖上青螺の島々はこの水を湛へるまでは平野に散らかつてゐた丘陵であつたのである。山若し言葉を持つならば、さう云つて古い歴史傳説を物語つてもくれるであらう。銀盤に輝く青螺の島々はまことに詩人の心を樂しましめてゐるものである。

先に碼頭で別れた邵先生の話は今こゝに思出して見ると如何にも詩的情緒の胸に迫るものがあ

る。その楊灣の茶館樓上で四方山話をしてゐた時、先生は次のやうな話をしてくれたのである。「明朝船出が出来れば宜しい。若し雨でも降つて仕方がなくば東山で一夕篆書を語り、翰墨の味を互に味つても見たい。若し船が出て西山に渡られるとならば島内見るべき處は數々ある。先づ船はチンシャア（鎮夏）の港に着く。そこから龍洞山に到ることが出来る。龍洞山から東宅河にはあまり遠くない。東宅河の徐裕庭先生を尋ねられ、さうしてその名勝にファホワアス（法華寺）サコンセ（石公山）パオシヤンス（寶山寺）など云ふところが幾つもある。景色は東山よりも更に明媚で、定めし貴下の文人趣味を満足させることが出来るであらう」と語つてゐた。かう云つた長閑な話を今以て自分は思出すのである。若し又邵先生にして暇さへ十分あれば共に道連れとなつて游瀝をして貰ふことが出来たならば定めし面白いことも多かつたであらうにも思はれた。

53 西山鎮夏碼頭の警備突破

海賊村の湖上を何等不安なく、長閑な超脱氣分で以つて、ゆつくり渡り、今は正に船着場の碼頭チンシャア（鎮夏）に着かうとするのである。その時乗合せた一人の客が云ふに「貴下はこの

邊りを遊歴せらるゝに護照を御持ちになつてゐますか。それがなければひよつとすると面倒が起るかも知れませぬ」と親切に言つて呉れたのであつた。

その一言が今は多少氣になつて来た。一昨晚の夜半に武装して宿に来て呉れた李先生がやはりその事を言つてゐたのを思出した。又それでは西山に上陸の間際、同じやうなどさくさ珍事を捲起しはしないかといふことが氣になつて来た。

けれども例の持前の香氣な氣持からマア何とかなるだらう。護照は携帯してゐない以上、今更何とも仕様がな。だからと云つて西山は更に人氣の悪い處だとも思はれない。

春色濃やかにして桃花咲き亂れてゐる淡桃色の畑が右に左にと指さされる。水邊の柳色は茶種の畑と相映じ如何にも繪のやうにやさしく美しい。六巻の船着場に来るまでも同じやうな桃畑が打續いたのであつたが、此處は又その延長であるかと思はれるくらゐであつた。

船は碼頭に横着けされる。客は碼頭からそれ／＼右に上つて姿を消して行く者もあり、左に道を取つて行く者もあつた。自分は邵先生の言葉に従つて、碼頭を上陸するや否や、龍洞山に道を取る豫定にして居つた。

けれどもいざ上陸しようといふ刹那に、一體その山が右にあるのか左にあるのか判らなかつた

のである。がしかし右手の方に翠峰の孤立してゐるのが仰ぎ見られたので、多分その山だらうと見當を付け道を右に取つた。そして上陸した仲間の中に自分の姿を交へ、保護色を利用し歩を運んだのである。路傍の要所を扼して、碼頭の警備に當つてゐる武装兵は七八人もかたまつてゐたのである。そこでまた面倒な處に差かゝつたといふ氣持がした。

鎮夏の碼頭は西山の船着であり、どちらに行くにも咽喉を扼してゐる處である。もはやこゝに上陸した以上は、この關門を突破せざるならぬ。だからと云つて船からあがつた連中は皆乗合客であつたし、自分が日本から來てゐるものであることはよく知つてゐる。護照は持合はさず、すべて無雜作にしてゐる。若し取調べでもあるとなると、問題を醸す虞が十分にある。

併し自分の手に持つ手提げは、浙江の田舎出來のもので「壽」の字の圖案が編み出され、模様は支那式に出來てゐる。内容としては大した物も這入つてゐない。

たゞ支那服、支那帽に之を提げて連中の間に交つてゐれば、どうといふこともあるまい。わざ／＼自ら名乗るの必要もないだらうし、又連中に自分の事を言はないやうにして呉れといふ事をわざ／＼頼んで廻るの必要もないのだ。すべてかうなつたら自然の成行に委かすの外ないと肚をきめた。

さういふ氣持でづか／＼とそのままその警備の前を通り過ぎたのである。案ずるよりも生むは易く、別段警備の面々は我れに視線を注ぐでもなし、又よもや外國人がその乗合船から上つたなどとは思つてゐなかつたらしい。

田舎の船着場のことゝ、ものゝ數丁も歩くうちに田園の開けた茶種畑の間に出て來た。田舎唄を歌つて畦路を辿る百姓の娘などに出つくはす。春色濃やかにして、何とも言へない風光が目前に開展してゐる。

その田園の間に聳ゆるあの山が龍洞山であらうといふ見當を付け畑を耕してゐる老農をつかまへて「龍洞山はあの山ですか、あれにお寺でもあるでせうか」と訊いたところが「あります。龍洞禪寺といふ山寺が中腹にあります」と答へて呉れた。

54 龍洞禪寺の太湖石

湖中の孤島に旅路を辿る足も軽く、自分は桃花暖かき春の山を指して行く。雲雀鳴く自然の音曲を聞きながら之に尋ね至る。江南の旅でなくともかう云つた旅はいつも詩趣が伴ひ、一段の游瀝氣分を咬るものが多いのである。畑に鋏を持つ百姓や、鼻唄歌ふ島の女など見るが、之に露だ

に海賊村らしい氣持は漾はせてゐない。

上海方面では西湖の東南部に、海賊の巢窟があるとしてこの邊りの島々を指してさう言つてゐる。然し、それは夢の如き話である。何でさう云つた流言蜚語が飛んでゐるのであるか。鎮夏の礪

頭にはピストルを持つた手合はたくさん居ても、別段人を一々追駈廻して居るわけではない。

罪なくして春の野を歩く孤客の身には何一つ不安らしい雰圍氣を見せてはゐない。村には犬も歩いてゐれば、又鶏等の鳴く聲も聞こえてゐる。何等一般江南の山村水郭と變るところはない。斯う云つた春の野にあそび、幾度か山寺を尋ねて、禪僧と語り合ふ體験を有してゐる自分には眼前に見ゆる龍洞禪寺の山門が一段と懐かしく游心を咬つたのみである。

高壁の紅に上塗された色の鮮かなことや、又竹柏の綠林の間から寺の屋根の見えたり隠れたりしてゐる眺めと云つたら本當にやさしい。若し明月の夜、この邊りを逍遙したならば嘸や眞如の心の咬られて思ひ出の深い太湖の旅が樂しまれる事であらうなど、勝手な游瀝氣分に思ひをやりつゝ畦路を行く。

山は遠からず、又低からず手頃の丘陵である。登つて見ると、その頂といふ頂にはそれはく形の奇態な白岩があちらに又こちらにと大變起伏してゐて、綠蔭に混つて亂立してゐるのが見え

る。これは或は所謂太湖石を聳えかしてゐる處ではないか、兎も角珍らしき岩山であるとの見當が付けられたのである。そこで麓の路を迂廻して山門を尋ねようとしたが、それを後にして先づ自分は中腹へと攀ち登り峰を極むべくひとり路を辿つたのである。

すると龍洞山はその頂の見えてゐるに拘らず、絶壁をなす石灰岩の奇峰があらゆるところにちりちりと聳え立つてゐる。或は深き谷をなした所があり、或は長き出づ張りを作つてゐるところがあつたり、或は棘の深くして足場を見出すことの困難な處もあつたりする。支那服の裾に荊の枝が絡まり、なか／＼歩行が思はしく行かないので困つた。時には浅いつもりで岩間に這入ると、脊丈以上もづぼりと嵌り込んでしまふ。逆も大變厄介な峰である。七曲り八曲り足場を見付けつゝやつとのこと頂に達した。上つて見ると頂の全面は、登るに骨の折れたゞけに奇抜である。實に複雑を極めた太湖石の起伏せる仙境なのである。

そこでこぼこの頂の状は千態萬狀である。どの岩一つを取出して見ても、何れも皆夏の入道雲の如き姿をしてゐる。さう云ふものばかりで、その奇々怪々振りには古來の文人畫に見る奇石とそつくりである、この山は天下第一洞と唱へられてゐるだけの資格があつて、之に神龍の住み老ゆる洞窟があると思はれてゐる。それも當然のことだと言へる。

幾ら見てゐても見飽きのしない太湖石の山であるから、天下の畫人南畫に筆を練る者は斯う云つた龍洞山に起臥するの必要があるであらうなど考へられたのである。

頂に立つてゐると、脚下の禪寺は綠林の間に見え、又湖畔の桃畑に農夫の去來するのが見える。白帆は眠るが如く洞山の崖から現れて來る。實に何たる平和な湖水であるか、此處も亦湖上共に仰ぐの言葉の適當してゐる處であつて、見渡す限りの水平線は靄に包まれてさだかでない。天と水と島の外には、何物も眼界に這入つて來ない。まことに大きな景色である。

太湖石と云ふ名前は夙に支那四百餘州に擴がり、庭園趣味の上では先づ第一に數へられる風流な石である。和漢共に古くから之によつて岩組のグロテスクな姿が築上げられてゐる。

太湖の平和の雰圍氣の中に斯う云つた奈怪天來の形を有するものゝ多いことがこれ亦游客の意外とする所である。

思ふに太湖石は石灰岩でライムストーンの性質を有するものであるから、古來幾星霜を経る間に雨風に作用せられて自然にかう云つた奇抜な山の頂を現すに至つたものであらう。

龍洞山そのものは一つの大きな太湖石の塊から出來てゐて、天下の庭師に見せたならば垂涎三尺のものと言へる。彼方の空に聳える莫釐峰の大尖頂は薄霞の中に酔へるが如く幽かに仰がれて

ある。又何れの時にか再び此處に尋ね来るの機会があるかと春色の眺めも限りなく惜しまれ、自分分は人家を辿り、山門を尋ねたのである。参詣の善男善女も七、八名見えてゐた。清明の前であつたが紅蠟線香など立て佛前に祈禱してゐるのであつた。この平和の島に来てゐると、寺僧の人相までもが如何にもやさしく見える、このやうな幸福なお寺は滅多にないだらうなど思はれたのであつた。

55 東宅河の里

龍洞山の裏路を辿り、田園の間に下る路は海岸線に平行して東行する。島の中央に見ゆる山々は峰打續き、半天に聳ゆる高嶺は縹渺山だの金鐸山だの云ふのが指さされる。

これ等の連山の麓、小川の流に沿ひ桃畑や桑畑の間、畦路を頼りに行くことしばし、時折畑をしてゐる田夫に東宅河の在所を訊くに、あの向ふの山の麓であるといふ。云はるゝ言葉に勇み足を速めて行くと、それはまだ手前の山なので今一つ先の山を廻らなければならぬ。

併し通過してゐる田園は桃花流水の風光繪の如く、まことに天下の文人墨客にも傳へおきたいところである。獨り之を私して歩いてゐることが何だか勿體ないやうな感じもする。愈々山を廻

り目的地の處トンザホ（東宅河）に達した。

百軒足らずの民家が小川を挟んでかたまつてゐる山村である。その第一の橋を渡つた向ふの厚壁重門のある家が即ち目ざしてゐた徐先生の住居なのである。こはそこらに遊ぶ子供から教へられたのである。門を叩いて徐先生の在宅であるや否やを確かめ、來意を告げる。紹介は貰つて來てゐないが東山の邵先生から承つて参つたといふ簡単な挨拶をしたのであつた。

折しも徐先生在宅、母堂その他家族どもも八仙卓を圍み食事の最中であつた。欣然我れを迎へて椅子から立ち、初對面の挨拶をする。

江南各地の游歴の途次こゝまで來訪したことを語る。するとニコ／＼顔で何れも、如何にも遠來の客を遇すると云つた態度を見せ、母子諸共に慇懃な風で我れを取持つてくれる。その温容人に迫る母堂の様子は如何にも片田舎の老母らしき氣持を現はしてゐる。直ちに物も取りあへず熱茶を請する。一通りの挨拶が済むと、先づ席を譲つて自分のために竹の箸を置き「サア食事をしなさい」と勧めるのである。

徐家は小川に沿うた石疊も整然としたうちである。塗壁の色は錆び、門は大規模と云ふではな

いけれども、何處となく重々しく出來てゐる。門房の部屋から賭場、天井、軒のあたりの建築の

様子は如何にもどつしりしてゐる。

凡そ三百年も経つたかと思はれる建築に成り、その様式は殿堂造りを加味した古風なものである。

内部に這入つて軒のあたりをあちら眺めて見るに、乾隆年間の彫刻になる高貴殿上人の行列に日傘をさし掛けられた皇后の豪華な玉容なども見られる。如何にも滋味たつぷりの彫刻振りで、その長さが二十餘尺に餘つてゐる。さうしてその末端に持つて行つて乾隆の年號が刻されてゐる。これによつて見ても太湖湖上の住宅がひとり槎灣と云はず楊灣と云はず、この西山あたりにも、可なり古典的な殿堂造りの住宅建築の發達し、清朝の豊かな黄金時代を物語るものであることがわかる。恐らくこの界限での名家の跡であつたらしく思はれたのである。

禮堂正面の壁には、白紙に主人の戒名の墨書されたのが貼附され、寫眞がその上に飾られてゐる。つまりかうして祭壇が設けられてあるのである。自分は徐先生に尋ねて見た。「禮堂に祀られてゐるお寫眞はどなたですか」と言つたら、「自分の老父である。昨年八月十七日に亡くなつてまだその一周忌も來ないのであります」と答へてゐた。

食後、卓をかこみ島内游瀝の名勝地について豫て邵先生から聞いてゐたまゝを語る。又島内の

珍らしい處を巡瀝したいとことを述べた。併し此處には二三日の滞在のつもりであるから、餘り澤山見て廻ることは出來ないといふことにして話を持ち出して見た。

すると一家團樂の卓上は遠來の客分を中心に家族皆集ひ、四方山話に花がさく。徐先生の言ふには「まだ日没迄に時間があるから遠方の寺々は又の日にするとして、此處から八支里の山路を行つてフアホワス（法華寺）へ參詣せられては如何、之に慧峰大和尚と云ふが住職をしてゐる。宅の弟を案内役にさせますからお疲れでなかつたら如何でせう」との話である。それではといふことで早速之に出掛けたのであつた。

法華寺の山門に到る路は全く彩色された古畫を見るの趣であつた。山に入り林下の路を登ると山門に這入つた。

大和尚を尋ね禮堂にをさまる。之に寢臺の大きな美事なのが備付けられ、明障子は紙を用ひないで悉く例の貝が張られてゐる。偏手な半透明な貝で三寸大に切り、之を薄く剝いた竹の骨で押へて鉄止めがしてあるのである。宛ら摺硝子の程度に半透明に見ゆる。如何にも室内が落付く。之に枕の大きいのが差向ひに置かれてゐる。恐らくこれはこの寺の阿片室であつて、和尚その他の山寺生活を營む者が之に憩ふものであらう。左右の壁を見ると筆法の濛い文字が見える。その

句は次のやうに現はされてゐる。

海天明月上

山寺晚煙藏

如何にも詩的な寫實的の文句である。明月の晚の山寺の眺め、又林煙棚引く夕暮の風光はこの十字によつて盡きてゐる。

西山は縹渺山を最高峰となし、東山の英釐峰と相對してゐる。山下を傳ひ歸る。村外れの寺小屋に立寄る。すると、夕方であつたが兒童は讀書をしてゐた。その近くに尼寺があつた。その尼姑は案内の君が知合の仲と見えて、之を尋ねるとしきりとはしやぐ。尼寺は半山庵と云へる尼寺である。ひとりの尼姑が居た。斷髮姿で島の尼寺とも思へないハイカラな身なりをしてゐる。多少の圓座はあつたけれども、續經などはしない。又經の事は知らないと言つてゐた。平氣なものである。由來尼寺にはインチキ（隱的）が多く、暖味屋の代りをなしてゐるのが多いのであるがこれなども少々怪しく思はれたのである。或は海賊村だけに色々のことがあるのかも知れない。お茶を酌みながら空豆をかじつてゐて、その話振り應對振りは至つて明快。さばけたものであつ

た。本堂の側に倉があつたが荒廢してゐた。時折り空豆の皮などを投付けて見たり冗談ばかりする所を見ると、普通の尼ではないのではないかといふ感じを得た。かう云つた存外すれからした尼姑のゐることは自分の聊か豫想外とする所であつた。

この日自分と一緒に歩いて案内をして呉れたのは主人徐雨庭先生の弟蔡痴墨（碧雲軒）君といふのである。時折り蘇州の新聞に太湖の通信を寄せ文筆を楽しんでゐる青年であつたが、あとで訊くと近來村で失業者になつてゐるので何とか浮びたい、通信の文章ならこの程度に書けるとして新聞の切抜きなど取出して夜物語に自分に見せて呉れたりしたこともあつた。

十二、海賊襲來の耳打ち

56 喪家の母堂

海賊村の徐家に客中、自分は或る夜寢室で將に眠りに就かんとしてゐたのである。時刻は十一時頃。既に家族の者は皆寢鎮まつてゐた。

その晩は如何にも平和郷の湖濱のことゝてひっそり閑としてゐたのであつたが、ひとり壁を隔てゝ向ふの禮堂に誰れ人の泣いてゐる聲か、蚊の鳴くやうな細い聲で、而かも泣くが如く訴ふるが如く餘音嫋々長く引いてゐるのが聞える。よく耳を澄ませ聞き入つてゐるといふと、どうも徐母堂の聲らしく考へられるのである。

思ひ當るのは壁に掲げられたあの先代の寫眞である。まだ亡くなつてから一年にもならないといふことであつたから、佛前に哀悼の言葉に代へて未亡人がその意中を懇へてゐるわけなのであらう。

よく片田舎で母親がその愛兒の亡くなつた時など、杉箸の如き細い骨で以て二尺三尺大の金殿樓閣を造り、金銀五色の紙を貼り、その大堂に宮女を花の如く打並べ、さうして之を七七、四十九の除七の間念じ拜してゐるのを見る。これは可愛い子にして若し來世に生れ代るならばかう云つた家へ生れ代るやうにと、その子のために念願する所を泣くが如く懇ふるが如く呟きつぶやく。さうしてその後でその紙製の御殿は焼いてしまふことをするのである。

この徐家ではかう云つた樓閣までは造られなかつたけれども、併し口に懇へる所の意味はさう云つた事を愚痴ほく並べ立てゝゐるのであると想像されたのである。しかし殆んどその言葉は聴取ることが出来ない。たゞ蚊の鳴くやうに細く長く泣いて幾度か繰返してゐるのみである。

母堂の佛前に繰返す泣聲は、初めは耳についてゐたけれども、何時しか之を搖籠の子守唄の如き感じで聞くやうになつた。遂に自分は好い氣持に浸りながらそのまゝ寝らるゝやうになつた。恐らく母堂は亡き主人の冥福を祈り、徐家の幸福を念願とし、たゞその繁榮を幾久しく思ひ念じてゐたものであらう。

或る日、男氣のない静かな晩であつた。偶然自分がひとり部屋にゐたことがある。すると自分の側に來て老母は色々物語るのである。

「昔在りし日には我が家もこの島で相當にやつてゐた。寄る年波に自分は何とも出来なくなり、主人は亡くなるし、今日かうしてさゝやかな家に住む住むをしてゐるのであるが、弟の方もあつて今は家でブラ／＼してゐる。若し貴下のお友達になりと、この家を造作ぐるみ引受けて呉れるやうなかたがあつた時には、宜しく紹介をして貰ひたい。御覽の通り家は門も壁も天井の具合も元は確つかりと出来たものであるが、今之を全部で土地包み三百圓位で引取つて呉れる人でもあるなら私は何時でも伴に話してお譲をしたいと思いますのであります云々」。

老母は斷腸の思ひを言葉に現し涙ながらに懇える。全く思ひも上らぬ懇えであつた。

自分は翌朝起きて門を出て行かうとする。すると弟の君が後をつけ来て「先生何處へ行かれるか」と言ふから「線香か蠟燭を買ふ家をさがして見たいんだ」と言つたら「何の爲めにか」と言ふ。「靈前に供へたいんだ」と言つた。ところが、「さういふ事をして貰ふと困る。そのお氣持を母に傳へるからそれだけはやめて貰ひたい」と切に言ふ。それならその事は取止めにする云つたのであつた。返す／＼も氣の毒な家運の傾きつゝあることを見て總體にこの村の大勢が今では舊時の如くないのではないか、村外れにある鐵骨の骨組みが今や風雨に晒されたまゝ錆び古ぼけて行く一事を以て見ても、近來の衰微の様子が察せられるやうに思はれたのである。

日本で以前九州熊本の宇土の田舎には、村の葬式の出る度に之に泣女が出たといふことを耳にしてゐる。

支那に在りても名家の葬式には、可なり大勢の泣女が行列に加り涙を拭き／＼聲を立て泣き叫んで行く様子を見る。又一年二年三年と長く棺桶を家に留め、或は會館同郷會の室内に之を留め置き、時刻を定めて女ども棺に縋つて泣叫ぶのである。或は啜り泣をしたり或は聲を高めたりなどして一種奇態な合唱のやうな泣聲が窓外に聞えるのである、これは支那の家庭にはよく見る風習である。

この事は誰れしも支那事情に通ずる者のよく知つてゐる所であるが、更に佛前に體を折曲げ、泣き崩れてその意中を語り亡き人の靈を慰めんとするその痛烈な事情に至つては、同情に償するものがある。この洞庭西山、母堂の啜り泣は必ずしも泊り客のあつた爲めにしてゐるのではなく寧ろ自分の泊り合せてゐた爲めに泣く時間が遅くなつたのではないかと思はれた位であつた、連夜のことゝて恐らくこゝ一年或は二年と之を續けるのではないかと察せられるのである。

西山と云ひ東山と云ふ、太湖の島々の湖濱はまことに畫圖の如き色彩美と輪廓に富み、而かもその潤ひのある春色は何とも形容の言葉がない。一言で之を盡せば、雲煙模糊の間とも言ひ得べく、又山紫水明とも言ひ得べく、或は湖山一色とも言ひ得べく、その邊の形容語は何であつても宜い。

たゞこゝは江南第一の名勝地としての風光を具有し、恐らく杭州西湖のそれに優るものが多いのである。たゞ上海よりの交通が不便であるのと、尙ほ海賊の出沒の噂が高いので餘り之に杖を曳く者がなく、あたらず天下の絶景を有して居りながらそのまゝこゝに葬られてゐる形である。併し危険な點を考へに入れないで、その無頓着氣分を發揮し遊歴して見る分には何等差支はないかう云つた殆んど世間に紹介されてゐない古代の建築工藝、或は自然の美、或は人情麗はしきものなど云ふものが隨所々々にあまた發見せられるのである。

江南の天地は、北方支那の田舎の純朴さとは様子がちがふ。そのどこまでも水郷を中心とした風物に富み、水村の特徴を多く有するのは江南の田舎である。この洞庭の如きはわけても細やかな風景美に富んだ處である。春色濃やかな桃花流水の場面は最も賞するに足るべく、詩に歌に繪に文にと、有らゆる方面の藝術的訓練所としてこれが見られる。その見方からすると、こゝは日

支兩國人にとつて最も興味のある處である。わざ／＼伊太利に出掛けたり、或はアメリカに出掛けたりなどしなくとも、この足もとに斯う云つた水村の絶景が見出される。時あつて疾風迅來的に海賊の出沒躍進振りが見えるといふさういふ奇抜な變化もあるのである。

併し必ずしも海賊は出て來るものと決つてゐない。その點は支那一般の片田舎と同じ程度に見て置いたら宜い。普通、奥地の片田舎にしたところで、そはいつも平和境とも言へるし危険區域とも言へる。或は支那全體が斯様な言葉で概評することが出来るとも云へる。徐家の如きはその平和境の中に在つて、幾代となく斯うして佗び住ひに満足し今日に及んだものと思はれる。佛跡あり、美景あり、今後これが經濟的に又軍事的に如何に重きをなすに至るかは別問題として、取敢へず藝術方面、文藝の方面から特に此の地方の探検漫遊の必要を力説したいと思ふのである。これは序でながら茲に記して置く次第である。

58 サコンセ（石公山）の山道

太湖の方言では「石」の事を「サ」と云ふ。さうして「山」は「サン」にあらず、「セン」にあらず、單に「セ」と云ふ、それ故に「石公山」は「サコンセ」と發音するのである。又長く云つ

て「サコンセー」とも云ふ。

市宅河からサコンセー（石公山）に往復するには七十二支里からある。片道三十六支里であつて、六丁一里の勘定である。

山は島内第一の靈場であり、觀音磨崖の石像があり、山中に後光を放つてゐる。參詣する島の女はいつもかなりある。山道は綠蔭深き畦路で、人里離れた幽境に通じてゐる。桃畑、桑畑が殆んどとぎれる處なく打續き、沿道は開墾され比較的よく耕されてゐる。

この島は海賊村の如く呼ばれてゐるが、かう云つたお寺、山道の附近などを見ると殆んど何等さう云つた氣配は見えないのである。分けても百姓娘の甲斐がひしいでたち、その老母に連れられ、腰に頭陀袋を提げ、寺詣での鈴をチリン／＼鳴らしながら金剛杖をついてゐる姿と云つたら全く佛の御利益に依つて有難い慈航を辿つてゐるといふ氣持しか見えぬ。まして見ず知らずの行人が狭き道で行き違ふ時にやさしく互に挨拶をなし、道を自ら避けて「お邪魔をしました」といふやうな言葉を掛けながら行く、その純朴な氣持は殺伐な噂の立つてゐるところとはちがふ。海賊村とは丸で反對な現象のやうに思はれ、一段と懐かしみを感じた。

湖畔、水の灣入せる處に靜かな水村がある。そこに四つ手網を仕掛け魚を取つてゐる者がある

如何にも平和な美しい眺めである。又それを側で見つてゐる長閑な村人も少くない。それを當込んで炒餅を賣つてゐる小店には萍果（林檎）なども列べてゐた。

59 一輪の明月石公を照す

洞庭西山の西端には湖面を壓してそゞり立つ太湖石の巨岩がある。その絶壁には「雲梯」の二大文字が刻されてゐる。その一字の大きさは約五六尺もある。梯を掛くるにしても大變な處であるが、かう云つた崖壁に刻字することは支那の人の最も得意とする所である。

崖上の一角に觀音堂がある。「石公禪寺」の嵌込みの石額が掛つてゐる。參詣する島の女は殆んど迹を絶たず、紺染めの普斷着のまゝで肉付のよい體格美を見せ、如何にも力強い氣持を與へてゐる。

手には提籠を携へ、之に一尺大の紅蠟燭や長き竹軸の線香などを挿入してゐる。線香の軸は例によつて紫色に染められ、その長さは二尺に餘つてゐる。

殿堂樓閣は崖を背景にしてゐるため、上へくと石段につれて進むやうに出來てゐる。その奥の院とも云はるべき最高の頂には道教の神を祀つた祠堂がある。下の方の群神を巡拜したものは

最後に此處まで来て禮拜をするのである。こゝにお神籤箱があり、ガラン／＼と振つて籤を抜きその番號によつて大吉、吉、凶、大凶などの黄符を抜き當てるのである。

村の女どもは一人としてその文字の讀める者が無く、大吉であらうが大凶であらうが何も解らない。その一枚が銅貨二文さへ出せば之を抽かせるやうに寺の和尚によつて仕組まれてゐるのである。三々五々絡繹として參詣者は見えるが、どうかすると一時に二十人も三十人も押掛けることがある。

和尚は金を受取り黄符を渡しはするけれども、一々讀んで聞かせてやるだけの暇がない。又必ずしも讀んで聞かせてやらうとする親切心もなさうに見られる。

丁度参り合せてゐたので自分は側で見てゐて試みにその一二枚を讀んでやつた。ところが我れも／＼と來て符を目の前に持つて來る。するとその大吉の下に二、三行書かれてゐる字が何の意味かといふ事を又訊く。宜い加減に大體の意味を取つて話してやるとそれで安心したと云つて行くのである。

まことに他愛もない話のやうであるけれども、こゝの女どもはさう云つた程度の參詣者である中にはその頂の處まで登つて石をカン／＼叩き、元寶と云へる銀紙で造つた馬蹄字型の紙を神様

に手向け焼いてゐるものもある。

何事をか口で念じながら蠟燭を供へ、線香を立て、圓座の上に三跪九拜してゐる者もある。家庭に誰れか病人でも出來たものらしい。頻りと祈り言葉を捧げてゐる。銀紙を焼いたあとの灰を集めてゐるものもある。それも自分で風上の方にしゃがんでゐてその灰を集むればよいものを、風下の方にゐて集めようとするものだから、大半吹飛ばされて居る。それを苦勞をしてわづか集めて大切さうにしてゐる。訊いて見ると、この灰を煎じて藥の代りに飲ませると病人は生き返りますと言つてゐる。

かやうな頑是なき村の女どもである。それが神前に紅蠟を手向けて、まだその火のとぼらないのに、片端からお寺の坊主は之を抜き去り、失敬して行くのである。そうして右手小指に伸ばされた長い爪で以て流れかゝつた蠟の跡を削取り、うまく掌で綺麗にして撫でる。やがてそこら邊りに散らばつてゐる包紙で包み直し、箱を持つて來て皆それを纏め持去るのである。

かやうにして蠟燭を供へる者も供へる者だが、之を抜き取る者も抜きとる者である。何といふ淺ましい事であるのであるか。ほんの神前にはその香だけ嗅がせたといふに過ぎない。之を見た自分は何となく和尚の面がまへが淺ましく感ぜられてならなかつた。

傍の禪堂の壁に讀まれた文字を見ると「一輪の明月石公を照す」と、如何にも詩的な好い文句が現はされてゐる。文句の詩趣豊かなところとこれとはまるで反對の和尚のしぐさである。併しこれは杭州西湖の上天竺、中天竺、下天竺あたりの禪寺に行つて見ても、同じやうに參詣者の見てゐる前で悠々蠟燭を抜取つてゐるのである。それ故江南の地方ではこれが坊主の内職であり、當然の權利であり、又役得であると思はれてゐるのである。どうせ失敬するなら手早く目の前で抜取るとして、正々堂々大びらにやつてゐる所は男らしくもある。

60 海賊襲來の耳打ち

湖畔石公山の岩頭に力強い線を感じて丘を下り、歸路につく。碼頭鎮夏の村外れに來て麵店に立寄り、腹持へをする。

卓を隔て、横の壁に貼られてゐる繪圖を見ると、前清時代の皇帝の肖像が濃厚な色彩できらびやかに塗られてゐるのである。さも珍らし氣に貼られてある、之が一枚や二枚でなく數多あるので、この地方の文化が中華民國になつて二十幾年今だに何等最近の國運に没交渉な滿洲朝廷の

時代ものを貼つて眺めてゐるなど、如何にも時代離れのした香氣な氣分が窺はれ、面白く思つた。むしろこは滿洲帝國の要人達に見せたら嘸かしと思はるゝものであつた。

石公山の往復七十二支里を終へて宿に着いた時は三時を過ぎてゐた。裏口を出て程遠からぬ處に、徐家と親しき關係の間にある藥房がある。弟君は今からその主人を尋ねに參りませうといふことであつたので、自分は誘はるゝがまゝに之に案内された。村里に似合はないかなりな大藥房で、店構へは古色蒼然、四尺大の古めかしい看板に黄金色をなす壽星の白髮姿が現はされてゐる。遊く錆びて黄金の色はくすんでゐた。

店頭には天井の處まで藥味箆の抽斗が見上げらる。手頃の壺が數多並んで棚にすらり見えてゐる。田舎の藥屋のことゝ總べて不老長壽を目的とした草根木皮が取揃へられてゐる。店頭には又應接用の大卓が設けられてゐる。

自分達の之を尋るや色の黒く、口の大きい尙儂の主人公が出て來て挨拶をする。言葉つきいと鄭重にお愛相もよく、殊に言語は明晰であつて好い感じのする人であつた。年はまだ三十そこそこのやうに思はれた。

行きなり名刺を交換し互に名乗をあげる。すると主人は徐介芝と云ひ、吟月軒主人と號してゐ

る。常にニコやかな態度で無難作に何事をも語り、大層くだけた人柄である。

「昨日以来御來駕の事を承つてゐたが、自分からお尋ねするつもりでゐた」などお愛相が好い。ところが丁度夕暮れになつて來客がそこに見えた。その客はやはり村の人で、もと江北人の一人である。所謂コンボンである。上海あたりではコンボンと云ふと長江以北の人を指すのであるが、多少之に田舎べいと云つた意味が伴つてゐる失禮な呼び方となるのである。この江北人は主人と親しい中であると見えて色々打解けた一家團樂の話が出る。主人は「丁度時刻になつたからどこかで俱に食事でもしたら」と言ひ出した。しかし自分はその夜は宿の方での約束もありしてその好意を謝し、尙ほ暫し話に耽つてゐたのである。

するとその話の中に海賊の話が出る。だん／＼と興が乗り次から次へと話は進展して來た。江北人の客は自分に言ふには「今後は旅程はどの方向をとらるゝのですか」と言ふから「これから太湖を東に渡つて木瀆から光福の方に行くつもりです。島巡りはこの邊にして打きるつもりです」と答へた。

そこでその客の言ふには「今日お出掛になられた石公山と楊灣との間の湖上でツヒこの間外國人が殺害された事實があります」と言つて、暗に海賊の出たことを言ふのである。村の人だけ

であるならば別にどうといふこともないが、外部からこの村に這入つてゐらるゝことがどちらかの方面へ傳はると噂から噂を生んで、ひよつとすると海賊の襲來がこの方面にあるかも知れませぬ。外國の人は金品を携帯してゐることが相場になつてゐるから大きな聲では言はれないけれども、村としてはどう事態を醸すか分らないといふ心配が實はあるのです。御無理は申されないけれども、願くは餘り長く御滞在にならない方がよろしくはないでせうか。又身邊をよくお氣を付けになつた方がよろごさいませう」と、ひどく聲を低めて言ふのである。

吟月軒主人はニコ／＼顔を眞面目な顔に直して「全くこの間さう云つた不祥事が突發しました事實ではありますけれども、さうこの人の言ふ程の事はありませんでせうからマアゆつくりなさいよ。この邊は御近所同士よく聯絡を取つて居るし、お近い處ですからお暇がある時は何時でも家へ來て寝轉んでゐらつしやい」など心安く言うて呉れるのである。然し片方の先生は何處までも恐ろしい事を力説してどうも心から心配してゐるらしく見えてゐた。果して斯様な事が噂だけで止まるのか、それとも事實になつて現れるのかは小説よりも今一層奇異に感ぜられる。

物好きな氣分からすると興味のある問題のやうにも思はれた、がその江北人の話す時の顔面神經はその動き方と云ひ、又その時の左右兩手の使ひ分け、ゼスチュアの面白味にひどく自分は興

味を感じ、傍の藥房の主人もそれに視線を注いで時折り小さい笑ひ聲を禁じ得なかつた様子であつた。主人は言ふに、「昨夜はこの附近の川向ふの書館（寄席のこと）に寄席を聴きに参つたが、大層面白かつたが、御都合で今夜お伴したい。お約束でもなかつたならば一緒に参りませんか」といふことであつた。大體さう云つた調子で吟月軒主人はひどく打解けた態度で互に興味を語り文學を論じ、僅かの時間ではあつたけれども、今だにその知友としての印象が強く自分の頭に残つてゐるのである。

十三、海賊料理

61 海賊村の料理

太湖海賊村一帯の料理は、野趣満々で、その料理の味には又言ひ知れぬ素朴な所が見出された。路傍の飯屋の料理にしろ、村の家庭の料理にしろ、その材料は、野に、山に、湖水に得た物以外に殆んど何も無い。小川から漁れる小魚もあるのであるが、大體湖畔で漁つた物がその御馳走となつてゐる。それ故、山海珍味の誇るべきものとしては無いけれども、あれだけの大きな水郷を控へてゐるので魚介には相當珍とすべきものがある。中にも村の家庭料理には、春先のせりであつたか、田螺の料理が最も甘く舌鼓を打たせたのであつた。

太湖の湖畔は泥が深く、その水邊に漁れる所の田螺は、直徑一寸以上もあるといふ物珍らしいものである。これが箆に盛られて數多臺所に持込まれてゐるのである。無論燃料には、コークスや石炭などは來て居らないで、山の木を焚いてゐるのであるが、その田螺はおすましの所謂清湯

の料理であるから、清湯田螺といふ獻立になるわけである。鹽の味付けで中に生姜を薄く刻み、他には何等野菜を入れないのである。

之を料理するには、貝の螺旋形の軸になつてゐる部分を割つて、之を水洗ひして、一部を取除けてしまひ、そのまゝ鍋にどかつと入れるのである。まことにお粗末極まる料理法であり、その煮えた時を見計つて、大の井に之を移し、そのまゝ食卓に運ばれるのである。

すると竹の長箸で之を取り、薄皮の蓋の所に口を當て、力を籠めて唇と舌で吸ひ上げる。それからその貝を挟んで渦巻形の腸の所をそのまゝ離脱させるのである。割にわけなく身は取れる。その尻尾の所の腸の如く見える部分は宜い加減に箸で挟み切り、之を捨て、又薄皮の蓋を吐出すといふまことに亂暴な食べ方をするのである。恐らくそれは海賊料理随一のものと言へるであらう湖上に稼いでゐる海賊仲間もこの田螺を味つてゐるとすれば、同じ遣方で之を食べてゐることゝ察せられる。

尙ほこの江南地方で、雪駄の裏のやうな硬い肉の筋をお露の身にして平氣で噛みこなしてゐる手合がある。

海賊村と限らず、運河の船頭、水村の百姓達の飯の時には、よく之を見る。時折一緒に卓を圍

んで料理を攝る時、迎もそればかりは齒が立たない。已むなく摘んで犬にやると、犬は大齒がお得意の武器であるからわけなく之を噛み切る。

二度目に捨てようとしてゐると、連中が之に視線を注ぐ「やれますか」と一こと言ふと「戴きたい」と言ふ。連中はわけなく之を噛みこなしてゐるのである。まるで犬であるのか人間であるのか區別が付かない。かう云つた噛みこなすと云ふ恐ろしい底力を有してゐる所は、大陸的とは云へ、その線の太い荒々しい氣分が卓上に窺はれるので、これは海賊料理の一場面として特筆に價することであらう。

由來江南の地には、食事の時のしきたりには、随分奇抜なものがあり、時には酒をたぎらして置いて、生きたまゝの蟹をその中に投じグツ／＼煮込んだのをそのまゝ打あげて皿に盛り、お腹を手際よく開いて、その身を食べる。雄の方よりも雌の方が美味であるとされてゐる。殊に雌の子持ちの時のそれは風味言はん方なく江南地方の自慢の料理となつてゐる。チンキヤン（鎮江）に又ウッフ（蕪湖）にこの種の名物料理があり、酒の肴には醉蟹と云つて江南第一の上戸の肴として賞味せられてゐるのである。

又片田舎では麵類屋の大井で、お露なみ／＼と支那そばを食べる事などがある。すると半ば食

べたところで、下の方から緑の色も濃き黄金色の底光鮮かな兜虫が出て来たりなどする。

味ひは複雑で天下の珍料理にもこれ丈の味は出てゐないとて、番頭に箸で之を摘み出して見せる。すると唯「さうですね」といふ言葉だけで澄ましてゐる。「相済みませんでした」とも何とも言はない。そこに野趣が現れてゐる。

南方の田舎料理は北支那に較べると稍々進歩した料理とされてゐるのであるが、片田舎の常食とする所のものは斯う云つた頗る低級なものである。が、その中に無頓着な禪味のあるものを見出すことを、不思議がつてはいけないのである。

宿に在つて一家團樂食卓についた時には、この田螺料理の味ひは殊に結構である。老母は「えらいお氣に召したやうですね」といふので、自分は「日本にこれだけ大きいのはゐないので本當に珍らしい」と褒めた。ところが又箸一杯取り寄せてくれる。その言葉の言ひ終らないうちに後の支度をして又出して呉れる。

徐先生、弟の君も酒を傾けつゝ盛んに之を箸で挟みながらやる。机の一角には堆く山が出来たからである。やがて親戚から二、三女連中が子供を腕に抱えて卓に近く座を占めるのである。

二、三歳の幼児がこゝに加はる。如何にも可愛い。繪に見えてゐる唐子そのまゝで、本當に林

檜の頬べたのやうな顔を見せてゐる。殊にその冠せてゐる帽子が又ひなびてゐて面白い。

老母に童女の名前を訊くと「名はフカン」と言ふ、その發音の通りを繰返して「フカン」と呼びかけて見る。すると首を動かし、勇み立つて喜ぶ。抱ける母は子供以上に喜ぶ。「字はどんな風？」と訊くと「知らない」と答へる。

老母も亦之を知らないらしく、遂に徐先生からそれは斯うくだと言つて文字を示す。即ち「福康」それで成程「フカン」といふ發音が解つた。傍に來合せてゐた女に耳の聞えないのがゐる。

それとは知らないで話する。幾ら話しかけて返事がない。老母は之を指して「ロンズア」と言ふ何の事か解らないので「ロンズア」はその女の名であるかと思つた。すると徐先生がそれは斯うだと言つて「聾子」と書いて示して呉れたので成程と合點した。その時の態度を見て老母も女連中も主人も弟も皆一時にとつと笑つた。

食後「ヂヤンサンコを召上るか」と言ふ。何の事か解らない。けれども多分料理だらうと思つたから「よろしい戴く」と言つた。けれども果してそれが何であるかはよく解らなかつた。品物が來て見るとそれは何だ、落花生である。「これはホワサンでないか」と言つたら「この地方ではヂヤンサンコと言ふ」と言ふ。

遂にその發音のみは解つても字が解らなかつたが、あとで考へて見ると、これは「長生果」といふ名前で不老長生の名薬とされてゐるとのことである。南京豆は脂肪分に富んでゐる爲めである。つまり精力劑として用ひられてゐるもの、生理的に言へば通じをよくする爲めのものであることが判つたのである。

62 寄席に興ずる水村の大衆

晚餐の席上は、言葉の聞き違ひやら、耳の聞えない女やら「フカン」(福康)の子供やらで時々の歡聲一時に起り、殆んど子供の集ひの如くはしやぎ返へる。互に酒の酔も廻つてゐたので徐先生邸内の食堂はひどく賑つたのであつた。

やがて吟月軒先生との約束もあつたので弟の君と同伴してその店に尋ねた。先生は自分共の見えるのを待ち構へてゐたと見えて、ひどく喜びニコ／＼顔で共に寄席に出掛けたのであつた。

そのときの主人の顔は今思出して見ると、日本で支那に縁故の深い實業家白岩龍平翁と殆んど生き寫しの顔であつた。寄席は小川の向ふで門を這入つて見ると既に客は八分通り一杯になつてゐた。書館と謂はれてゐる全くの寄席で壇は高く設けられ、之に田舎巡りをして來たその道の講

談師が上り面白くをかしく喋々喃喃々軍談式の話をしてゐた。

大衆は娛樂氣分に満ち、その胡弓の音、打囃す太鼓に魅せられてゐる。時折り笑聲が堂内に響き和氣霽々の雰圍氣が見える。何れも百姓着物そのまゝで行つてゐる。其處に席を占めてゐる連中は純樸だ。一等席が前の方に空いてゐた。群衆の中を前の方に進むと、自分ども一行の姿はすべて、一堂の注目となつた。かうした海賊村を以て聞えてゐる太湖の島の中にも、この書館の如き平和の氣の漲つてゐる娛樂設備のあることを見て、自分は意外の感に打たれたのであつた。

その夜は地酒に酔ひが廻り過ぎたので寄席にゐること暫し、辭し歸り、宿で連中と又卓を圍んで雑談に入つた。

その時に宿の弟君の言ふことは、「自分は是非お願ひしたい事がある。自分は失業することゝ二年。どうか先生、自分の爲めに何か仕事を探して呉れないか。特にお願ひをしたい。出來れば上海に御紹介をして貰へないか。なんなら日本にお伴して行つてもよい。よいお考へ付きはないでせうか」などいふ相談を持掛けられたのであつた。

そうして特に當人の蘇州織物に對する關心、又田舎の織物に就ての情報などを通信した文書、その他不斷の隨筆の數々を綴り込みのまゝ見せて呉れたのであつた。尙ほその問題に就ては追つ

て上海から又日本からよく考へた上で返事を上げるからといふことにして打切つた。
その後老母は又例の問題を繰返して執拗くは言はなかつたけれども、その事情を述べて居る。
明朝船の時間を見て自分を出発したいことを話したのであつた。最後の晩のこととしておそくま
で色々の四方山話やら人生觀の話などを語り合つて夜の更け行くのも知らないくらゐであつた。
まことに數日の西山逗留であつたが、名残り惜しき體驗を重ねて経たわけであつた。眠りに
就いた後、例により母親は又佛前で泣くが如くおつとめをしてゐるので、その聲は一段と憫れに
感ぜられた。

63 蔡痴墨君と平明の離別

更け行く西山の旅枕も、うとくしてゐるうちに、早や一夜を明かし、朝未明に目覺めて靈前
を拜する。そうしてゐると戶外に喇叭を流して來るのが聲える。「あれは何であらう」と訊くと「今
朝船が出る合圖で客を呼んでゐるのです」と、如何にも田舎らしく面白く感ぜられた。
「朝飯を濟ませて行かないか」といふことであつたが、「食事は外で何とかなるだらう」と言つて
出發を急いだ。家族一同に深き挨拶を述べ、心ばかりの包み金を残して、小川のほとり門前に見

送る主人や母堂の好意を謝しつゝ發つた。弟痴墨君の案内で、早朝この小川のしもて湖畔に出帆
の船便のあるのを確めてゐたので、それへ指して土手を行く。東宅河の村を後に水郷で讀經して
ゐる民船捨小舟の樹下の趣などを他所に見て小舟に打乗り、遠殘の湖畔を沖合まで乗出したので
ある。

痴墨君は船出に際し、幾度か別れを惜しみ、是非手紙の往復で何とか願ひたいといふ事を呉れ
くも語るのである。そして早朝ではあつたが、水郷の小店に立寄り、油條片に朝飯の便飯を濟
ませ、こゝに同君と別れて渡船に乗つたのである。

同船七八名、楊柳の水に垂れた間を行き、朝ぼらけの和らかい湖上に漕ぎ出たのであつた。
湖濱の林煙遠く、もはや弟君の姿も見えず、薄ぼんやりと邊りの景色は殆んど夢の如く、たゞ我
が船は沖へくと遠淺を漕ぎ出たのであつた。

可なり沖合まで遠く出ると遠北輪船会社の發動機船が水平線上から煙をあげて姿を見せる。
やがてするうちに鎮夏の沖で客を拾ひ、次第に近付き自分共は、渡船から之に乗移つたのであ
つた。

太湖の湖上には、海賊船が發動機を以て荷船を追駈廻すといふことを豫て聞いてゐた。果して

斯様な事があるのであるか、どうか事實を自分は目撃してゐない。

けれども今此處に來た發動船などがさう云つた、活劇を演ずることがあつたとした所で、これ以上速く走る船も此處では餘り見出されない。又太湖の今日の文化の程度はウウシ（無錫）方面は兎も角も、この界限では、これが最高の文化を物語る交通機關なのである。モーター・ボート一つあるわけではなく、何としても時代に取残された様子がこゝに見られる。

元來風流翰墨氣分に出來てゐるこの湖上を、餘り科學の力で征服したりなどすることは、場所柄似合はしくない。又今日の經濟の程度にしても高度の文明を要求するまでの段取に行つてゐない。事實風景としては繪の如く潤色を帯びやさし味を發揮してゐても、經濟的にこれが如何に利用されるかといふ見當が更に付いてゐない。何と云つても、時代の圈内から埒外に取残された一大水郷であると言はなければならぬ。

東山の寺小屋に猛威佛の佛像の祀られて居つたのは、やはりこの地方に襲來する海賊共に對し一つの魔除けの意味にされてゐたものではないかといふ感じもして、地方民の如何にこれが脅威を感じてゐるかは察するに餘る事である。かう云つた感想などを出發に際して頭に描きながら、湖上を東岸の運河に入り木瀆指して航路を取つたのである。

64 湖上を木瀆へ

發動機船の船上、乗合客の中で、偶然自分の側にゐた一人の紳士は、言語も明晰で而もこの地方界限の事について旅慣れた人であつた。東岸の行手については種々な道行旅館風光の美、山寺などについて大體の事を尋ねて見たが、豊富に語り聞かせて呉れたのであつた。

西山は幽かに霞の中に薄ぼんやりとして見え、又東山は南の方に高く仰がれてゐるが、我が船はその航路を北側にとり、次第に運河の中に何時しか這入り、蘆荻の間、又楊柳の並木の間、或は田園の間を走り走つて、靈岩山麓であの石工の多きモード（木瀆）の碼頭に着いたのである。土地の訛言葉ではこの地を「モード」と言つてゐる。

そこから先の自分の旅程は光福に、又鄧蔚に勝地を探らんとするのであるが、輪船の乗合客は皆々この碼頭で降ろされたのである。上陸して見ると、商賣は活潑である。道幅は狭いけれども往來の行人は殆んど行當らんばかり雑沓を極め、何處となく充實した殷盛を極めた市況が直感される。見たところ蘇州の街と餘り變りのないくらの活氣を呈してゐるのであつた。

太湖の海賊村を中心とした湖上の游歴は、この木瀆に着いたので一段落を付けたわけであつた

遊瀝中の體驗には種々な出來事もあり、又風流な方面に頭を遊ばせたこともあり、少からぬ厄介を見知らぬ旅の人に掛けたこともありなどしたが、一度も自分の體の健康を害したことはなく又ポケットに脅威を感じるといふことも全然なく、多少の體の疲れは感じては直ぐ又睡眠で取返しが出來ると云つた程度の、びやかな旅であつた。

案ずるよりも生むが樂なりといふ譬のあるが如く、我が洞庭の海賊村巡りの試みは先づ之を以てその實情の概要をこゝに述べることに出來たのは仕合せである。

この項に於て特に讀者に公けにして置きたい事は、支那の奥地の危險性については全くこれはお天氣の晴雨、五風十雨の事と同じわけで薩張り判らないのである。

そは全然無いとも言へず有ると決つたわけでもない。領事館の心配する事が必ずしも無駄だとは言はないけれども、その通りに恐れてゐる必要はない。又相手方が幾ら獐猛であつても、之に條理を盡してよく語れば理解するだけの頭は十分あるし、場合によつてはこちらよりも上手であり、甘い辛いもすべて承知してゐる仲間なのである。

之を低級なる如く、又亂暴なもの、如くに早呑込みして掛かることは却つて失敗を招き、進退これ谷まるといふ窮地に自ら陥ることになるのである。

相手を悪く言ふ前に先づ自分自らのびやかな態度を執り、前後左右をよく考へ、常に悠久な立場から自然の風光を賞する意味でその景色の中へ獐猛な者をも皆採り入れてこなししまふ氣持さへあれば結局最後は大團圓にをさまるに決つてゐる。

この考へは一旅行についての秘訣であるばかりでなく、取引に、外交に、又民情の視察に、買物の場合に、總べて同じわけなのである。

それ故人の話を半分聞いて速断をしたり、短氣を起したりすることが、つまり自分の命をなくしたり、失敗を招いたりする結果となるのである。これは太湖の旅を終へて陸に上ると同時に特に痛切に感じた事であるから序ながら此處に附記して置く。

65 光福への舟中

蘇州の街は運河傳ひに東行すれば、この碼頭の水郷からわけはない。さぞや海賊村の旅で暇取つてゐることを領事館の方で心配してゐるだらうと思つたが、併し此處まで來てゐるのだから更に道を西の方梅の名勝で名高い光福、鄧尉の方面へと迂回することにした。

この名勝地こそはウウシ（無錫）の梅林と並び稱せられてゐる處であるによつて、之を見てか

ら蘇州に歸ることに豫定を決めたのである。

ところで船から上つて見ると、街は混雑して殆んど商賣に皆熱中してゐる手合のみで、迂つかり道も訊かれないくらいな勢ひである。初め乗合つた客のよく親切に話して呉れた人と一緒に上陸はしたものの、その人は直ぐ脇の方へ別れて行つてしまつた。

碼頭に近き店に立寄り光福行きの船の出る所を確かめやうとした。けれども商賣が違ふせゐるのか一向要領を得ない。訊く度に違つた橋の名前を教へる。行つて見ると船着場などありはしない。橋の名前はあつても一向それらしい處は見付からない。行けども行けども同じやうな道の狭い金文字看板の澤山出てゐる雑沓した處だ、後ろに運河は通つてゐるけれども、遠方へ通ふ船の通れるやうな水路とは違ふ。

又橋が低くて船は通れさうもない。歸つて来て元の上陸した碼頭の附近で訊いて見る。やつとのこと見當は付いたので安心してその方角の飯屋に這入る。運河沿ひの窓の低い茶館である。眞下に運河を見ながら食事を注文する。こゝは又肉を幾ら、野菜を幾らと一々駄目を押させるのである。

商賣の繁昌してゐる店で大變な満員振りである。食卓は黄色の漆の掛つた氣持の好い新しいも

のであつて、近在にない立派な飯館であつた。

番頭に光福行きの碼頭を確めたので一層見當が付いた。銅鑼を叩いて廻る者がある、道幅の狭い支那街のことゝて、耳のどうかなるくらゐまで高くひどく。

「あれは何だらう？」と言ふと、「蘇州行の船が出る客を呼んでゐるんだ」と言ふ。

「光福行のはまだあとに来る。叩き方が違ひます」と言つてゐる。教へらるゝがまゝにゆつくり茶を飲んで休んでゐる。するとやがてその時刻になつて又銅鑼の聲が聞えるのである。

運河に沿うて西の方へと可なり行つて見た。同じやうな石段が隨所にあるのみだ、船の形は皆同様である。確めたつもりであつたけれども、行つて見ると此處にはそんな船はゐないと言ふ。多分まだ先でせうと言ふ。更に先へ行つて見ると此の邊にはそんな船は出ないといふ。全く見當が付かなくなつた。

結局のところ愈々西の街外れに出て場末の店の人に訊いて見たが、更にまだモツと先だと言ふ如何にもたよりなく感じたのであつたが、石段のある處毎に一々風潰しに訊いて廻つて見た。ところが切石の澤山積上げられた大きな碼頭に何でも無い苦の掛つた民船が二三隻横付けされてゐる。

船頭について親しく訊いて見たところが、さうだ、この真中のが光福に行く船だと言ふ。そこで初めて船をつかまへることが出来たのである。支那の田舎の旅は船出の刹那ですらも斯う云つた風になか／＼的確にきちんとした所を突止めることが出来ないのである。

街によつてはその出船入船の碼頭の本格的に決つてゐる處もあるが、必ずしもさうとばかり決つてゐない。又汽輪又は輪船と云へる黒煙をあげて走る船ならば兎も角も、手で漕ぐ普通の民船などの出帆は誰れも特に注意してゐる者はなく、宜い加減のものであるから、つかまへ損つたらそれきりである。殊に狭い運河に澤山の船が輻湊してゐる場合旗一つ出して居るわけなし、船の形に船頭の様子も全然皆同じやうに見える。

かう云つた場合に幾ら氣は矢竹に逸つてゐても、その急所をびつたり押へることはなか／＼容易でないのである。

この時失望落膽したりブリ／＼立腹して見たり、早く諦めて見たりなどしてはいけない。根氣よく何處までも粘り強く行くの外ない。すると最後はどうにか行き着くのである。

さてその民船に乗つて見ると、今直ぐ出る筈のものが更に何名とかの客が來るといふ豫告があ

つたので三十分ばかり遅らすと言つてゐる。飯屋の正元館の番頭が注意して呉れた銅鑼の時の時刻から見ると彼れ是れ一時間も遅れてやつと船出するに至つたのである。

船は前後に苦の側面が開いてゐる、内に座を占めてゐても多少邊りの景色は見られるのであるが、何分舷が高い。時折り腰掛から立つて見なければ他所が見えないのである。

やがてするうちに時折り田園の岸に船を着ける。百姓の漁師だの内儀さんが乗込んで來る。又學生らしき者が數人乗込んで來ると云つた形で、結局二十人足らずの乗合客が兩側に差向ひになつたのだ、船中が次第に賑かになつて來る。運河の岸は曳子の石疊の道が通じてゐる。兩岸には例の楊の並木だの、又茶種の畑、桑畑が一面に見えてゐる。

帆檣の先に高く綱が結付けられる、長さは彼れ是れ二三百尺もあるらしく之を強く引張つてゐるのである。胸に斜めに幅の細い板を當てその兩端に結付けた麻繩を脊中に廻し左右の手を振りながら足並み速く行くのである。船頭はたゞ漕いでゐるが、大體はこの綱で進むのである。曳子の足並みが速ければ船の進行は速いわけである、別段帆まで掛けて風力を利用することはしなかつた。これはこの日は風が無かつた爲めである。

船中の人氣を集めてゐる青年朱、尤の二人は頻りに茶目氣分を出して乗合客を笑はせてゐる。

名刺を呉れて、さうして「貴下の名前を承りたい」と言ふ。東京には自分の友人が早稲田にゐる。神田にゐると言つて學校の名前などを言ひ、頻りに日本に懐かしみを持つた話などを持出すのである。中には「醫專」に入つてゐるなど學校の種類の記事までも言つてゐた。

蘇州界限は教育の進んでゐる處であつて、青年達も割りに氣が利いてゐる。それだけに又いざといふ時には先走つた尖端を切るやうな手合も少くないのである。

青年達の一團はスイニンチャオ（善人橋）と大きな聲で船頭から呼ばれると其處で上陸した。碼頭の上から愛嬌を振撒いて「御機嫌よう、御健康を祈る」の挨拶の語を放つてゐた。左手に高く聳ゆる穹窿山の峰を仰ぎつゝ、船は益々西に向つて進む。山上には有名な禪寺があつてその白壁などが鮮かに見えてゐる。

山寺のそばには野火を焚いてゐるか白煙の蒙々と立つてゐるのが見えてゐる處など、話題にしながらか乗合客と四方山話に時を移し、光福の街に名のある旅館でどう云つたのが宜いかなど尋ねたりなどした。

やがて四時頃船は光福の碼頭に着いた。田舎街の趣として常に見る古色蒼然たる中に何處となく廢虚の如き趣もある。どうせ船着の場末のことであるからとたかを括り他の客の向ふ方へと一

緒に紛れ込み、だん／＼街の中央部へ歩を進めた。

さうして目貫きの通と思はれる處まで行く。路傍の人に郵尉の梅園に行く道はどちらだらうといふ問を發し、又この地に有名な柏因社の位置などを尋ねた。教へらるゝがまゝに何處で休むといふこともなくて、行きなり山手に向つて道をとり郊外の淋しい路を一人辿つたのであつた。

すると自分が路傍で路を尋ねてゐた時一青年が自分を遊瀝客であると知つたか、あとからのこゝについて來るのである。さうして山手に差かゝつた處で私が案内してあげるといふ事を言ひ出した。するとこちらは別に案内の必要もないと思つてたゞ宜い加減にあしらひながら歩いてゐる。すると、それが途中の或る店に立寄り此處はわしの家だと問はず語りに入つてゆく。

さうして親らしき人に、これからお客さんを案内して行くんだなど言ひ置いて相變らずのこの自分について來るのである。向ふでは案内人氣取りであるが、こちらでは一人旅のつもりであるので大して取合はないやうにして行つた。

そのうちに山下に森の見える、その森蔭に柏因社の文字が見えた。此處には司徒廟雪海亭といふのがあり、お客はゐなかつたが寺男が数名食事を攝つてゐた。

庭前に千年の昔柏樹に落雷があつて、その爲に一株の柏が四散してさながら七八間づゝ四方に

間隔を置いて立つてゐる。殆んど倒れた形で考柏の同じ年數を経たのが、同じ程度に枝を出して生ひ茂つてゐる。この四柏樹こそは古人も之に「凄樹」「奇樹」「古樹」「怪樹」の名を呼んで天下の奇怪なる現象としてゐるのである。親しく見るに、一方に木の肌は附いてゐるが、片面は幹の裂けたまゝの中味の趣を見せてゐる、その色は黒く落雷に焼けた面影がそのまゝ見えてゐるのである。

その一株は、その附け根の處が二三尺の大いさを有してゐて、落雷後の相當な星霜を経てゐることを物語つてゐるのである。

十四、善人橋の女強力

66 鄧尉の梅林如來花

太湖の東岸で名のある山は香山である。此に聖恩禪寺と云へる山門がある。この寺は俗にシユエモシヤン（女墓山）と呼ばれ、この界限切つての巨刹である。この禪寺を中心として、山腹山下のかなりひろい境域に珍しい大きな梅林がある。一と目千木と云ふところである。

梅花香ふ新春の頃は上海から蘇州からと觀梅の雅客の之を尋ね來る者が多い。彌生の頃は梅花の芳香は見ないが、その林中に如來花（木蓮）の美事なのがぼつり／＼とその綠樹の間に散點しその色が又鮮かで美である。遠く彼方を見渡せば太湖の鏡面は銀盆の如く輝き渡り、後ろには香山の峰が聳えて居り、之も言はれない雄大な眺めである。

山中人を見ず、たゞこの幽境に梅を尋ぬる孤客としては自分のであるのみで、その環境と云つたらまことに閑寂の氣を漲らせてゐる。暮雲邊りを鎖ちこめ山麓を一巡りするうちに、殆んど畦路

は足もとも判りかねるくらゐ暗くなつて来た。自分は西山の歸途、或る日黄昏時におそく光福の町に辿り着いたのである。その間、くだんの青年が後をニコ／＼顔をつくり、つけて来るのである。無論この青年は怪しい者ではない。けれどもさうその親切な氣持でついて来てゐるのでもない。斯くて大東旅館の前を偶然通り過ぎ、又福溪旅館の門前をも横切り、自分はその名前もなつかしい旅社へと足を運び、一番遠い尋梅旅社に着いたのである。

由來、支那の田舎はこゝに限らず、苟くも名勝と謂はれる處には何時もルンペンともつかず案内者ともつかない者がウロ／＼してゐる。足まとひになつて仕様がなぬものである。武漢の歸元寺、古琴寺邊りには殊にその足まとひがいくらでも澤山ついて来る。又南京あたりにしてゐるさい程ついて来るのである。

もし少しでもやれば又あといくらでも要求して来るし、一人にやれば、他の者が手を出して来る。これはモウ名所のつきものとして支那では遁れられない風情である。

けれども荷物のない客ならば之に頓着などする必要はない。蘇州の虎邱あたりに行くと、そこには麥藥で編んだ魔除けの團扇を持つた小娘が五人十人二十人と何處からか出て来て、つきまとふ。結局客と乙女とは根氣較べになるのである。特にうるさく感ずるほどのものでもない。

これは餘興であるとして見て置けば宜いのだ、がしかしどうかすると相當にうるさいものである。

67 尋梅旅館に小人を拂ふ

梅林を尋ねて自分は今こゝに尋梅旅館に投宿した。こはその名前の懐かしい爲めに参つたのである。それだけに思ひ出が深い。ところが例の足まとひが又何處までもうるさくついて来る。自分はこの超越して眼中に置かないことにして宿に入り、すぐ先づ主人に會つた。旅社の主人は蔡玉亭(五十歳)と云ひ、氣立てのよい首の太い中肉中脊の人であつた。

自分は大東、福溪の旅館を過ぎ行きて、この名前の懐かしさにこの旅社に尋ね來つたといふことを思つたまゝ述べる。ところが主人はひどく喜び、早速に足を洗ふ湯を運ばせたり、又熱茶を出させたり熱いタオルを出したりなど型の如きサービスに努めてくれるのである。

併し傍にゐる足まとひの青年に視線をやり、その心事を見て取り「宜い加減に取扱つておきなさい」と云つた言葉を軽く耳打ちするのであつた。酒手を與へよい加減に之を追拂ふ。あとで自分は主人に「どこでもよろしい。帳場に近い便利な部屋を自分に當がつて呉れないか」といふ相談をもち掛けた。

すると早速一室をきめて自分にその部屋を見せて呉れる。自分はそれに取決めた。併しながら逗留中應接間で主人並にその來合せてゐた主人の友達など、茶を飲み筆を執り互に語り合ふことの方が多かつたので部屋に歸することは餘りなかつた。

主人の言ふには、尙ほこの後ろに流水に臨んだ見晴しの好い上等の部屋があります。其處には壁に名畫も掛つてゐるから見ませんかといふ。そして之を見せて呉れた。主人は聊か書畫についての自信のあつた人と見えて、頗る得意氣に之を飾つてゐたらしかつた。その名畫は驢馬行の古趣のあるもので、如何にも風韻に富んだ自慢に價するだけのものであつたが、その落款は今忘れが、乾隆、郎世、寧あたりの畫風のやうであつた。主人はどう云ふ積りなのか、頻りにこの部屋へ代ることを勧めて呉れた。けれども、餘り奥まつて居る部屋であつたし、又部屋の設備など氣にする自分でないから之を斷つた。百方すゝめて來たが之を斷つて自分は更に應接間に歸り、主人の友達を加へ三人、この界限に於ける名勝舊蹟の指を屈すべき處など語合つた。その時主人の示してくれた所に依ると、そこに有名なものがかれこれ約十ヶ處ばかりあつた。

- 1、司徒廟(柏因社)
- 2、玄墓山
- 3、老虎洞
- 4、石樓寺
- 5、石壁寺
- 6、三觀堂
- 7、銅觀音寺
- 8、虎山寺

9、虎山寺對面塔山下七眼泉

10、五雲洞

この中には既に自分の見た處もあり、又豫て耳にしてゐる處もある。興味を以て耳をそば立て教ふるがまゝを聞いてゐると、主人の友達といふのは特に地方の歴史地理に詳しく、又文字のある人であると思へ、文學的にそれ／＼よく説明して呉れたのである。

尋梅旅社で部屋は取極めたものたいてして荷物がある譯でもなし、殆んど主人のゐる處にのみ來てゐて、その應接室で色々打解けばなし、四方山話に耽つてゐたのである。假令川に臨んだ奥の上等の部屋が當がはれて見たところで、結局その部屋にちつとして居れるわけのものでなし、又夜睡眠をとるにして見たところで、寢る上には寢臺さへあれば澤山である。何も變りはない。寧ろ主人に近く又帳場に近き便利な部屋を自分の客室としてゐる方が増しである。

主人の話に依ると、同じ宿の泊り合せてゐる客の中に上海三井の買辦をしてゐる朱翁父子がゐますよとのことであつたが、丁度部屋に合はせなかつた。やがて食事時になつて自分は近處の茶館に出掛けて行つた。こゝは太湖楊灣の酒樓と同じ造りで奥まつた部屋に幾十人となくズラリとあちこち八仙卓を圍み、盛んに酒席酣なるの光景が見えてゐた。

ところが偶然にも自分の席の隣に三井のそれらしい父子が見えたので、試みに言葉を掛け「兩

位はサンチンヤハハン（三井洋行）のかたでありませんか」とたづねて見た。ところが果してさうであつた。そこで共に卓を圍み酒盃を擧げ、この地方の名勝舊蹟或は民情風俗の興味ある談話に移ることが出来たのである。その話のうちに、この地方には海賊土匪の騒ぎは殆んど聞いたことがないといふことを言つてゐた。

恐らくこの地は冬の梅の季節に尋ね来る雅客のあるだけで、不斷は餘り賑つてゐない處らしく思はれた。

食後市中の暗路をあちこちとひとり歩いて見たが、片田舎の街のことゝ別段變つた特色は見ることが出来なかつた。しかし翌朝老僧の雲水姿で足の運びもゆるく落付拂つた態度で、阿彌陀佛を、悠々唱へてゐるのを路上に見た。前日船から上つた時にもかう云つたのを見たが、それと同じ式の僧である。墨染の法衣を着け、草鞋を穿き、腹の所に褙を繋り付け、之に鉦を置き、時折り名號を唱へつゝカーンと叩いてゐるのである。

さうして後ろにお布施を入れて貰ふ箱を付けてゐる。何處までもゆつくりと歩を運んでゐる。そこが天下の見ものである。街の人は自發的に之へ金を投入れ喜捨のしるしとしてゐる。この風習は江南地方各所で見ると、日本のやうに老僧が門並みに立つて經を唱へ、一々門並みに乞

食坊主の態度を執るやうなことは向ふではしない。そこは日本の托鉢僧よりもよろしい。恐らく本式のお彼岸の坊主のつとめ振りにはかうあるべきであらうと思ふのである。

太湖の湖畔は一帶に海賊の出沒の恐ろしい噂を生んでゐるに拘らず、この梅林に近き光福の街はかくの如く一切衆生の冥福を祈る山僧の姿までも見られ、如何にその春色の優美に出来てゐるかこの一事から見ても察せられるのである。

68 五雲洞物語

尋梅旅社で教はつた五雲洞の山は、香山と云ひ、そこから程遠からぬ處に聳えてゐる。松樹の茂林繁き山である。一人旅で誰れ人を道連れにするといふこともなく、茶種咲く畦路を飄然と立ち、田園の百姓に尋ねくこの山の麓に差かゝり林下の小徑を進むのである。

彼れ是れ行くうちにゆくりなく、一人の墨染の衣を着けた老僧に會つた。自分は之に尋ねた。「この山に五雲洞と云へる禪寺があると聞いてゐるがどちらでせうか」と訊いた。ところが「この山の上です」と云ふ、「路はどちらへ取つたら宜いでせうか」と言つたら、「この路を右手にとつて上へ登ればわけはあませぬよ」と云ふ。「悟空大和尚といふかたがその寺にゐらるゝ筈だ

が」と言つたら、「それはわたしです」と言ふ。これは又不思議にも偶然に出つくわしたものである。双方でニコリと笑つた。

丁度この時の山中の問答はさながら唐の詩人の句にあるやうな、頗る風流たつぶりの場面であつた。

それは「松下童兒に問ふ、言ふ師は薬を探りて去る、唯此の山中にあらん、雲深くして處を知らず」と云ふのである。

尋隠者不遇 賈島

松下問童兒 言師探藥去

只在此山中 雲深不知處

この詩の趣はさながらこの五雲洞の山下で、いま自分の體驗したところを吟じてくれてゐるやうである。偶々運好く大和尚に會ふことが出来た、しかし路が遠つたならば之に會へなかつた筈である。そうして立ちばなしで暫し山門を尋ねるに至つた次第を述べた。

和尚は喜び自分を懐かしく迎えて呉れた氣持が顔色に讀めたのであるが、「據所ない用があつて

今光福の街まで行つて來るところだから、貴下は寺に行つて待つてゐて呉れませぬか」と言ふのである。

そこでよろしいと云つて、中腹まで登る、春霞棚引き松下暖く、はるか麓の里は桃花咲亂れ、谷間にまでズツと打續いてゐる。霧の間から、何れの村の春の祭が目出度い太鼓などを叩いてゐる響が聞えて來る。谷深くして其の處を知らずと云つたわけで、春色最も濃やかにその趣は本當に詩的であつた。

それで自分は誠にこの景色を面白いと思ひ、寺に尋ねるのを暫くやめて此處で坂の途中、和尚の歸つて來るのを待たうと云ふことにした。そして樹下でペンを走らせ感想など書き連ねてゐたのであつた。時折り寺男の石徑を横切る者あり、恭しく自分に挨拶をして行くところはゆかしいやがて二時間ばかりすると和尚は山へ歸つて來た。導かるゝまゝに共に山門に入り香の高い熱茶を請ぜられた。又圓い蓋付の容器に山の點心幾種類かを出してもて成して呉れた。

自分は興が湧いたので「何か一書書き残して行きたいから筆紙を」と言つたところが、和尚は大聲をして「寺には紙など無い」と言ふ、「併し硯に水くらゐはある」と言つて出した。墨は六寸大の美事な曹素功の漱金であつた。硯は四、五年も使はずしまつてあつたやうな煤けたものであ

つて、磨面がひどく窪んでゐた。筆は秃筆の古いのが一本出された。

紙はあちこち探しに行つたやうだつたが結局無いと言つて居つた。紙はこの寺に無いから壁にでも書いたらどうか」とひどいことを言ふ。障子は例の貝の明り障子であつて書くことが出来ない。壁と云つて見たところで山寺のことでひどい煉瓦の古ぼけたものが積みかさねてあるだけであるし、逆も書けたものでない。持ち合せてゐた塵紙に自分は一句書残したのであつた。恐らくこの山寺では廁にも紙は用ひないのであらう。屎鑿と云ふものが用ひられてゐるかと思はれた。昔は江南の禪寺に屎鑿と云へるものがあつて、これは板の細長くした一種の棒である。つまり籠の如きもので、それは梓の木で出来てゐると謂はれてゐる。自分はまだ山寺などで未だ之を用ひた現場を見届けたことはないけれども、かう云つたものがあれば紙は無く済むわけである。木の葉、草の葉など用ひる處もあると聞いてゐるが、まさか五雲洞の和尚にそこまで聞くことは遠慮したのであつた。

支那の片田舎で普通の農家、又山郭あたりの住みを見るに、殆んど家庭に紙の無い家は珍らしくないのである。日本人の思ふてゐるところとちがひ、論語一冊あるわけでもなく、書物の類など思ひもよらない。偶に迷信の方から壁に神位を描いた黄色の紙などの貼られてゐることがあれ

ば餘程そは宜い方である。

中流の農家であると、五寸大の馬糞紙を薄くしたやうな塵紙が廁にぶら下げられてゐることがある、けれどもこれは必ずしもあるとは決つてゐない。こは山寺生活あたりの質素であるといふことを示すよりも、太湖そのまゝの趣は正に之を以て見ても想像し得られるのである。

山は静かなること太古の如しと謂はるゝが、正に五雲洞の如きは太古式の禪寺である。その鐘樓の處へは時折り麓の里から太鼓鉦などが相變ず響き来る。そのあたりの趣は禪寺の幽趣を一層雅かならしめてゐるのであつた。

和尚は自分を耳の遠い人間と思つたのもあるまいが、殆んど人を嗚りつけるやうな大きな聲で話をしかくるのである。

併しそれだけに心は至つて素朴で、殆んど愚直に近く、寺内を案内すると言つて本堂から倉裏に至るまで見せて案内してくれる。さうして石垣の下の幽徑にある一尺大の水溜りを指して「この寺が一番自慢にしてゐるのはこの清水です」と云ふ。指をさし入れて見ると、その泓冽なること氷の如くえらく老僧は之を説明して居つた。まことに罪のない線の太い大自然そのまゝの和尚であつた。忘れられぬ大陸、海賊村に近いこの五雲洞の大禪師であつた。

梅林を尋ね五雲洞の山寺に詣うでる遊客はとかく變りだねの方である。これらは蘇州へ向ふ路草を食ふくらゐのところに過ぎないのである。自分はそれからスイニンチャオ（善人橋）の運河へと路をとり蘇州に運河によつて出る豫定を立てゝゐたのである。

梅林と云ひ、禪寺と云ふ、皆太湖を畔の風流純朴な氣分を何處となく見せてゐる。片田舎の力強い趣がその間に察せられるのはうれしい。人は蘇州の附近と云へば總べての風物が優美であり上品であるものと決めてゐる。ところが、必ずしもこの附近の風物はさうばかりでないのである。五雲洞から麓の里に下り、松下桃林の間に來ると、尙ほ里の奏樂は耳朶を樂しませてゐるのである。がしかしそは何處の里であるかは判らない。右に左に霞は棚引き、雲雀は空に鳴く。路傍ボカ／＼とした春色はます／＼濃厚である。十里の麓の路を穹窿山の方へと下り左の麓に沿うて行く。

此處に又山僧に出つくわした。同じやうに鉦を胸に抱き、春の彼岸のつとめをしながらあるいてゐるのである。路傍試みに自分は挨拶をして見た。すると僧は叢間に荷物解きおろし汗ばん

だ額を拭うてゐるのである。旅僧の如くにしてさうでなく、全く彼岸の佛事を修めてゐる禪僧と見られた。

自分も僧侶氣分になり暫し綠蔭に言葉を交へたのである。スイニンチャオ（善人橋）には尙ほ三支里はある。どちらから來られましたなど云つて聞くのである。僧侶とわかれ暫し行くと、路傍の綠林の中にこれは又珍らしい石人石馬石羊など四對ばかり隠顯してゐるものが見出され、華表の丈の高い柱までもが半天に見えてゐた。綠蔭に入り之を撫した。この邊りなほも何處の里からであるか、太鼓、胡弓など奏樂の響が頻りと聞えてゐるのである。

穹窿山下一帯この邊り田舎の風物は、古風な中に何處となく純朴で力強き氣持が漂うてゐる。石人石馬は云ふまでもなく古人の墳墓の前に建てられたもので、今はその誰れ人の墓であるかは知るに由なしであるが、かう云つた片田舎にこのやうな大規模の墓陵とその墓道を見ることは珍らしいわけである。

この地方の方言音のことであるが土民たちが善人を「スイニン」と云つてゐる。百姓などの云ふ發音の上にも善人橋のことを「スイニンチャオ」と言つてゐる。この善人橋は運河沿ひの碼頭のある處であつて、蘇州に通ふ一錢蒸汽が此に午後一時頃になると來るといふ。自分はそれを聞

きその水郷へと道を急いだのであった。

すると茶種咲く田園の間に、女強力の八人十人と云ふが縁色に塗り飾られた美しい轎子を擔いでやつて来るのに出つくわした。いつかたの名門の家族の一行であるか、主人、夫人、子供、老人などの外に護衛の武装した兵隊二人までもがこの女の強力に擔がれてゐるのである。最後の二人の護衛は、一行から著しく遅れてゐて、見るうちに二丁三丁と離れて行くのである。兵隊であるから女の身に擔がせたりするよりも、兵隊は兵隊らしく巻ゲートル姿で歩いた方が宜からうと餘計のことながら思はれたのであるが、これはやはり名家の護衛といふ意味で大いに優遇されてゐる形をそのまま氣取つて見せてゐるのであらう。

女強力の足は大きく、他の地方の婦人のそれとは全然様子が違つて、如何にも勞働本位に出来てゐるのである。又その足の運びも活潑であつて、男勝りの氣象がよく現はれてゐる。これはさながら南支那廣東の女、又福建の閩江に嫁ぐ女船頭などの話と好一對であつて、支那の片田舎には時折り斯うした女強力が隨所に發見せらる。定めしこのあたり、尙海賊村に程近き水郷のことゝて斯う云つた荒削りの女のみゐることも、場所柄似合はしく感ぜられたのである。

碼頭水邊、老樹の木蔭に自分は蘇州行の船を待つてゐたのであるが、なか／＼船は姿を見せな

いので、その附近の風物を時間潰しにあちこちに見てゐた。すると丁度その木蔭に百姓家の娘二人が腰掛、凭り、四本足の棒のついた臺を前に頻りと何か手仕事をやつてゐるのである。見ると、黄色の絹の裃に張られて、之に筆で龍の輪廓の取られたのを、縁の絹糸もて刺繡してゐるのである。

そのふたりは兄弟らしく、姉は十四五、妹は十一二と言ふところ、如何にも仲よくその仕事に餘念なくやつてゐる。時折りその妹のする處を見てゐて、龍の鬚の處の刺し方がまづく出来る姉が教へてやつたりするところなど、如何にも可愛く見られる。しかし子供だものだから少し熱心によつてゐるかと思ふと、裃を放つたらかきにして遊びに走り出し、暫しそこにゐなかつて見たり、又すぐ歸つて来ると云つた風である。

その隣にはこれも十四五くらゐの女の子が、箆に銀紙の積んだのを持つて来て、前に臺を置き頻りにユワンパオ（元寶）と云ふ馬蹄銀の形したものを造つてゐるのである。この折り紙は誰れしも知つてゐるお寺や塔の前で焼く元寶である。

かう云つた風にこのあたりは家庭に在りて、それ／＼子供ながらに稼いでゐる。かう云ふ所は餘程家内工業として行届いてゐる所が見られるのである。村外れの家では瓢箪型の細かく細工に

作られた木片を紅く染めてゐるものがあつたり、又之に絹糸をまきつけ包み、且つ結んでゐるものがあつたりなどする。かやうにして蘇州界隈の女は、屋内となく屋外となくいかにもよくかせいでゐる。全く稼ぐに追付く貧乏なしとばかりに、可なりよく勤勉振りを發揮してゐるところが見られるのである。

70 暗夜の常熟碼頭

太湖の湖上海賊村の歸り路は、水郷のところ／＼山寺あたりへ路草を食つてゐた。そんなことで意外に延び／＼となつた。

善人橋から木瀆靈嚴山下を曳船で運河の歸路を急いだ。木瀆の碼頭は石工の仕事にいそしんでゐる者が多く、又その巷や橋下の雑沓は言語に絶するばかりであつた。

といふのは春の行樂をあさるべく、靈嚴山詣でとふれ込んだ着飾つた紳士淑女の客があちこちとみつしり、その一部は我が船にも雪崩れ込まうとするのである。船は満員以上の満員振りを呈し、更に民船を後にくつ／＼けて曳いて行かうと云ふさわぎにまでなつた。出帆の汽笛の鳴つてゐるを耳にした。麗人どもが又どつと群をなして船へ押掛けて来る。

船は既に岸を離れてゐる。すると大聲して「着けて呉れ」と連呼するものがある。船頭は百方着けようとしてゐるが他の船が間に挟つてゐて動かない。中々むづかしいから駄目だと云ひ返してゐる。絹の手提袋を提げた品のよい淑女であつたが、どうするかと見てゐるに岸のあぶない手摺の下から屏い足を出し、靴をのぼして無理にでも船の屋根へ届かせようとしてゐる。

そのときの光景は天下の見ものであつた。中には碼頭の石垣から船へ飛乗らうとする者があり又人に無理やり抱かれやつと乗込んで来た者もありした。この船を逸したとしたならモウその日に蘇州歸りの便はなくなる。そんな譯で斯うした雑沓を見せたのであつた。太湖に近き水郷に麗人共の斯うした思切つた振舞ひを見せることは日本あたりでは考へられない所であるが、やはり斯う云つた振る舞ひの中に見てくれも何もなく實に恐ろしい勇猛な氣分が見えてゐるのである。いくら蘇州の女と云つても他の地方のそれと同じやうに、その家庭に歸れば大家族の手合どもを尻目に見て、之を統制しをさめて行く。その複雑な家庭の切盛りから外交的の事務に至るまで口八丁手八丁と云つた仲間が多いのである。その碼頭から出て行く船を呼び止めるくらゐのことはさうした女性たちにとつては何でもない。さうした大きな聲で嗚散らしてゐると流石の船頭たちも竿を持つたまゝ船ばたで縮み上つてしまふといつた状態なのである。